
続瑠璃色紀

川中流一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続瑠璃色紀

【Zコード】

Z3157P

【作者名】

川中流一

【あらすじ】

千年続く貴族の世に、世継ぎとして生まれた青年、天。世にも不遜な父親と世にも美しい母親に振り回されて、花魁に恋する青い春。仮想19世紀末にあつたかもしれない歪つな純愛ストーリー。

前作あらすじと登場人物、おまけ的設定

読んでも読まなくても読み飛ばし

【扇子】って？

貴族が統べる世。かつて『扇子』と呼ばれる特殊な奴隸制度があった。奴隸身分の美しい少女達を貴族子弟の小間使いとするもので、表向きは『扇子持ち』という意味からの名称とされている。しかし、その本来の意義は結婚前に妻との初夜に備えるという因縁である。通常、結婚後には用済みとしてその命を奪う。

近年では完全に人権を無視され、俗に『情欲を扇ぐ子』と解されて使い捨ての愛玩人形として扱われていた。貴族でも最上流層しか持たず、市場では流通しない程の高値で取引される。その為商品価値の向上に拍車がかかり、貴族にさえ覆い隠された非情な手段によつて『人形』となる『躰』が行われていた。『扇子』となつた少女達は皆、意思を持たず決して笑わないと言われる。

【前作のあらすじ】

瑠璃という異国の風貌を持つ『扇子』を手にした大貴族の跡取り、霧崎千次は、いずれ破棄しなければならない自らの『扇子』を愛してしまう。しかし霧崎家を継ぐ者としてやがて皇女との結婚を迎える。それでも瑠璃を妻として愛そうとした千次だったが、「扇子を全うしたのでもう死なせて欲しい」と泣く瑠璃。定めから逃れず、そして瑠璃の笑顔を見る為に千次は「撻そのものを壊す」決意をした。かくして奴隸制は廃止され、瑠璃を妻としたのだが。。本話は、時系列としてはその後に続く。

(瑠璃色の奴隸 <http://ncode.syosetu.com/n2897m/>)

【登場人物】

霧崎千次：天の父。瑠璃を溺愛するあまりに「つい」苛めてしまうのが今の悩みでもない悩み。世に対して廃類的な見方を持つが、母を亡くした幼少時に既に貴族として生きる覚悟を決めており、家を守る心も審美的な性格もその死に由来するのかもしれない。

（【白庭】 <http://ncode.syosetu.com/n2519/>）

瑠璃：天の母。血は繋がっていないがそのことを天はまだ知らない。異国の血を引いているようで、銀髪碧眼を「月と空のようだ」と愛でられる。元は千次の傍仕えだったが、見初められ糺余曲折を経て妻となる。その転身に未だに自信を持てず、うつかり何か口走ると「お仕置き」を受けるので気をつけている。なんだか可哀想。でも天曰く「能天氣」

天：まともな奴ほど苦労人。年は15程を想定している。自分の名前についてさりげなく意味を引いてみたら「若死にする、少年のうちに死ぬ」と言う記述を見つけ、以来最低な父親だと思っている。手に取った瞬間に名づけられたらしいが「俺の一瞬は人の三年だ」と言うので三年間分考えられた結果の名前……であつてほしい。

ひいじいさん：天の祖父。本名不明。瑠璃を千次に与えた張本人。どこか飄々としており千次が唯一目置いている人物。しかし黒幕にはならないのでご安心を。引退した良き理解者。でも出番はありません。

じいさん：天の祖父。本名は総一郎。撻に厳しくまさに貴族の鑑。と自負している。放蕩な息子（千次）に嘆き天の当主教育に入れる。散々天を本家に戻せと言っても聞かなかつたくせに元服前に

は戻し、しかも基本的な勉強はわりと押さえていたのでちょっと千次を見直している。勿論口には出さないが。しかし本家に戻した大きな理由は瑠璃と引き離す為で、勉強も勝手に瑠璃が教えていたことは知らない。

瑠璃が最も怯えている人物だが、淀に忠実なだけで別に瑠璃を卑下してはいない。手を伸ばしていたので「醤油を取つてあげた」が「触るなと取り上げられる」という勘違いレートが度々起きているだけである。息子は気づいても訂正しない。

竜・竜之介。元は霧崎家の護衛士だったが、瑠璃を連れて逃げようとしたために罰を受けた。罰は千次に命を差し出す事。要するに言いなり。瑠璃とは幼馴染のような関係。隠されていた血縁関係があるらしく、霧崎本家の血を継いでいる。その為千次に当主を押し付けられたが、認められず今は東国の治める代理をしている。

光次郎：千次のかつての悪友。（【琥珀色の友人】 <http://ncode.syosetu.com/n4656m/>）

ちよ・光次郎の傍仕えだった。瑠璃とは「ちよっと綺麗やからつて調子乗らんぞ」といってくれる「つるせーです、不良品」と言つて合づ仲。

えりか・千次の元妻。ということは天の実母。千次とは昔「恋仲だつた」らしいが、妻としての愛を受けられない不満から瑠璃を毒殺しようとしたし、千次に離縁を申し渡された。

（【若草色の皇女】 <http://ncode.syosetu.com/n6301m/>）

【身分】

大きく皇族、貴族、平民、奴隸に分かれている。

皇族：天皇家の血を引き位としては本来貴族の上にある筈だが、実質は政治に関与できずお飾り状態。表立つては軽んじられることがないが、独自の財源を持たず、姻戚関係のある貴族に依存している為に存在力は弱い。

貴族：最上流、上流、中流、下流と家柄による上下関係があるらしい。朝廷と呼ばれる場で政治を取り仕切つてはいる。茶、花、和歌なども教養としてある。茶が社交の場であつたりと室町時代のものとは完全には一致しない。

平民：「皇族と貴族以外の下々」と一括りにされているが、その中には僧、武士、商人、農民などが含まれる。一括りにされている為この間での差別は文律上は定めていない。

奴隸：今は廃止された。元々は貴族特有の所有物であつたが直接貴族が関わることはなく、領地に附属した最下層の労働力として子孫永劫死ぬまで酷使されていた。

例外は『扇子』として選ばれた時であり、貴族の子弟に愛でられれば美しい着物を着て食べものにも困らないとして少女の憧れだった。実際はその半数以上が過酷な訓練中に命を落とし扇子となつても長くて数年しか生きられなかつた。

【霧崎家】

全ての貴族の頂点に立ち、一族支配に近い形で政治が行われている。代々この家の当主がこの世を統べたと言つて過言でない。しかし比較的早い世代交代が為され、聞くところによると「当主は家の意向とやらに沿う操り人形」らしい。独裁支配と言つわけではなく、幼い頃からあらゆる英才教育がなされて既にある種や慣習を遵守して政治を行う。

「淀による秩序」により絶対的存在を保ってきたので、それを覆す事は自らの地位を揺るがすことであり、当主こそが淀の番人でなければならない。

ちなみに

【霧崎家の歴史】

霧崎家の興りは元を辿れば千年前に遡るらしいが、初めから強大な力を持つていた訳ではない。むしろ都から左遷され、面倒な对外関係を押し付けられて長らく政権争いからは蚊帳の外にいた。しかし霸権を握っていた貴族とその対抗勢力との間で史上に残る大きな戦が勃発した時、遂に転機が訪れた。国内防衛の軍事力と貿易による経済力で着々と力をつけていた先祖の貢献により争いは終結する。以降、弱体化した両勢力に代わって霸権を握ったのだつた。

都に返り咲く前、積年の労を噛み締めその御崎の地で霧崎という氏を新たに定めたのが興りである。この地を霧崎発祥の地として祀りに行くのは今でも霧崎家の年中行事となっている。

この由縁もあってか特に外交経済の職は必ず霧崎家が押さえ、教育でも代々その手腕や知識に力を入れている。天が日々ガリ勉しているのはこの為である。普通、貴族の子弟は「学問」まではせず、和歌や漢文にほどほどに励むゆとり教育がされている。また、霧崎家ですら武芸まではしなかつたが、これは父親の代に父親の要望で取り入れられたらしい。

一・祝言

ひつそりと佇む家屋を訪ねる。玄関口をがらりと開けると、板敷きに正座をしていた女が微笑み深々と礼をした。

「お帰りなさいませ、旦那様」

それでもいいと笑ってくれた。

奴隸制は廃止した。家主を譲った。妻にした。だが現状現実は何も変わらなかつた。認められなつた。幾ら力づくで勝ち取つても、それだけでは土の底まで根付いた因習は変わらなかつた。未だに奴隸元奴隸への差別は歴然としていて、家は自分がいなければ立ち行かず、祖父によつて引き止められた皇族の元の妻が家にいる。女は孕んでいた。それでも追い出すこともできなくはないが、元は奴隸のあいつを今のおの家に妻として迎え入れるのは風当たりが強すぎて、可哀想な思いをさせてしまうだらう。

結局、離れたこの家に匿うように暮らさせて、夜通つては朝実家に戻る。だがこれでは。

「旦那様、召し上がりませんか」

箸を止めていた自分を伺い見て鈴の鳴る声でそう言つた。

「いいや、皿い」

芋の煮物を箸で一口に切つて口に運ぶ。

結局、何も変えることなどできないのか。

これではあの時祖父が提案した通り「平民の身分にして妾として匿う」と事実上変わらない。あの祖父は、そこまで悟つていてそう言つたのだろうか。あの女を家に引きとどめたのも、俺が足搔くことの無駄に自ら悟り受け入れるだろうと見越した老成の達観なんか。

白い肌衣の女を布団に抱いて無くなつてしまいそうなほど華奢で

小柄な体を抱きしめる。

足搔いても足搔いても元から変わらない。むしろ足搔いた分だけ捩れて戾されて、奇妙な形に進んでいく。

「旦那様…？」

これだけが、腕の中のこれだけが俺の足搔いた証だ。これの為なら他の何が捩れようと構わない。

「笑ってくれ、瑠璃」

女は口元を微笑んでみせた。

「お前もそういう作り笑いが多くなったな。前は偽り無く笑つたが」「旦那様が幸せでないとるりは笑えないのです」

「俺は幸せでないか」

「とても辛そうです、旦那様」

「そうか」

男は腕を解いて「ごろんと仰向けになつた。

「俺も、お前が笑ってくれなきゃ笑えねえよ……」

「おめでとうござります」

朝方帰れば日々に祝いの言葉を述べられて、ああ、遂に産まれたんだな、と知った。別離の言葉を述べて以来会つていなしの後に孕んでいたことを知つても気にもからなかつた。最早当主でなくあいつが妻でないことは、家の外の者どころか中の者でさえ知らぬ振りだ。「妾を寵愛し妻に酷薄」とそう外でも中でも身内にでさえもそう思われている。

「御嫡子出産」の噂は広まつて、あいつの耳にも届いてしまうだろう。そんなことを噂から突然聞かされて、あいつは何を思うだろう。どんな顔をするだろう。

いつになろうとも、あいつは子を産まないから。

祝言が次々と届いて家は幸事に浮き立つ、ついでにして家を出た。一体何が田出たい。

「おめでとうござります」

につこうと、あいつは笑つていつもより嬉しそうに出迎えた。
ほくほくと差し出してきた赤飯の茶碗を俺は割った。

「お前まで、一体何が田出度い」

がしゃんと割れた音に怯えたように声を震わせる。

「旦那様 るりは旦那様の御子が生まれたのを本当におめでたく思つて、」

「本当にそう思つてゐるのか」

睨み付けるようになつてしまつてゐるだらう。鋭くあいつの表情を捉えて言つ。

「嘘ではあります。御子が生まれるのはとても、とても幸せなことです」

少しだけ睫を伏せた女の肩を掴み胸に閉じ込めて抱く。

「ならお前が俺の子を生めよ……」

「ごめんなさい、旦那様：るりはもつと頑張ります」

そう言つた女をきつく抱きしめる。

「すまない、瑠璃。そうは思つていない。俺はお前がいれば他は望んでいない」

顔を持つて哀しい淡色の瞳を見つめる。

「だから何も考へるな。考へないでくれ」

そうして深く口付けた。

そういう施術をされていたらしかつた。土に埋もれていた因習を引きずり明かす内に吐き氣がするような事実が芋づるのように掘り出でた。例え関知しないものであつてもこれほどまでに厭わしいものは全て貴族の為に作られたものだつた。人間を加工して貴族の

為の人形を製造する工場と言つていい。人形は笑わない。人形は意
思を持たない。 人形は孕まない。

無駄ではない。

少なくとも、そんな狂った制度を壊してやつたのだ。
例え、何も変わらなくとも。

一・母親

ねんねんこりつよ、おこりつよー

子守唄に旦を凝らした。いつもより早い夕闇の中、縁側で赤ん坊を抱いて揺すり歌つている女がいた。そんな馬鹿な、と思って急いでがらりと戸を開ける。縁側のある部屋に行くと、吃驚して慌てた様子の女がいた。

「おかえりなさいませ、旦那様」

「先の子はなんだ」

部屋をぐるりと見回すが何もない。ただ、女が薄桃の肌掛け布団をぎゅ、と握つただけだつた。それは先の子を包んでいた。夕焼けに染まる空色の瞳と一時時が止まつたように見詰め合ひ。鳥が力ア鳴く。

「ごめんなさい」

震えた声が静寂を破つた。

「何故お前が謝る」

「るりが旦那様を辛いお顔にさせている……」

「俺はお前がいれば他は望まない。だがお前は俺の子が欲しいんだな？」

「それほど大きなことをるりは望んでいません、旦那様。とてもいけないことです」

「じゃあ何故子を模して抱いていた」

「そ、それはただ少し、考えてみただけなのです。もしもるりが…」
女は口を噤む。「それだけです、旦那様」と言つた。

「だから考えるなと言つただろう」

「女を抱いて男は言った。

「御免なさい、旦那様」

「もうお前は何にも謝るな。分かつたな? るり

「はい、旦那様」女は小さく返事をした。

子の生まれて少し落ち着くと早々に女は里帰りした。というのは名田で、実質子を取り上げて実家に帰らせたのだった。子は跡継ぎとしてこの家で育てる。

男は寝る子を見た。似ているそうだが自分の子という実感は無い。決まつっていたことなのに女は随分取り乱したそうだが、何故女は子に執着するのだろう。とはいえる自分は他に女を娶る気は無いから自分の血を宿すのはこの赤ん坊だけで、これは家の為に必要だった。自分にとってはそれだけだが

『ねんねんころりょ』

菩薩のように穏やかで優しげな空色の瞳を想い出す。男はそれを抱き上げた。

「え」

嬉しそうに赤ん坊を抱かせてもらっていた女は男の言葉に驚いてきよとんとした。

「お前が育てる、瑠璃」

女の顔はきよとんとするばかりで、何も理解できていよいようだつた。

「けれど、この御子様は」

「俺の子だ。そしてお前は俺の妻だ。何が悪い」

誰にも文句は言わせない。

「けれど、るりが旦那様の御子をお育てするなんて、それはとてもいけないことです」

「嫌か」

「嫌ではありません! そつではありません。ただそれはるりにはと

ても身に余ることなので

「あのなあ」

男は女の細い肩を強めに掴んだ。

「もつと堂々としたしろよ。誰がなんと言おうと、お前は俺の妻なんだ」「旦那様…」

「お前述が、ただ一時の戯れだと思つていい。お前ですら俺をお前の夫と認めてはくれない」

「けれどもりは奥方として旦那様に何のお役目も果たせないのです」「女は顔を伏せて畏まるように小さく言った。

「役目とはなんだ。家柄で支えることか。子を為すことか。妻として表に出して自慢になることか。　全て薄っぺらだ。この世に価値など見出せない。ただお前だけが俺の安らぎだ。お前がいるから俺はまだ俺を保つていられる。お前は俺の在りかなんだ」

女を見下ろす。

「お前が役目を果たしたいと嘗つのなら、これを育ててみる。大勢の召使にかしづかれて物心の無いうちに翳りと考えを染み込まれる、貴族の人形をわざわざ作る必要は無い」

女の抱く黒髪の子を見下ろす。

「母親の温もりに育てば、少なくともいつも心の冷たい人間はできないだろ?」

女は瞳を真っ直ぐに、訴えるように男を見上げる。

「旦那様は冷たくはありません。るりにとても温かくしてくれます」「男は必死な様子にふ、と笑って女の頭に手を置いた。

「できるな?瑠璃」

「　はい、旦那様。るりは必ず旦那様のように御立派にお育てします」

女は涙ぐんでいた。

「泣くな」

「これは、嬉しいのです。るりが旦那様の御子を育てるなんて、本当にいるのは幸せです」

「名は天だ。お前が母親だ」

「はい」返事をして自分の腕の中を見る。

「天、お母さんですよ」

女は幸せそうに小さな赤ん坊に微笑みかけた。

三・子守

ねんねんこひつよーおひこひつよー

がら、と襖が開かれて子守唄は止んだ。

「お前、あやしたらすぐに来ると言つたじゃねえか」
女は嬉しそうな表情で振り返った。

「旦那様、見てください。天がるりの腕で寝付いたのです」

「いいから早く来い。俺は待つのが苦手なんだ」

「あ、はい。すぐに、旦那様」

からりとまた引かれた襖に女は赤ん坊を籠に寝かせて少し急ぎ足でぱたぱたと襖へ行く。「おやすみなさい、天」と微笑んだ。

深夜、ほあほああと泣き声が聞こえて女はもぞもぞと動いた。
しかし起き上がりかけて手首が掴まれた。

「いい。放つておけ」

「旦那様、そういう訳にはいかないです。天は赤ちゃんなので」「女は立つて行つた。幾晩目のことか、ち、と男は舌打つ。間もなく泣き止んで、暫くして冷えた体がもぞもぞと入つてくる。一度目に起きた時、男は「お前は寝ていろ」と言い立つて行つた。

「泣くな」

赤ん坊を無感情に見下ろすと、余計に大きく泣き出す。ぐい、と顎を掴んで睨める。

「一度言つて判らねえか」

しかしその手を諫めるように白く細い手が被さつた。

「旦那様、」「おろおろと遠慮がちな目で見上げてくる。

「天は赤ちゃんなので許してください」

「嫌だな。煩い。今度泣いたら屋敷に戻す」

「旦那様、許してください。赤ちゃんは泣くものなのです」

「やうだな、俺は甘く考えていたようだ。やはり使用人にやりせよ

う

「るりではやはり駄目なのですか……」

「そうじやねえ。可愛いお前を煩わせたくねえ」

男は女の顔に手をやる。

「ほら、お前だつて隈ができちまつてるじゃねえか。可愛い顔が台無しだ」

「旦那様、後少し、後少しするつに任せてしませんか。るりは頑張りますので」

「だから頑張らなくていいって言つてんだよ。それより俺を慰めろ」「どちらもるりは頑張ります、旦那様」

はあ、と男は溜息を吐いた。

「お前に必死になつてお願ひされると俺は弱い」

そう言つて布団に戻つていった。

そつは言つても女はいつも眠そつた。疲れているように見える。それなのに頑なにどうかもう少し自分に任せて欲しいと言つ。前は自分が帰るのをじつと正座で待つていたのに今は世話をしていたり、うつらうつらと眠つてしまつていて声をかけて初めて気がつき慌てて時計を見て謝る。口を開けば天が、天が、と楽しそうに話しそわそわしている。料理も品数が大分減つた。とはいえそれはまあ、以前が一人では作りすぎる程多く、凝つていたのだが。あまり眠そうで反応もつまらないので嘗むことも稀になつた。夜は幾度も起こされる。

男の通つ足数は減つた。

「お父さん、帰つて来ませんねー」女は赤ん坊を揺すつた。

「とても、忙しい方なのです…」

一寸寂しそうな顔をしてから笑顔を見せて言ひ。

「けれど、お母さんがいますよー。るりがきっと天を曰那様のよう
な」立派なお方に御育てしますからね」

「つまんねえなあ」

久々に呴いた言葉に気がついて、男はふ、と自分を笑つた。
あいつが俺以外のことにも夢中だなんて、本当につまらねえ。いつ
そ取り上げたいが、そんなことをしたらあいつに嫌われちまう。本
当に不味いことをした。喜ぶ顔が見たくてつい早計をしてしまつた
な。

しかし。まあ、実際あの寂しそうな顔をしなくなつただけい
いか。子を孕まないのを勝手に自分で責めやがるから。まあ暫くは
構わないで置いてやるわ。俺が傍にいればどうしても氣を一番に引
けないことに苛立つちまつからな。少し構いすぎたから、今度はあ
いつから甘えてくるのを愉しみしようか。

四・寂寥

親父はたまにふらりと帰つてくる。帰つてくる度に母さんは大喜びして、「旦那様、旦那様」と尻尾を振るように媚びてその日だけは俺を構わない。それ以外は俺にべつたりの心配性で、それはむしろ、普段があいつの代わりであるような気がした。

「天、クッキーですよ」

次の日は「機嫌で、俺が好物だと思っているらしい焼き菓子を焼いて持つてくる。筆で書いた字を覗き込んでわあ、と大げさに感心する。

「天はとてもお習字が上手ですね。大人のようです」

「前も見ただろう」

「天のお父様もとても字がお上手なのですよ。お母さんもお父様に習つたのです」

俺の不機嫌な顔にも嬉しそうに答える。

「習つた? あんたと親父つてどういう関係だつたんだ?」

「あの、それはですね、」ちょっと気まずそうにして「天、あんたではなく『お母さん』ですよ」と代わりに「まかして言つてきた。

「お習字だけでなくお琴もお茶も、御教養でお父様より優れた方はいないのです」

歌うように「いか誇らしげに言つのこ、は、と鼻を鳴らした。

「あんな奴が?」

「めつ。駄目ですよ、天。お父様をあんななどと言つては」本気で怒つているらしいのに頬を膨らませたそれはつねつてやりたくなるほど面白い。怒るのは親父の悪口を言つた時くらいで、それもなんとなく気に食わない。

「母さんには可哀想だけどさあ、あいつ絶対女と遊んでいると思うぜ。仕事が忙しいなんて、母さんが勝手に信じ込んでいるだけだ」

「なんとこうこと言つのですか、天は。クッキーをあげませんよ」

「はいはい、その甘いの持つてとつとと出て行けよ
母さんは眉をぎゅっと寄せて、意を決してその皿を持って立ち上
がつた。

「謝つたら、食べていいいんですからね…」寂しそうにやう言ひて出
て行く。

「誰が謝るかよ。そんなもので」

小さな背中に向かつてそつと言つた。

そんなことも忘れてくあ、と背伸びして食堂に向かつた。もう食
卓は用意され、母さんは座つてゐる。

「酢豚か」俺は椅子を引いて座ると頂きますと言つて食べ始めた。
母さんはいつまでも手が付かずに、少しだけ唇を噛んでぎゅ、と箸
を見つめている。俺が黙々と食べ終わり、そのままがた、と椅子を
引くとようやく母さんは口を開いた。

「待つてください、天」ぎゅ、と俺を見つめあげる。少し瞳は潤ん
でいる。

「何だよ、」面倒くさそうに言つた。

「天は…謝らなければなりません」

「誰に？」

「お父様にです。悪口を言つのはいけないことです」

「嫌だね」は、と笑つて見下ろす。「それに、悪口でなく事実だと
思うぜ？」

「天、」

「あんたが信じたいんだろ、悪口だつて。そんなに不安なら直接聞
いてみたらいじやねえか」

「るりは天にとても甘かつたようです。天が今謝らないのなら
お父さんに言わなければなりません」

「帰つてくんのかよ、今日っ」

食事はいつも三人分用意されているが、一人分は大抵毎日翌朝に
捨てられる。寂しそうに捨てている。元から作らなければいい話な

のに。

「お帰りになられたら、お話します」

「好きにしりよ? だけど残念があいつは俺のことなんか興味ないと思ひやせ」

「そんなことはありません。旦那様は天にとても御期待なさっています」

俺はもう相手にせずそこを去つた。母さんは哀しげに銀色の瞳を伏せぎゅ、と小さな手を握つている。

布団を敷いて正座して、すっかり体も冷えて時計を見てもう諦めて明かりを消してもぞもぞと入つた。暗い中眠れないでいた。

「るりは何か間違いをしたのですか」心細く問つ。「旦那様… ようやくうとうとしてきた頃、から、と襖が開いた。吃驚して起き上がるが、その影姿に頬が自然と緩まる。

「お帰りなさいませ、旦那様…！」

「ああ、ただいま」

嬉しく、立つて羽織を受け取つたりする。

「ごめんなさい、るりは先に寝てしまつて、今日はお帰りにならないかもしないと思つてしまつて」

男はとさ、と布団に体を横にした。少し酔つてゐるような気がした。

「もうお休みになれますか」

「ああ」男は瞳を瞑る。

女は布団を掛け、自分もおずおずと入る。

「旦那様… 少し、良いですか」

「何だ?」男は片目を開けて言つた。

「天のことなのですが、」

「また天か」男は少し不機嫌な声で言つた。

「お怒りになつてはいけないのでですが… 天はとてもいい子で、少し

悪ふざけをして言つてしまつただけなのですが、

「なんだ、今日は告げ口か。言つてみろ」

「本当に、大きなことではないのですが、」

「なんだよ、早く言え」

女はも頭をもぞ、と自分の足のほうに傾けて小さく言つた。

「旦那様が、他のお女とお遊びになつていると思うと……天が」

「へえ」男は面白そうに口元を上げた。

「勿論るりはきちんと叱つたのですが、天はあまり聞いてくれなくて困つてしまつて、」

くすくすと男は笑つて女の髪を撫でた。女は頬を少し染めて男を見上げる。

「別にいいんじゃねえか？」 事実だしな」

「え」大きな空色の瞳が揺れて見つめる。「だ、旦那様…？」

「近頃遊郭に可愛い娘を見つけたんだ。そいつと遊んだ」男は今だに髪を撫でながら言つた。「少し昔のお前に似ているかもしけねえ。華奢で可愛い、大人しげな娘だ」

「え」

「俺が水揚げして色々教えてやろうと思つてゐる。愉しみだ」男はくす、と笑う。「お前はすっかり床上手になつちましたからなあ」「旦那様……そう、なのですか」女は何故か無理に微笑もうとしたが、どう見ても無理があつた。男は得意を得たりと可笑しそうにそんな女の様子を見ている。

「武家の子でな、末娘で可哀想に遊郭に出されてしまつたそうだ。初めは慣れない様子だったが、今は俺が来ると嬉しそうにする。あの場には勿体ない綺麗な子だ」

「そうなのですか？それは良いことです。旦那様と出会えたのはとても良いことです」

「嫉妬するか？瑠璃」男は笑いながら女の顔を覗き込んだ。「お前よりも随分と若い」

「いえ……るりも旦那様にはたくさん教えて頂いたので……」

「そりゃ」

男は手を離して自分の頭に組む。

「できるのな、… るりにも旦那様をお慰めできたらいいのですけれど」

「ん？」と男は横目で見て自分の帯を無意識にか滇んでいるのを微かに笑う。

「慰められたいのはお前じゃねえのか？」

首筋を撫でると女はぼ、と顔を赤く染めた。

「今日はもういい。俺もそう若くねえからな」

男はくすりと笑って目を瞑つた。女は赤いままもぞ布団に潜つた。

五・姿見

「いりてらりしゃこませ、旦那様」

「おひ」

出て行く男を正座に笑顔で送り出して、女は立ち上がった。そしてふらふらと廊下を行く。

「確かめてみたか？」

声がして、にやりと笑った息子がいた。

この様子じゃ図星だつただろう。全く作り笑顔に嘘をつけない。

「はい……るりが間違いでした。」「めんなさい、天」

母親ぶのも忘れてふにゃふにゃとまた作り笑いをした。

「…別に謝る必要ねえけど」

「はい……お洗濯をします」女はまた廊下を歩いていく。

「おい、」

女はぼんやりと振り返った。

「昨日のクッキー、食つてやつてもいいぜ」

「はい、捨ててしまつたのでまた作ります……天はやはりクッキーが好きなのですね」

また仄かに笑う女の肩をぐいと掴んで、自分の胸に圧した。軽かつた。

「天……？」

「気持ち悪い作り笑いすんじゃねえ。だつたら泣けよ」

ふる、と少し肩が震えた。

「天はとても優しいですね……旦那様にとても似ていらりしゃこます」

「似たくなえよ、あんな奴」

「ダメですよ、天」女は離れて忘れず嗜めると、言つた。

「ありがとうございました、もう大丈夫です。るりはお母さんな

で

そうして笑つて、淡色の着物姿はことこと先に行く。

「歩く姿は百合の花…」背姿に息子は呟いた。

片付けている布団に水滴が落ちて、慌てて手で払つた。しかし手に押されて雫は染みになる。

旦那様は、触れなかつた。

口を吸うことも胸の中につぼりと入れてぎゅ、抱きしめることも、耳に優しい言葉を囁くことも撫でることも、何も無かつた。女は姿見を見た。鏡の中にいる女は、出会つた時よりもすっかりと年を経ていた。もうあどけなさの残る少女ではなく、成熟した大人の顔つきだつた。

いつそ人形だつたら良かつた。

そうすれば、いつまでも変わらない姿で愛しく思つてもらえただろうに。人間の機能を取り扱うだけでなく、人形の機能を取り付けられれば良かつたのに。

「仕方の無いことです、旦那様はお美しいのが好きですから…」

『お前よりずっと若くて、初々しい』

教えるのが愉しみで、教えてしまつたらきっともう愉しくないのだ。

「もううりは旦那様のお役に立たない…」

ぱりりとこぼれてぐしりと擦つた。

「泣くのはいけないことです。とても我が仮です。るりは

『お前が母親だ できるな?瑠璃』

『るりはお母さんなのですから』

まだ旦那様のお役に立てる。大事なお世継ぎをお任せくださいといふのだから応えなければならぬ。

美しくなつた。

ようやく出来上がった真珠を眺める心地だった。髪先から爪先まで白く光り輝いている。姿のどこをとっても美しい。心もからめとるよう手に入れて、体も思う通りにできる。それでいて何時までも生娘のようだった。これほど完璧な女がこの世に一度といふだろうか。

子も為せず世から匿つた、むしろその故にあれ程の美を為せたのではないだろうか。全くものは捉えようだ。

後少し辛抱するか、と思つた。あいつが泣いて抱いてくださいと縋つて来たその時真珠は真円となるだろう。ここまで待つたのだから後少し辛抱できないうことはない。それまではそれはそれで苛めるのを諭しめばいい。

「千次様、なにかお考えですか」

「妻のことだ」と笑うと膨れ面をする。しかし男は気にせずまた何か思索に耽るようだつた。

天もそろそろ本邸に移すか。

息子の存在があると俺のいない寂しさを紛らわせちまう。それに天も頃合の年だ。そろそろ元服させて、本格的に跡継ぎとして育てる時期だろう。

それに、俺に似ていると言つから少し気に掛かる。瑠璃の美しさに目が眩んでは面倒だ。血が交じつていないと判つてしまふ前に本家に離そう。

漸く意識を戻したかと思えば、男はすぐに身なりを整えて畳を去つていた。

六・針子

「つ、」

針子の途中、針が刺さつて赤く濡れた指を口に含む。ちゅふ、と舐めて、それから丁寧に舐めてしまつ。細く長い、けれど男の手つきのあの指を想い出してしまつた。　そう、舌はこうこう風に指に遊ばれて……自分の指を口に入れ、目を瞑つた。歯や舌の口中を弄つて、それは自分の指でないよう感じて止まらなくなつてしまつた。

「は、あ……」

唾液に濡れた指を見て、体が芯から火照つていた。正座の足が尻から離れて崩れ、いけないと思いつつその指は着物の袂に差し込まれ肌着の上から乳をなぞつてみる。気持ちよさが頭を痺れさせていた。もう片方の手も胸に伸び、柔らかいそれを揉む。

「ん……旦那様……旦那様……」

かたりと音がしたのには気がつかなかつた。す、と襖が引かれたのには気がついた。刹那止まり、そして体中が一気に燃え上がつて、下を見るしかなかつた。そこには息子が立つて見下ろしていた。

「よ、天……どうしたのですか」女は恐らくさりげなくを装つて着物を直しながら相変わらず真っ赤に下を向いて言つた。手は針を持つて急いで縫つている途中を始めるが、縫い跡はばらばらになつた。くつく、という笑い声が聞こえた。男に余りに似た笑い方で思わずもしかしてと思って僅かな希望に縋つて見上げるが、やはりそれは息子の方だつた。

「そりゃあ、欲求不満か」

笑いを噛み殺した声で見下ろしている。

「こ、これは、これは違うのです。違うのです、天、」
女は細く言つて針も糸もこんがらがつて動きが止まる。

「針が刺さつてしまつて、それを舐めて、
とん、とんと近づいてくる。

「やう隱やうとしなくとも、別に見下してなんかないぜ？」

「天…」

女はどうしてもいか判らず、ちょっと見上げようとした。そついたら案外に顔は至近にありますます赤くなる。男の若い頃よりもっと若い、出会う前のその人がいるようだつた。いつの間にこんなに大きくなつたのだろう。赤ちゃんだったのに。小さな子供だったのに。もう自分より背が高い。

「俺もだ」

くい、と顎を持ったのに、ひやりと背筋が寒くなつた。

「よ、天…？」不安げな声になつてしまつて伺つ。

「ばあか

くす、と笑つて手が離れた。

「何構えてんだよ。 流石にそこまで馬鹿じやねえ」
相変わらずどこか可笑しそうに、しかじどりか呆れたように息子は襖に手を掛ける。

「ちゃんと閉めろ、息子をまともに育てたかつたらな」
頼むぜ、とさらりともう一度笑つて出て行つた。

蟲惑的な黒の瞳と意地悪な笑み……あれほど似るなんて、血とは濃いものだ と女は思つた。

「天を屋敷に戻す」

女は複雑な顔をした。それから哀しそうにしかし諦めたよつこ「はい」と小さく従つた。

「意外だな」と男は本当にそう思つた。

「また後少し後少しどと縋るか裏切られたような眼で俺を見るか、泣き落としに出るかと思つた」

「まあ、どうしたところで変える氣はねえが」

「るりの気がつかない内に、天はとても大きくなつてしまつていま

したので…天の為には、お家でお過ごしになるのがよこと思いました。るりのお教えることはずつと前からなくなってしまったの

に…るりはいけないことをしていました

「……」男は女のやけに聞きわけの良さに得心いかなかつた。それから微かな不安がよぎる。

「まさかあいつに、何かされてねえだらうな?」

びくりと女は動いた。

「違います、違います、そんなことはありません」

「何だ、そう慌てて。何をされた?」

周囲を灰にしそうな低い声で、女は泣きそうになる。

「本當です、旦那様。るりをお信じになつてください」

「信じよひ。偽り無く話せ」

その瞳から逃れるように四方に落ち着き無く瞳を動かすが、遂に女は觀念する。泣きそうに震えながら俯いた。

「るりはお裁縫をしていて、その針を刺してしまつたのを舐めて、それでどうしてか旦那様の御指を思い出してしまつたら体が熱くなつてしまつて、るりは旦那様を思い出しながら自分で自分の胸を撫でてしまつたのです…。それを天に見られました」

女はかああと真つ赤になつて自分の小さな拳をぎゅ、と握る。

「けれど、天はるりに何もしません。扉をきちんと閉めろと言つて出て行きました。天はるりの様にはしたなくなく…とても冷静で、とても大人だと思ったのです……」

「ほお」と男は面白そうに聞いていた。

「全く、息子に痴態を見せるとは母親失格だな」

女の瞳からぼろりと大粒に涙が落ちる。

「それで、俺のことを思い出してください?」

「はい…」めんなさい。るりはとてもはしたなによつです…

「最近は嬌をしてやつていなかつたからな」

男はにやりと笑つて顎を持ち、涙目のその顔をあげさせる。

「お前が強請るなら、その体にまた教えてやつてもいいんだぜ?」

「はい、旦那様…るりをいい子にしてくださいませ」

「駄目だ、もっと本当を言え」

口元の近くで言われ女はふるふると唇を震えさせた。

「ごめんなさい、旦那様。とても欲張りなことですけれど、本当はるりは旦那様に抱いて頂きたいのです」

「それで？」

「お願ひします。るりを抱いて下さい、旦那様…」

涙に震えながら頬を染める、この世に無い程美しい氷の精のような女を見て、男はにやりと笑う。

「いいだろう」

噛み付くように吸い付き吸い付けられ、歓喜の震えを男と女は一つにした。

七・祝誕

一人になってしまった、以前に一人でこの家に居たというのが信じられなかつた。

「天…」

一見は無愛想だつたけれど、優しかつたように思う。何かとは言えないけれど、届かないものをさり気なく取つてくれたり、食べ物を残さず、失敗したお菓子も眉も動かさず食べててくれたし、よく仕組みの分からないものを直してくれて、刃向かつたりしないで大概自分の言うことを聞いてくれた。邪魔しても怒らなくて、家に居てくれる、祭りに行こうと言えば仕方なしにも付き合つてくれた。いつも何も言わなくても黙つたままさり気なく何とは言えない何かをしてくれるのだった。

甘やかしていたのではなく、なんだか自分が甘えていたようだ。時々旦那様のように意地悪に笑つ時もあるけれど、自分に合わせてくれる存在は初めてだった。

「天は元気にしていますか、 旦那様」

そう聞けば、「さあな」と答えるのだった。
「寂しくしていいといいのですけれど」

「何を寂しいんだ？ 屋敷の方が人は大勢にいるだろう。他の貴族と交流だつてあるだろうしな」

「あ、それはそうですね…」

「寂しいのはお前なんだろ？」

男が聞く。

「全く、許せねえなあ。お前は俺のことだけ考えてればいいのに」「旦那様のこともたくさん考えます。るりは今とても幸せです」

「そつだろ？ もう天は忘れていい」

「え」女は目を瞬かせる。「それはいけません、 旦那様… るりはお

母さんなのです

はあ、と男は深く溜息を吐いた。

「流れる血よりも飲む水の濃きかな」

月日は経つて、寒空を見上げて花に水を遣る。

一度もこの家に帰つてきはしない。旦那様が帰つていらっしゃるのだから一度は顔を見せてくれても良いのに、と思うのは我慢なのだろう。三人で食事をしたり、どこかへ行つたりしたことはない。だけれどももしもそんなことができたら。ふるふると首を振る。一体いつからこんなに欲張りになってしまったのだろう。

「何か甘つたるい匂いがするな」

「あ、」と振り向き笑顔になつた。

「お帰りなさいませ、旦那様。クッキーを焼いているのです

「クッキー？お前が？」

「はい、旦那様。天はるりの作ったクッキーを好きでした」嬉しそうに女は男を見て言つ。

「へえ」男は何故かちょっと不機嫌になつた。女は急いで言つ。「もしてきたのなら旦那様にも召し上がって頂きたいです」

「俺はいい。甘いものは嫌いだ」

それからしょんぼりとした女の体を包む。

「お前なら食べてもいい」

首を舐めて、ひや、と女は耳を赤くした。

朝出て行く時になつて、女は後ろ手に何か持つていた。

「なんだ？」

いつまでもおずおずとしているのでいい加減に聞く。

「あの、今日は天のお誕生日なのですが、」

「そうなのか？」

「はい、旦那様。それで、るりは何も大きなことをできませんが、

女はぐずぐずと止まる。

「なんだ？」

「や、やはりなんでもないです。 いつてらっしゃいませ、旦那様」

男はぐい、と女の腕を掴んで引き出した。手紙つきの、リボンをつけた包みがそこにあった。昨日のいつの間に用意したのか、風呂の間か、俺の寝ている間か。甘い匂いのするそれを取り上げた。

「あ、」女は不安げに慌てる。

「天に渡せばいいんだな？」

途端にはにかんだ笑顔になつた。

「ありがとうございます、旦那様。 旦那様はやはりとても優しいです

「お前にだけな」

男は微笑し女の前髪をあげて額に口付けた。

「行つてくる」

「行つてらっしゃいませ、旦那様」花のように女も微笑んだ。

面倒だがしかしこれは今日中に確實に手渡さなければならぬだろうと、長い廊下を西に西に歩いた。全く遠すぎる。と思うのは、大分俺もこじんまりしたあの家に落ち着いてきたかな、と秘かに笑んだ。

近づくにつれ、そちらの家臣が千次様、千次様と驚いて騒ぐ。旦那様がいらっしゃつられたと慌てて走るのを「大げさにするな」と止める。

「天はいるか」

「は、いかなる御用事であられますか。承り仕りまするが」「いいから通せ」

そうして先に先にと歩き、ようやくその扉を引く。

から、と開けて、大きな机にいるその息子が視線を上げた。互いに何も言わない。

「瑠璃からだ」

そう言つて奥まで大分距離のあるそこに投げると、慌てもせずぱしりと余裕で受け止めて、ち、と思わず舌打ちした。
長居は無用、といふか實際には部屋に踏み入れずにつくるりと踵を返す。

「親父、」背後からの鋭くひゅ、と空氣を切る音に、振り向きもせず後ろ手で受け止める。

「初めて言われるが想像以上に身の毛がよだつな」男がそれを見ると、花の咲く木の枝に何か和紙が括り付けられている。
生け花のそれと同じらしいが、既に用意されていたのかこの場で即時に用意したのか。自分ならばできる自信はあるが。

「残念だな、瑠璃は和歌は解らないぜ。必要がねえから教えていい」

「知つている」くす、と息子は笑つた。

「送れば自分で読もうと懸命に勉強しだすだろ？あんたと遣り取りする必要はなくとも」

「ほお」穏やかな口調で、力も込めてないようなのにしかしほきりと木の枝は折れた。

「しかし俺が人の運び人を承つてやると思うのは甘いんじゃねえのか？例外はこの世に瑠璃だけだ」

「あの家には踏むどころか文さえ届かない」

嘆かわしく溜息をついてみせる。

「天下の霧崎家当主の妻と息子、その一人だけ住まう家によくも悪党も媚売りも寄り付かない訳が出てみて初めて分かった」

「瑠璃を無防備に放つて家を出る訳がねえだろ？」

くす、と男は笑う。

「息子への祝に一つ見逃してくれねえか」

「残念だつたな」男は和紙を紙飛行機にしてひゅるりと部屋に飛ば

し口元を上げる。

「俺はお前の誕生を祝つたことなどない
だが、と言つて折れた木の花を摘む。」

「生ける花の美しさに免じてこれは届けてやるわ
てやらねえけどな」

男はふ、と笑つて出て行つた。

「本当、意地の悪い親父だぜ」
生けた花を眺めて彼は呟いた。

花言葉は教え

八・切花

「天がこれを瑠璃に？」

女は花の咲くように無邪気に顔を綻ばせた。

「届けていただきありがとうございます、旦那様。とても綺麗です」

木の枝に一つ咲いた花を慈しむようにちょっと触る。木枝の端は水を含んだ綿をつけていて、花はまだ水水しく咲いていた。「とても嬉しいです。天はるりを忘れてしまいたいのかと少し思つていて……」

ちょっと涙ぐんでさえい。

「なんで忘れないんだ? やはり何かあったのか

「いえ……旦那様は怒るので言えませんが

「隠せば絶対に言わせるとそろそろ分かれ」

男は木枝を取り上げた。

「あ、」と女は切なそうに声を上げる。

「言わなければこの花を摘む」

「旦那様はそうしません。お花を大事にする方です」

「そうか? ただ観賞する為に命を短く切り取つて、こちらで造作を加えて針に刺して飾るんだぜ? お前の様に、野にある花を愛でている訳ではない

「けれど旦那様はお優しい方です」

「はいはい、お前にだけな。 全く、便利な殺し文句だな」

男は返して軽く溜息を吐くと今度は撫でた。

「ほら、言つてみろ。隠し事はいけないだろう?

「はい、旦那様」もじ、と女は少し手元に俯いた。

「るりは身分が相応しくないので……天がそのことを言われたら、とても辛い思いをすると思って」

言い切った途端にぐに、と頬を引っ張られていた。

「は、はんなはま、ほほらはいへふはい」

「怒つてねえ。少し傷ついた衝動だ」

手を離して男は言った。

「お前の身分？俺の妻で不満があるとは知らなかつた」

「それはそれはとんでもありません、旦那様。旦那様の奥様のお役目はるりの身に余つてしまつて、るりは幸せで今も信じられない程度です。そうではなく、」

「今も信じられねえ、て……お前……お前を妻にしてから一体どれほど経つていると思つていてるんだ」

女の言葉の途中で男はくたりと女の肩に手を置いた。

「しかも微妙につつかかるが、役目と言つた。お前は正真正銘俺のただ一人の妻だ。戸籍でもそくなつていい」

「え。それでは本当に天はるりがお母さんとなつていてるのですか」

きらきらと空色の瞳が輝いたのは一目瞭然だ。

「継母つてやつか……まあそうなるな」

男は少し嫌そうに答えた。

「なんだか腹が立つなあ。お前は離れている方に情が行くよつた。どちらにせよつまらねえ」

「そんなことはありません。るりは旦那様も天も同じほど……」

女は遠慮がちに口^レもつたが、促すように軽く眼を眇められて、「」によごによと恥ずかしそうに先を続ける。

「あい……しているのです」

出過ぎた言葉でないかとくら、と伺い見る。

「同じ程？」

男が聞きとがめたのは違う箇所で、今度は本当に睨んだようだった。

「聞き捨てならねえな。俺とあいつが同じ程とまじつこつ」とだ？

「違う気持ちですけれど……」

「当然だ。同じだったら許さねえ。しかしそれにしても半分もお前の心を持つて行かれるのは許せねえ。前は全部俺のものだと言った

じゃねえか」

男は女の体をひょいと抱き上げた。

「どうやらきつくな仕置きをしてやらないと本当のことを言わねえらしいな」

「あ、旦那様、旦那様の方を少し大きく思っています！」

「少し？」必死になりだしたのに構わず男はとんとんと歩く。

「とてもです、旦那様！」

「どちらにせよ嘘吐きには仕置きだ」

「旦那様、嘘ではありません。旦那様をとても想つていて、天もとても考えていて、それで半分にはならないのです。るりの心はその分だけとてもとても大きくなるのです…！だから旦那様、」

「まあ良いとしてやうひ。しかし今日はなんだか気に食わない日だから付き合え、瑠璃」

「はい、旦那様。るりはいつでも旦那様にお付き合いをせて頂きますけれど…」

女は空気の抜けたように大人しくなったが、男の着物をしかと掴んだその顔は強ばっていた。

「いい子でいれば褒美もやる」くす、と笑つて男は抱えた女を黒の流し目で見下ろす。

「ありがとうございます、旦那様」

女は男に身を任せようにくたりとして、どこか諦めたようにやはり浮かなかつた。

「名前を呼べ」

「千次様　お仕置きの時はるりにとても厳しい…」

「虐める程可愛く鳴くからいけねえんだ」

「気をつけます、旦那様…」

「そうしてくれ」

男は笑つて女を撫ぜた。

九・本邸

「瑠璃、お前も来い」

玄関口で女を引いた。

「え」

「お前は俺の妻だと、お前も他也認識する必要がある。暫く本邸で生活しろ」

しかし女は足を板に踏ん張つた。

「るりは今でとても幸せです、旦那様。るりは旦那様がお認めになつてくれるのに十分なのです」

「可愛いことを言つて、本当はお前はあそこに行きたくないだけだろ?、瑠璃」

「旦那様は高貴にお育ちになつたので分からない……るりはあそこでは息ができないのです」

「俺だつて今となつては息苦しい」

引っ張られるのを懸命に後ろに体重をかける。

「どうかお許しになつて下さい、旦那様。そぐわない場所にいると良くないことが起こります。るりはそれがとても恐いのです」

「まあ、お前はあそこで殺されかけたりと散々酷い目に合つたからな……」

憂う表情になつて手が緩んだ。その弾みで女はとん、と後ろにころける。

「しかし心配するな。俺が守つてやる」

よひけた女を支えて男はきつぱりと言つ。

「それにいい子にしていたら、たまになら竜や天に会わせてやつてもいいんだぜ?」

「え、天と竜に……」

女の足が緩んだ隙に、男は女を掬いあげて浚つ。

「あ、旦那様!」

「それにもり、お前を本当に幸せにするにはお前自身も戦わなくては駄目だ。自分で努めなければ自信はつかない」

「そしてお前の幸せは俺の幸せだ」

男はにやりと笑う。

「愛する俺の為に、その卑屈な根性を叩き出してみせり」「できるな？ るり」

抱き上げられたまま手を取つて見つめられれば、こくんと頷くしかなかつた。

「はい、旦那様」

それに黒い眼差しはとても強い意志の力に満ちていて、搖ぎ無い自信の一欠片が注ぎ込まれてくるようで、女は夜のような黒の瞳を眩しく想つた。

「よし、堂々としているよ。初めが肝心だ」

化粧に着物、はたはたと人が動くのにぼつと突つ立つてゐる内に支度は済んでしまつた。その間、鶴の一聲の瞬く間に家中の主な家臣や使用人が集められていた。

「旦那様……るりは何をすればよいですか」

「何もしなくていい。俺の傍に立つていろ。余裕があれば微笑んでやれ」

「こうでしょうか」

女の引き攀つた口元に男は苦笑する。

「それはやめておけ。家臣相手に緊張を見せるな。そうだ、お前は昔無表情が特技だつただろう。あれをしてみろ」

「特技ではないのですけれど……やつてみます」

女はそう言つると表情は消えた。というか、生氣が消えた。本当にどうなつてゐるのか、人形そのものだ。

「微妙だな。しかしかちこちよりはまあいいか。　もういいぞ。

戻れ」

男が声かけるがどうしたことか反応はなく、頬をつんざついても人形のままだった。

「おい、悪ふざけは終わりにしろ」ぴくりとも動かず、男は心配そうな表情になる。

「瑠璃？」

心配気に女の唇を触つて、それから食いつき口付けた。

「ん…ふ、」

ようやく頬に赤みが戻つて解凍でもされたように頬が柔らかくなつたのを感じ男は口を離した。

「どうしたんだ、俺の言うことをきかねえなんて」

「あまりこころことは切り替えられないものなのです、旦那様。るりも感覚を忘れてしまつていて、戻り方が難しかったです」

「そんなものか。仕組みが全く謎だな」

まあ戻つてよかつた、と男は安堵の息を吐いた。

「旦那様…やはりりはこのままでいきたいと思います。るりも忘れかけていましたが、なんだかあれば怖かつたです。心がとても寒くなつて、るりは独りでどこかへ行つてしまつようでした」

「そうか、それは怖いな。悪かつた、もうするな。俺も一瞬怖くなつた、お前が戻らなくなつたらと」

男は確かめるように女を腕に包んだ。

「今はとても温かいです、旦那様」

女は微笑んだ。男もその柔らかな春日のような笑みに表情を和らげる。

「それがいい」

男は頭を撫でて笑う。

「家臣は奴隸だったときのお前を見ているが、しかし今はお前は歴とした俺の妻だ。頼むから俺の伴侶であることを誇りに思ってくれねえか」

「はい、旦那様。旦那様と天に誇らしく思つて貰えるようりは頑

張ります」

「大丈夫だ、お前は美しい」

男はふ、と笑って女の手を引く。

「さあ、行くぞ」

ひどく大勢の人がいた。まるで町の全部の人を集めたようで、初めてこんなにたくさんの人を見て、頭がくらりとした。皆こちらを見ている。とても怖くて、足が崩れてしまいそうで幾百のこの視線の槍からとも逃げたい。

ぎゅ、と手が握られて、男を見上げると少しも物怖じせずとも堂々としていて、口元は僅かに微笑を湛えていた。黒の瞳は何にも揺らがず真っ直ぐで、全ての槍を吸い込んでしまっているようだつた。眞しんとして、男の言葉を待つていて。

「俺の妻だ」

旦那様は言った。拍子の抜ける程、たったそれだけ。ぼーっと遠くから見るようにお顔を眺めていると、そして突然にこちらを向いた。

「こり、俺に見惚れていないで皆に顔を見せてやれ」「くすりと小突いていつものように旦那様は笑う。

「る、るりと言います。宜しくお願ひ致します」

上ずつてぺこんとお辞儀をする。旦那様はくつくと笑う。

「自己紹介までするのは上出来だ。褒美をやろう」

そして男の唇が自分の唇を覆っていた。深く、深く、貪られて。いつものように、もうどこだかなんだか判らなくなつて、へたりと膝がつきそうになるのをかくと旦那様が抱きとめる。

男は女と自分の口を拭つた。

「祝福しねえ奴は、いねえだろうな？」

不敵に言い放つと下にいる前の人たちがざ、と膝を付く。それは

漣のように後へ後へと伝播して、瞬く間に幾千もの人達は一人残らず膝を付き深く深く礼を取っていた

男の家族のいる場所に息子の夭がいて、凛々しくなつた久々のその姿に一気に心が弾んだ。

「行くぞ、瑠璃」

「はい、旦那様」

女は揚々と晴れた笑顔で、男について行つた。

「どうした、口に合わないか？瑠璃」

男の家族の揃つた食事の席に座っていた。

進まない自分に男は上品な微笑のまま問いかける。上品。皆上品だつた。行儀悪く食べてる訳ではなく、フォークやスプーンの使い方もよく見て真似て違くないよう思う。だけれどもそこには四人の男達と自分とは明らかになにか違つた。食事をしているだけなのに、皆品がありとても優雅だつた。

決定的に違うのは育ちだと思えたが、しかし息子もそこに溶けているようだ。これまで自分と一緒に暮らしてきたとは思えない。やはり、貴賤は血からして違うのだろう。

天に自分の卑しい血が交じつていなくて良かつた。

「まあ、こいつの作る料理の方がずっと旨いからな」

なんてことを。なんてことを。この国一流の選つた料理人を召抱えてなんてことを。泣きそうになつてふるふると首を振つて必死に男に目で訴えた。

どうかそつと、るりをいないように振舞つて下さい。

「ほお、それは是非食してみたいのう」

しかしある「ひとか男の祖父が応えて言葉も無く静かだった食卓に話題が上る。

「何が得意なのかのう？」

自分に視線が投げかけらているようだが、口を僅かぱくりと開いたまま声が出ない。そんな会話を自分がしてもいいのだろうか。言い訳が無い。窮して気まずく雰囲気が途切れかけて、男の口が開いた。

「肉じゃが」

そこでちょっとと止まつたのは、一つの声が重なつたからだつた。

男はもう一人、子を無視して構わず続ける。

「あとは里芋の煮転がしたもののが好きだな、俺は」

「そうかそうか、それは是非食してみたいのう。わしにも作つてくれんかの、瑠璃さん」

冷たい汗が背筋を伝つて、目がちかちかした。帰りたい。この場からいなくなつてしまいたい。透明になれたらしいのに。

「誰がじじいの為に女の手を冷たい水にさらさせるかよ。瑠璃は俺の為だけに作るんだ」

なあ？と悪戯な口元が笑う。

「何を縮こまつてゐるんだ。ほら、食わせてやる」

男はフォークに入参を刺して差し出す。どうしていいか判らず泣きそうだった。ここで口を開けて与えられるなんて、ひどく恥ずかしいことである気がした。

「俺も飯が終わつた」黙つていた息子が口を開いた。

「この家で良く使いそうな場所を母さんに案内してやるよ」

「それは無用だ」男はフォークの手を戻す。

「瑠璃はこの家にいたことがある。大体は頭に入つている筈だ」

「そうか、」

男の言葉に特別な反応は示さず、『駄走様、と先にそのまま席を立つて広間を出て行つてしまつた。

「さて、もういいのか？お前がその様子じゃ此処にいる意味は無い」とくんと頷いた。ほつとした素振りに言い訳するように小さく付け足す。

「るりは少し食欲が無くて」

そう言つと「じゃあ行くか」と席を立つ。

「千次、」

男の父親が初めて口を開いた。

「話がある、お前はここに残るのだ」

ち、と男は舌打つたがこちらを向いて「一人で戻れるか」と聞い

た。

「はい、旦那様。るりは道を覚えていました」と答えて立つ。自分は席を外した方がいい雰囲気だ。

早足にその部屋を出た。ばたんと閉めて、何か逃げるようで落ち着かなかつた。

きつと何か失敗したのだと思つ。どうしてきちんと食事を食べれなかつたのだろう。会話もできなかつた。今思えば、特別な晚餐だつた氣がする。旦那様はいつも帰つてきていたから、普段はご家族と食事を一緒に取らない筈だ。自分を家族として認めてもらえるよう特に会食の場を用意してくださつたのかも知れない。貴族に交じつてきちんと振舞えるか見定められていたのかも知れない。この食事の前、『お前は普通にしていればいいからな』と安心させるように手を握つて言つていた。緊張してしまわないように言つてくれた、きつと大切な言葉だつたのだ。

どうして自分はこんなに間抜けなのだろう。

普段は聞きそろに無い父の言葉を聞き入れ自分を帰らせて残つたのは、自分の余りにひどい態度の埋め合わせをして、何か庇つているのかも知れない。

どうしてこんな自分のだろう。

釣り合わなさ過ぎるのに。旦元がじんわり熱くなるのを慌てて引つ込め部屋に戻るまで考えないようにして足早にここに歩いていった。

きつと天も呆れている。よいお母さんらしくなかつた。

「るりはやはり相応しくないので、旦那様……」

咳いて、こんこんとノックがなつて吃驚した。部屋に帰つても帰つた訳ではなかつた。

旦那様はいない。

女は軽いパニックになつていて。自分が出て行くべきなのだろう

か。いない振りをしては駄目だろ？

それきり、しいんとしている。もう帰つただろうか。女は立つて、ドアの方に近づいた。そろそろとドアノブに触る。開いてみると人がいて、また竦んでしまった。旦那様より若く天より年上の若い男の人だ。

「お休み中失礼致します、瑠璃様」

「あの、いえ、」しどろもどろと答える。なんだろう。出て行けど言われるのだろうか。

「これをお渡しするよう天様から預かっています」

そうして薄茶の包み紙を差し出した。

「天…？」

思わず両手を差し出したら、そこに丁寧に包みが置かれる。つしりと何か入っている。

「はい。では私はここで失礼致します。お休みなさいませ、瑠璃様」
そうして恭しく去つていった。

ちょっと呆然とした後、それをテーブルに置いて、早速細い紐を解いてみる。

包み解くと、ふわりといい香りがしてそこに干し芋が現れた。

「これは…」

ぐーっとお腹が鳴つてしまつて恥ずかしくなる。

「天、有難うござります」

そうして一つ手に取り、齧る。甘くてとても美味しかつた。くにくにと噛みながら、やはり頑張らなければと思つた。天のお母さんで、そうであるためには霧崎家次期当主の母親なのだ。

干し芋のお礼をしたくて、お話がしたくて、そわそわした。

ひょこんと扉から顔を出し、どこまでも続く廊下に出る。部屋の場所は分からなかつたけれど、歩いていけば誰かに会つだらうから、聞いてみよう。

女は干し芋をそこにのけたまま広い部屋を出て行った。

「こんこんと戸を叩く。

「天、天、お母さんです」

扉が開いて黒髪の子が現れた。

「天はせいが伸びましたねー」

寝台に腰掛け息子を見上げる。ソファも何も調度品が無い。広い板張りの部屋に、大きなベットと机しかなかった。それと幾つか生け花が床に置いてあつた。だが部屋が広すぎるせいもあって殺風景だつた。

「元気にしていましたか」

「ああ、それなりにな」

隣に腰掛け布団が少し沈む。

「母さんは?」

「お母さんも元氣でした」微笑んで答える。

「今」

「今は…今も元氣です。天と近くにいれでお母さんはとても嬉しいです」

「そうだな」ふ、と笑う。「だけど無理はあるなよ」

「はい、天。有難うござります。干し芋もとても美味しかったです」

「そうだろ?」にやりと笑う。

「下町から取り寄せさせてているんだ。もつと食つか?」

「お母さんは十分頂いたので大丈夫です」

「にこりと笑つて言うとほすんと頭が膝に乗つた。

「あー」と寝そべる。

「親父じやねえが俺の舌もこより母さんがいい」

「天が言つと本当に聞こえて嬉しいです」

額にかかる黒の髪をさらさらと撫で梳いた。自分の手から離れて

どんどん大人のようになつていつてしまつてゐるようで誇らしく思
いながらも少し寂しく思つていたが、こうじてみると何も変わらな
いやはり子供のようだつた。

「母さん、歌を歌つてくれ」黒い瞳を開けて見上げる顔がそう言つ
た。

「子守唄ですか？」

「そう言つな。何でもいい、母さんの歌つ声は安らぐ

「では……」

歌を歌い始めた。まだ赤ん坊で寝付かせていた時もすぐにはやす
やと眠つた。今も自分の膝で瞳を瞑つて和らいだ顔をしている。凜
々しく大人びた表情の抜けて、まだあどけなさの残つて見えた。
眠つてしまつたかな、と思つてゆつくりと膝をずらした。すると
腕が掴まれ瞳が開いた。

「もう行くのか？」

「あ、そうですね…旦那様もお戻りになられてているかもしません
し、そろそろお戻りは戻ります。お礼を言つて天のお顔を見るだけと
思つたのですが、長く邪魔をしてしまいました」

「そうだな、もう帰つた方がいいか。親父は自分が中心だから自分
がいる間に母さんがいなくて俺のところにいると知れば不機嫌にな
るだろ?」

扉のところまで送られて、ちょっと振り返る。

「また少しだけお顔を見に来てもよいでしょうか」

「ああ。昼の下がりに來い。そのときは空いてる」

親父は仕事中だしな、とにやりと笑う。

「では、おやすみなさい。天」

「ああ、お休み。母さん」

黒髪の息子の肩に手を置いて頬に口付けをした。そうしてから部
屋を出る。来る前が嘘の様で、心は浮き立つていた。ここにきて良
かつたと思った。

ドアの閉まつた後の少しの間、息子は頬に手をやり黙つていたが、

ぐると踵を返して机に向かつた。

部屋に戻るともう男は戻つていてソファでくつろいでいた。

「これはお前のか？」

テーブルの上の干し芋に視線をやつて言ひ。

「はい、干し芋です。旦那様も召し上がりますか」

「召し上がる？ 食い物なのか、これは」

「はい。お芋を干したものです」

「芋を干す？ それでこうへたれて色の悪いものになるのか。何か粉

も出ているぞ」

「るりは美味しそうに見えるのですけれど」

「お前は体が弱そだから腹を壊さねえか心配だな。大丈夫か？」

「大丈夫です、元気になりました」

「そうか。確かに顔色が良くなっている」

男は得心して頷いた。

「しかし食事の前にこんなものを食べるから食欲がなくなるんじやねえか」

「後でお腹が空いてしまつて、そうしたら天が届けてくれたのです」

「あいつが来たのか？」男は柳眉の眉を動かした。

「いえ、御執事様が代わつて届けて下さつたのです」

「そうか、執事は出入りができるのか」と男は呟く。

「ところでお前、使用人に敬語を使うな」

「いけないでしょうか」

「いけなくはねえんだが、お前や使用人の意識を変えるのに言葉使
いは役に立つ」

「分かりました。執事…さまが…」そう言つて口よどむ。「やはり
難しいようですね」

「そうだな」男は微妙に憂う顔をする。「俺も名で呼んでくれと言
つてはいるのに、いつになつても同じまだ」

「俺の横暴に嫌なら嫌と言つて、たしなめたい時はそうすればいい。それなのにお前はせいぜい困つた顔をするだけで我慢して、俺に対しても嫌な気持ちを溜めていくんだ」

男は女を自分の横に座らせ向かせる。

「俺は我慢しねえ。お前に自然に名を呼んで貰いたい。竜之介や天に嫉妬をさせるな」

「千次様…るりは千次様を嫌と思つていません」

「俺は嫌だ。俺を嫌な男にさせるな。勝手ではあつたが、こう欲の強い男では無かつた。以前は世の全てに淡白で、流れに逆らうことも面倒だった」

「それが今では、何をしてでもお前を手に入れたい。心の全てを俺で占めさせてえ」

銀の縁に収められた淡い水色の瞳を宝石に魅入るように見つめ、少しの溜息をつく。

「全く心が落ち着かなくなつてしまつた。使用者どこのか友や息子でさえ、男は男に見える」

ちょっとと微笑をして銀糸の髪を掬い、指の隙間からむらむらと零れ落ちるのを川の流れの様に眺める。

「お前は相手が俺でなくとも愛されればそれで幸せを感じるんだ。俺が死ねばお前はきっと流されるままに他の男を受け入れるだろう」

「そんなことはありません、旦那様。るりはずつと旦那様のものです」

きゅ、と男の衣服を掴んで言つが、その様子に微笑を向けて男は続ける。

「どうしてお前を責められるだろう。お前は拒む力を切り取られてしまつたんだ。そうしてそれで俺はお前を手に入れた」

「旦那様はるりの言つことを信じて下さらない…」

女はしょぼんと頭を垂れる。男はそれを撫でた。

「お前は俺を俺として見ないようにしているんじやねえのか。主人や旦那と呼んで、仕える者が代替しても差し支えないようにして。

恐れ多いなどと言つのはみせかけで、本当の意図はきっとわかつ
風に骨の髓まで染み込まれたんだ」

「旦那様の言つていることがるりは良く分かりません」

「つまりは、」男は笑つた。「俺を名で呼べと言つことだ」

「はい、千次様」

女は男が笑つたのでなんだか笑つた。それを見てまた男も笑つた。

十一・許婚

三時の頃に行くと、茶菓子が用意してある。今日は牡丹餅を食べていた。

「天は甘いものが好きですか」

それを自分も貰いながら聞く。二つの間にやり部屋にはソファとテーブルが置いてあつた。

「何でもいいが、腹が空く」

「とても頑張つてお勉強しているのですね」

「そうだな、何でこうも習い事をしているのかと思ひ暇もない。俺は随分と遅れているらしい」

お茶をすす、と囁ると「親父より」と言つてくすりと笑つた。

「それはお母さんが悪いのです」とちょっと俯いた。

「天どずつと離れたくなくて、家に行くのを遅らせてしまったのです」

「いや、それ以前にだ。まあどうもあの人は歴代でも特別らしいから気にしていない」

「例えどんなことを習つていますか」

「挙げたら切がないが、諸学問に実学、教養だな。異国の言葉を幾つかと国際法というのもある。後は礼儀作法に和歌や楽器や生け花、茶もあれば能の鑑賞もある。実は結構楽しんでいる。特に武術を」

笑つて腕をまくると紫の痣が体中にあつて女は息を飲む。

「とても痛そうです。天、きちんと手当てをしなければなりません」

女が寄つて来るのを押しどめる。

「これくらいで手当てしていたらかえつて動きにくくなるだらつ」「やらなければならないのですか…お母さんもとても痛くなります

「あなたは俺に親父のようになつて欲しいんだる?」

「天はもう優しくて立派です。お母さんはとても誇らしく思います

「俺はやりたいんだ。力を持たなければ何もできないからな」

「天は何かをやりたいのですか」

「さあ。だけやりたいと思つたときに弱い自分を見るのは嫌だろう?」

「う?

「そうなのですか。天はとても強いのですね。お母さんも見習わなければなりません」

「母さんなんかは、守られていればいいんだよ。そういう為に俺達は力を持ちたいと思うんだから」

「お母さんも何か役立てたらいいのですけれど」

「じゃあ夜食を作ってくれよ」

「分かりました。お母さんはお夜食を作ります」

女は嬉しそうに笑つた。

「台所を貸して欲しい?」

「はい、旦那さ…千次様のお食事を作られている北のお台所を使わせて頂きたいのです」

「なんだ、俺の飯を作ってくれるのか?」

男は微笑をして面白そうに髪に手を巻く。女は少し考えてから言った。

「るりはすることがなくなつてしまつたので、何かしたいと思つてしかしごにして両頬を引つ張られる。逸らした目が思わず上を向く。

「ほめんなはい」 そう言つと離された。

「天のお夜食を作りたいのです」

「全く」 頬をさする女を笑いながら見る。「吐けない嘘を吐くな

「別に、いいぜ。妬くと言つてもそこまで度量の狭い男じゃねえ。

お前が俺のいないのを見計らつて天の部屋に遊びに行つているのも知つている」

「や、」と女は言つて頬を赤らめしどろもどろに弁解する。「見計らつたのではなく、旦那様がいなくなるとるつは手持ち無沙汰とな

つてしまつので、少し、」

「はいはい」男は頬を撫でる。

「ついでに俺の分も作れよ。それと、天には使用人に届けさせる。夜にふらふらするな。寒くなつてきたしな」

「はい。ありがとうございます」女は嬉しそうに笑つた。

「それと今、名前で呼ばなかつたな？」

「あ、」

にやりと男は笑う。

「さあ、早く作つて来い。夜食を頂いたら躰けてやるわ」
ぽんと押されたのが尻で、女は頬を染めながら一人分の握り飯を作りに向かつた。

「別にいいんじゃねえか、決めなくて」

「ならん。お前で緩んでしまつた枠を締めなおす為にも、天にはきちんとした者を嫁がせる」

「蒸し返すなよ、俺の選んだ女がきちんとしていないと言つ氣か」「お前にはいい加減にもう失望した。何も言わん。こうなれば一刻も早く天を叩き上げて当主を継がせるしかあるまい」

「俺は別に当主じゃねえけどな」

「私は認める。この家の当主はお前だ」

「どつちなんだよ、俺を認めているのか認めていないのか」くつくと笑う。

「爺さんだつて認めたじやねえか。あいつがあんたと血を分けてい
ると」

「今はその話ではない。天の許婚を決める話だ。お前で事を進めて
いるかと口出しせずにいたが、全く決めていないとはどうこうこと
だ。もう位の高い者から決まつてしまつて、遅すぎたらどうする
「奪えばいいだろう?」くすりと面白げに笑う。

「そんな横暴ばかりを繰り返せばいつかは不満が雪崩となつて押し

寄せる。高い位置に立つといつのはその下に踏むものがあるからだ。踏み外せば一拳に転落してしまつものだ

「なんか昔に習つた覚えがあるなあ。良くな年で覚えてる」

「お前は習いなおせ」

「そんな暇はねえんだよ」

「嘘を吐くな。お前の仕事の速さだけは認めてる」

「全く、それも一日中瑠璃と遊んでいるつもりだったのに感謝しろよ。まあ俺の不在で家が傾いてあいつに勝手な責任を感じさせたくねえからな」

「またお前は…どうしてそもそも色慾が強いのだ」

「できる男というのは往々にしてそういうものだ。親父も女を作つたらどうだ？俺も瑠璃がいなかつたらそもそも偏屈で心にゆとりの無い男になつていたかも知れないと思うと憐れだ。良く女なしで生きてこれたな」

「ふざけるのは大概にしろ。お前は田上の敬意といつものが無さ過ぎる。御祖父様もお年召して伏せがちになつて、今は私がこの家の意向を決める役なのだ」

「当主とは名ばかりで実務を仕切らせる操り人形。故に霧崎家は早い代替わり。こんな奴の言いなりになるなんて、天が可哀想だなあくすくすと男は笑う。たしなめるように男の父は言つた。

「若くからに経験を積ませ、経験を積んだものが助言を与えるのが古来よりのこの家のやり方だ」

「ちなみに伏せがちとはどこのじじいのことだ？今度瑠璃の髪の一本にでも触つたら俺が息の根を止めてやるつ。呆けた振りしてぶらつきやがつて、あの放蕩じじい」

「そんな筈は無いだろ？御祖父様を侮辱するな」

「まあこの調子じゃ田を盗むのは楽だらうな、そういう意味に限りいい親父だった」

男はしみじみと言い、父はより一層眉間に皺を寄せる。

「話は分かった。屋敷に年頃の娘を集めて気に入つた女を天に選ば

せよう。反応が楽しみだ。あいつは俺に似ていると人は言つが、遊びもなしで与えられたものを文句も言わずにこなす生真面目振りは親父側の人種に思える

「お前に似たのが容姿だけなら本当に心が休まることだ」

「全く同意だな」

ふう、と初めて同調して男は立つた。

「天のお嫁さんですか？」

「ああ、そうだ。お前も出席しろよ」

女は顔を輝かせた。

「るりもよいのですか、大事な席に」

「ああ、あの親父も出席させて、他の女と較べればお前の美しさを認めざるを得ないだろ？」

「天の為ではないのですか」

「どうせ茶番だ、利用したっていいだろ。尤も、天に好みの女がいればそれで構わねえしな」

「るりは出席しなくてはならないでしょ？ つか」

途端に曇った顔に男はどうした、と訊く。

「お若くてお綺麗で、御教養のたくさんある方達と較べたら千次様はるりにお飽きになることだと思います」

「そうか、それは楽しみだなあ。お前を越える女がいるのなら見てみたい」

可笑しそうに言つた男の言葉を真に受けて、女は浮かない顔をした。

十三・見合

なんだこれは、と溜息が出た。

元服の式を終えての祝いの会を開くと言つた親父に不信を抱きはした。自分の元服に興味など無い筈だった。だがまあ母親に請われたのかもしれない、それなら無碍にするのも可哀想だろうと深くは考えなかつたのだが。

「天様はお花を生けるのに素晴らしい才をお持ちなのだそうですね。わたくしの家は代々お花の家元をやつていまして、是非我が家にいらして欲しいですわ」

「わたくしも多少の心得がありまして、先月の会では賞を頂きました。天様とお花についてお語りしたいですわ」

「嫌だわ、賞などと俗世なことを。お花は人の心と自然との対話ですのに。ねえ、天様？」

「わたくしはまだ未熟で…天様に何かご指南していけないでしちゃうか」

恐らく訊かれはしているが、何も答えなくとも話は争いでもするようにはつきりなしに飛び交うので無言でも構わないようなのが救いだつた。

そこに居並んでいたのは全て女だった。自分より大分下のものも上のものもいるが、しかし大体は近い年頃のようだ。二十人近くいるが、それが全部自分を取り囲んで高い声で恐らく内容の無い言葉を喋つてゐる。この交じり合う不協和音に耐えられなかつた。別個で見れば着物に簪、お香と名々確かに美しく思える着飾りをしているのだが、その色彩や匂い、声の音調が交じり合うと甚だしく調和に許せないものだった。花花と言つてゐるが、花だとしたらこう主

張し合つては美しいものも美しくはならない。

苛々は募つても顔に出さないよう必死で、それ故しかめ面になつてゐるかもしけないが最初見た瞬間からげんなりしていたので、幸か不幸か機嫌の悪さには気づかれない。

心中だけで溜息をつき、ちらと一段上がつて半透明な薄布のかかつてゐる奥を見た。この状況にいる自分を見てくつと笑う口元の男は視界から意識を消し、その隣ではらはらと自分を見ていた女と目が合つた。それは澄んだ空色の瞳で、少しがこちなくはあつたがにこりと自分に笑いかけた。

綺麗だと思わざるを得なかつた。

普段意識はしていなかつたが、自分の母親がここまで美しいとは知らなかつた。

その上悔しいことに、黒に近い着物の男と白が基調の着物を着た男女は顔立ちはとても整い、その色彩も背丈も雰囲気も何から何まで釣り合い調和しているように見えた。まるで夜に咲く一輪の白い花を思わせる。可憐な花は月光を浴びて白く輝いている。

そんなことを想い安らぎを取り戻しかけていたところに、男が断言するが、わざと見せ付けるように肩を引き寄せ刹那に女に口付けた。離されてから女はかあ、と頬を染め、男は自分を見て不敵があるいは単純に面白気にか、くすり、と笑う。その瞬間にぴきりと顔が引き攣つたのが自分でも分かつた。

「天様？」

途端に心配氣を装つた不満の声が漏れる。視線の先に気が付かれてそちらに視線をやられる。

「初めてお見かけしましたがお美しい方ですわね、天様のお母様。とても珍しい髪と瞳をお持ちですわ。でもの方」

「なんだ？」適当な相槌を除いて初めて口を開き、意識がはつきりと女に向かう。

「あ…いえ、あの異国の血を引いていらっしゃるのかしらと思つて」

女は顔を赤くして、口を開かせてから答える。

「そうだろうが育ちはこちうだろつな。母上は異国の言葉を話さない」

唯一はつきりしているのはその会話だけだった。後は、それから異国のことについて話が切り替わった気がするがよく覚えていない。

「今日はどうでしたか、天？」

やつと長い長い、一日より長く思えた会が終わって母親が訊く。
「無駄な時間だった」

仏頂面に答える。普段時間を切り詰めて勉強をさせているのに、こんなことに裂く余分な時間はあったのか。

「お前にとつては貴重な時間だったんだぜ？ 女といつものを知る親父は相変わらずくすくす可笑しげに笑っている。

「どの女が一番美しかった？」

「母さん」ふん、と答えにならない答えを答えてやる。しかし男は満足げに、

「そりだらうな」と答えた。それから今度は女に「分かつただらう？ お前より美しい女などいないんだ」と言ひ。

「つまり俺は出汁だつたってことか」はあ、と溜息を吐く。

「違います、天。お父様は天のお嫁さんによい人を探しているのです」

「いや、出汁でも探している訳でもねえよ。単なる余興や」

男は母親の肩を寄せる。

「一緒になりたい女は自分で手に入れろ」

尤も、と男は笑う。

「優秀でいたいなら、決められた女と結婚をするのがいいだらう」

そうしていくことに踵を返し、女も従おうとしたがしかしその手首を掴む。

「母さん、ちよつといいか

「え」女は振り返り、ちょっと流し田で顔を後ろに傾けた男を伺う。

『『母さん』を困らせるなよ』

それだけ言つてすたとそのまま先を行つた。

「なんでしょう、天」

子の部屋にいた。息子が立っているので自分も立つたままだ。何故かどこ知れぬ不安を感じていた。

「何緊張してるんだ?」笑って、座れよ、と促されたのでソファにおずおずとしゃがむ。

「母さんてさ、どうやつて親父と会つたんだ?」

「え、えと」何故か女は口よどみ、水色の瞳を泳がせた。

「ここで働くことになつて、それでお父様に出会いました」

「ふーん?」その様子に不信を抱いたのか、近づいてくると両頬を挟み瞳を覗き込んでくる。

「本当か?」

「ほ、本当です」

黒い瞳をちらり、と見て赤くなり縮こまつて答えると離されてほつとした。

「ここで働いていたということは、どこかの貴族の娘だつたのか?」「違います」御祖父様　天のひい御祖父様の気に入られて、旦那様のお傍に仕えることになつて、「

何故かもう泣きそうになつたのを見て、思わずその銀の頭を撫でた。この屋敷で貴族でないことは、色々と辛いこともあつたのだろう。親父は人の目も気にせずちょっとかいを出して、それが妬まれたりしたのかもしれない。身分も無くてそれでも親父は無理に妻にして、きっとそれで家を別に持つて暮らしたりしたのだろう。

「そんな顔するなよ。貴族なんかじゃなくても母さんは俺の母さんだ」

そう言つと顔を上げて大きな瞳でじっと見つめる。

「親父の血を引いているのは甚だ気に食わないが、あなたの子なら誇らしく思う」

「天…」

涙を溜めて見上げてくる母親から離れ、息子は引き出しから何か出すと戻つてきてそれをぽんと渡した。

「解いてみる」

包みを解くと、緑色の西洋エプロンがあつた。

「いつもの夜食のお礼」

「これを…お母さんに？」

女はそれをまちまちとみて、笑顔になつた弾みにぱろりとついに涙が零れ落ちた。それは雨上がりに花から雫の落ちるようで、相当に美しいと思つた。

「ありがとうございます、天」

「付けてみるよ」

女はそれを首に通し、そして後ろ手で紐を結ぶ。型は不思議な程ぴつたりだつた。

「布を指定して、仕立てさせたんだ」 こうこうことができるのほい身分だな、と息子は朗らかに笑う。

「天、天、お母さんはとてもとても嬉しいです」

母親はくるくるとダンスするように回りひらひらするのを無邪気に喜ぶ。子供みたいな喜び方だな、と息子は苦笑した。

「お母さんは似合わないでしょつか」

苦笑にはたと止まり心配気に聞いかけた。

「似合つてる」

言つと花咲くように笑つたので、思わず目を逸らした。

「用はもう済んだから、もう帰れ。引き止めて悪かった」

「いつでも引き止めてください」とあまり訳の分からないことを言って母親は嬉しそうに緑の布切れを抱えにこにこと出て行つた。

最近思うのだが、母親はあまり長くここにいさせたくない。

俺も妙に色気づいたな、と息子は微妙に苦笑した。

そうだ、女に見えることがある。一緒に暮らしてきた時には感じなかつた。離れて暮らす間にどういう変化があつたのか。女から離

れて免疫というものがなくなつたのかかもしれない。

俺もああいう女と似合つたのだろうか、と父親と母親の並ぶ姿を思い出して未だ見ぬ相手をぼんやりと思い描いた。

「なんだ、それは」

大事そうに胸に緑の布を抱えて戻ってきた女に声かけた。

「天に貢つたのです。エプロンです」

嬉しそうにそれを広げ見せてみる。

「へえ…付けてみろ」

「はい、旦那わ…千次様」

それを再びつけると、また羽が生えたように体が軽くなつた。

「ほお」濃い緑色のエプロンをつけた女を見て男は目を細める。やはりこういう西洋物は良く似合つた、と思つた。

「中々いい見立てだ。あいつの美的感覚の良しをみると、やはり俺の子のようだ」

「るりは似合いますか、旦那様 ではなくて、千次様」

はあ、と苦笑する。「分かった、無理に呼ばなくていい。ただ呼びたい時には呼んでくれ」

できないことを諦められて少し寂しそうとしました。

「似合つてゐる」男は笑う。「それに 何故だか酷くそそられる 「え」

「早くお前を揺すぶりたい」

「千次様…」女は滅多になることに自分から男の腰にきゅ、と抱きついた。

「るりも千次様にとても御奉仕したいです」

「どうした? お前がそもそも積極的とは珍しいな」

「るりにも千次様のお子を宿せるでしょ? つか」

「どうだらうな」

いつか言おうと忘れていたが、忘れたかと思っていたが、やはりまだ言えそうにはない。

「たくさん頑張ります… 千次様のお種をるりにたくさん下さい」
膝をぺたりと床につけて腰に頬をよせるのを、まあいいかと頭を
撫でて思った。こいつの受けた事実の酷さを鑑みれば、言つ必要も
ないことだ。

十五・腕試

腕試しをしてみようかと思つて、験しに試みてみたら、危ういところでなんとか成功した。

やつとこの堀を越えることができた。

父親はもつと早くから屋敷の外をふらついていたそうだが、原則出歩くのは禁止されていた。無駄なほど厳重に警備され、公式の許可のないと入るどころか出れない。特に跡継ぎは当主になるまで滅多に顔を表に出させないようになつていて全くとくに外界から閉ざされていた。

とは言つても屋敷の敷地は広く、町の幾つ分もあつて庭どころか山もあり基本は自由に屋敷内を歩けたので特に閉塞はされていなかつた。

少し昔、ふらりと一人若者が現れてふてぶてしく門番に入れると言つてきたそうだ。当然締め出そうとしたら逆に屈強な男達が瞬く間に丸腰のその若者に捻り上げられてしまつて、次々となぎ倒して大騒ぎになつた。その若者といつのがなんと本家若旦那だった、といふ話を師範に聞かされた。

『全く、大丈夫なのか。』『この警備は』と呆れられて叱るどころかものも言えなかつたと言つ。普通門の警備の者などは当主家族の顔すら知れないものだが、その若者についてはすっかり顔馴染みになつた。ふらりと消えては堂堂と門外から帰つてきたらしい。勿論若者といつのはあの親父のことだ。

時間と場所を見計らい、高堀を越えてこいつそりと出てこれはした。しかし自分の体格の何倍もある門の警備を力づくで正面突破できるかどうかについては考へていない。まあなんとかなるだろう。

入るなと言つなら帰らなくてもいいしな、

ちらとそんなことを思つてから、やはりそんなことはできないだろつと思つた。どうやら母親が人質の気分だ。失望させたくない。

それにしても面倒だ。部屋を抜け出てからこの塀外に来るのに一刻もかかっている。折角だから久々に外の空氣に触れなければ損だと街の方に向かつた。

干し柿干し芋、漬物、飴などの菓子、雑貨の立ち並ぶのを久々に見た。

母さんと買い物に来たこともあつた。と遠く思える昔を思つ。その中で、簪の一つが目に留まつた。散々屋敷の物に目が慣れた今は子供の玩具のような質だつたが、つくりは丁寧に梅の花を模した白い飾りがついていて、よく見ると薄く桃色に色づいているように見える。きっと心を込めて作られたものだらう、美しいと思つた。

「坊ちゃん、気になりますかい」

店の男が顔を向けて言つた。坊ちゃんと言われたことに何故か多少の抵抗を感じた。目立たない身なりにしてきたと思ったが、流石に商売人は目利きなのだろうか。年もあるだろうが、前の自分だったらとても手が届かない値だらうと相手にされなかつたに違ひない。「良く作られている」

母さんに似合つかな、と思つたところで手に入れなくなつた。また過ぎる程喜んで無邪気に笑うだのろうか。こういつた簪などあまり身につけているのを見たことがなく、あまり自分のものを持つているように見えないが、父親から何かものを贈られたりはしないのだろうか。やけにはしゃぐ様は、人から物を贈られたことが滅多にない喜び方にも思える。

「貰う」

店主が嬉しそうに手をこすり合わせて値をいつたところで、おや、

物を買うのに代わりに金銭が必要なことを思い出した。言えば何でも手に入るのと、久しく買い物というものを忘れていた。

「坊ちゃん、お付きの者とおはぐれなすつたんですかい」

止まつた様子に、店主は言うので、なんだか可笑しくふ、と笑つた。

「またこれを見かけたら、お前の好きな言い値で買おう」

そう言うとへい、と店主は急に畏まつた。

全く、自分も随分と偉そうな物言ひが板に付いたものだ。
相変わらず自分を奇妙に思つて薄つすらと笑い、その店を立ち去つた。

さて、と門に近づき氣の自然と締まる。前に立つとやはり一倍はある大男を見上げた。

口を開きかけたが、するとその大男達は少し驚いた顔をしてから、しかしそれから仲間内で得心したように大きく頷きあつて間を空けた。何か嬉しそうに口元は笑つてゐる。

「お帰りなさい、若旦那」

そうは言つて置いて平伏もしない。屋敷の中の者達にはない、何か大らかさらしきものを感じた。

「何故、俺だと」

からからと男達は笑う。

「昔の若様に瓜二つのお姿だ」

ち、と舌打つた。まさかこんな形でどうにかなるとは不本意と言わざるを得ない。

「その表情も、本当にお懐かしい。我々も年をとつたものだ」

「一つ違うのは、昔の若様は決まって夜にお見かけしたことか」

「昼のお勉強をおさぼりになつてはなりませんよ、若様」
楽しそうに、懐かしがるように自分を見てゐる。そんな注意まで受けた。あの仰々しさを思つと、こちらの方が親しみを覚え、無礼

だとは微塵も不快に思わなかつた。

「お前達も貴族なのか」

「いいえ、我々は武士です」

「身分で言えば平民ですか。よく定まつてはいませんが、傭兵専門の職です」

「傭兵が恥ずかしい」と、前代の若様には散々にしてやられましたが

「俺もお前達に挑んでみようか。剣を試したい」

「勘弁してください、若様にしてやられても恥、押さえつけても罪となつてしまします」

「何だ、気の抜けてつまらないな」

「お口癖まで同じだ」

からから笑うのにむつとする。

「俺は口癖ではない」

「それは良かつた。昔の若様のように我々で発散されでは困る」

「それなら早く通せ」

ふん、と言うと素直に門は開けられて、そこを仏頂面に通つて行つた。

「楽しかつたか、天」

くすくすと笑う親父がいる。母親は自分の傍に駆け寄つていた。
「じ無事で良かつたです、天。天がいなかつたのでお母さんはとても心配になつてしまつて」

「心配も何も、前は街くらい一人で行つてきただろう」

「けれど天はもつお世継ぎなので、悪い人に狙われるかもしれませ

ん
「全く心配だ」親父が言うと馬鹿にしているように聞こえる。

「腕の立つ者を一人つけさせよう」

「余計な世話だ」噛み付くように睨み付ける。

「お前の為ではないからお前の言い分は聞かねえ。瑠璃に余計な心

配をかけさせねえ為だ」

「そんな者、振り払つてやる」

「そうするといい」相変わらずくすくす笑つて「行くぞ、瑠璃」と先を行く。

「旦那様は本当は天を想つているのです。御宗主様に伝わつて警備の重くならないようすぐにご配慮をされたのです」

少し声を小さく「そと言つてから、とた、と急いで後を従いて行つた。

本当も何も、母さんの注意が自分以外に向くのが嫌でそうしたに違ひないのが本当だろう。だがなんにしろ付き人を付けると言う意味は黙認したと言つていいだろう。尤も自分が散々放蕩だったというのに禁じられる言われないが。

やつと黒背に追いついてしづしづ行くのと歩幅について行くのを懸命にやる母親を見るといつもいつも何か憐憫の情の湧くのだった。

番外・霧崎家の正月

「新春の御喜びを申し上げます」

正月[元旦]。

霧崎家の正月は挨拶に始まり挨拶で終わる。[元旦]、本家家族から始まって分家親類の来訪。一日以降、他貴族。ひつきりなしに来る挨拶を只管受けでは返し受けでは返しで三が日が終わる。終えても出廷して皇族への挨拶。

全く、母さんとみかんを剥いては『じう寝した寝正月が懐かしい。親父もいなかつた。なんて幸せな正月だつたんだろ』。

そんなわけで、形式通りの口上を除いてまだ年明け一度も母さんと口を聞いていない。三が日落ち着けば真っ先に自分のところに来るかと思ったが、来ない。慣れない来客で疲れているのかもしれない。

まあ新年の挨拶をしてやりに行くことにした。蜜柑もある。きっと大げさなまでに喜ぶことだろう。

しかし口を叩くが出ない。

「母さん?」

暫く待つて、いないのか、と思って帰ろうとしたところ、きいてと僅かに扉が開いた。

「天……」

首から上だけを出して体は扉に隠れている。何かもじもじしている。

「どうしたんだよ?」

「あの…恥ずかしくて」

「はあ?」

「お母さんはお着物を着ていないので」

「はあ！？」

暫し呆然とする。つまり、

「……裸？」

「はい……」白い頬を染めこくんと頷く。それから神妙な顔になつて話し始める。

「新年は、新しい気持ちを持つので今迄の御衣を身に纏つてはいけないのです。るりはそれを知らないで、新しいお着物の準備をしていなくて……挨拶の時は曰那様のお母様のものを特別にお借りしたのですが、今は着るものがないのです」

不届きだった自分を恥じるよつに申し訳なさ氣にそつ述べた。

「……あの変態」

ぼそりと呟く。

「天……」めんなさい。けれど、お母さんは変態ではなくて、「泣き出しそうになりながらも必死に弁解しようとしている。

「母さんじやねえ。だが母さんも母さんで、何簡単に騙されてるんだよ。正月に新しい着物がなけりや裸で過げます？そんな訳ねえだろ。あの変態色親父！」

「天……！」母親がはつとした表情をする。まさかと思う時には遅かつた。

「誰が変態だ？」

後頭部ががしりと鶯づかみされていた。めりめりと指が頭蓋骨に食い込む音が聞こえるようだ。

「……離せつ」

「天、今なんと言つた？」後ろから低い声。

「あなたが変態だつて言つたんだよー！」
ぎしお。

「うああああー！」

足先が床を離れる。それは頭を齧づかみにしたままで。そんなの大男の所業に収めて欲しいが、一体どこにそんな力があるのか、この細身の男の片手のみに扱り頭を掴み上げられ宙に浮いている。まるで赤ん坊か幼児の頭でも掴むようだ。

思考がなくなるほど頭が痛い。歯を食いしばり必死に力を込めて頸を引いていないと頭が首から外れそうだった。脳みそが絞り取られるような剛力。拷問以外の何ものでもない。

「だ、旦那様！天の首が取れてしまいます！」

母さんが身を乗り出し、悲鳴に近い声を上げて親父の腕に手をのばす。その瞬間に突然頭から手が外れ、ぞせりと身が床に落ちた。真上から落ちた上にほとんど朦朧としていて受身もうまく取れずには腰を打つ。

「瑠璃……俺以外の男に肌を見せてはいけないだろ？」「

「あ。ごめんなさい、旦那様……天がとても痛そうだったので心配になってしまって、」

文字通り目が霞んでそれどころではないが、慌ててまた扉の中に引っ込んだようだった。

「天、大丈夫か？」にこやかに親父が聞いてきた。睨み返す。頭を自分で揉み解しながら身を起こした。

「天が涙目になっています」おろおろと、しかしまだ扉から出れずに心配気に言う。

「なつてねえよ！」

「当たるんじゃねえよ」腹の立つほど愉しげな微笑で言つ。

「そうだ、天。御年玉をやる！」

「いらねえ」即座に返す。どうせひくでもないものに決まっている。普通に金の訳がない。

「そつか？残念だな」あっさりと引いた。

「お母さんからも、いりませんか……」返事は哀しそうだった。

「母さんが？」ちょっと気になる。

「貰つておけ」そう言つて視界が真っ暗になった。どうやら親父の

手が旦に被さつている。

「離せ。俺に触るな！」しかし振り払えない。

ひゅ

頬に柔らかなものが当たつた。手が離れる。呆然とする。今、柔らかいのは

「唇……？」

それだけじゃない。それだけじゃない。何か別の、柔らかいのが一瞬触れた。あの位置は それに、母さんは今何も着ていなくて その姿で今 といふことは

ぱしん

頬が叩かれた。言つまでもない。そいつを睨みつける。

「俺からだ」くすくす笑う。「新年の氣付けに」

「いらねえって言つただろ」

「新年早々何邪なことを考へてるんだよ?」この、色ガキ

「なつあんたつが

わなわな拳が震える。

「天、血が出てこます」

「出でねえよ!」

それでもばつと顔半分下を覆う。鼻をこすつてたまるものか。母

親は心配気、親父はくつくと腹を抱えそつなまでに笑つている。

「あんたが…疚しいのはあんたの方だろ! 新年早々から母さんだけ服を脱がして

「俺も後で脱ぐもんな?」

「はい。るりが旦那様のお衣を解きます

「やつてろ!」言い捨て蜜柑も置き捨て背を向ける。

「天! 新年、明けましておめでとうございます。今年も天のよいお

年でありますよに」「

「…おめでとう。母さん、も」

そう言つてからさつさと足早に立ち去る。頬がじんじん熱いのは、
ぶたれた所為か口付けられたせい。

俺も、今年は

「旦那様も天にお年玉をあげたかったのですか?」

「可哀想だらう? 可愛い息子に拒まれて。慰めてくれ

「はい、旦那様… るりからも、旦那様にお年玉です」

「じゃあ俺からも」

「今年も宜しくな、瑠璃」

「宜しくお願ひします、千次様」

蜜柑がこりんと剥かれて置いてある。

「それで、お前か」
苦虫を噛み潰した顔をした。

これがあの親父が腕を認めた者か。
自分とそれほどは年も離れていないように思える。筋骨隆々たる、
と言つわけでもない。どうせ適当につけたのだらう。
「下がれ」溜息を吐きやつ言つと、部屋の外に出て。しかし部屋の
外のまま動かない。

「俺の近くに寄るな」

軽く睨むと、ようやつとその若者は答える。

「我慢してください、若旦那」

もう一度男を見直す。育ちが悪いと云つては無いがこの屋敷
には無い粗野な雰囲気を感じた。

「若旦那の意向に沿つよつにはなるべくはしますが、あくまで私は
旦那に雇われている身なので」

成程。それで屋敷以外の者を使つ訳か。

「天…どうしたのですか。お腹が痛いのですか」

顰め面にころおろして母親が言つ。

お茶の時に迄用心棒とやらがいる。いや、見張り役か。本当
は母親の来るこの時を邪魔させようとしているんじゃないだらうか。

「お歌はよいですか」

睨み付けた。人を気にしない辺り、母親も親父とは別の意味で何
か自由さがある。

「もう帰れ」

「あ、はい…では。お邪魔をしました」

しょぼんとした様子で立つ。機嫌を悪くしたのは自分が何かした

のだと思つてゐるのだろう。しかしそのまま何も言わずにそと
出て行くのを目だけで見送つた。

「あーあ」

手を後ろに組み、背もたれに体重をかける。

膝枕。

ぽつりと思つてから、いつの間にかそれが唯一この家で安らぐ時
だつたことに気がつき驚いた。前はむしろ自分が構つてやるような
気持ちだつたのに、何か立場が逆転した様で気に食わない。

どうもあの父親の手の平の上にいる妙な感覚がする。一角だけ人
のいなくてあの屋敷から抜けられたのも、母親が自分のいないこと
に気がついたのも、すんなりと屋敷に戻れたのも、それで事を利用
して体よく見張りをつけられたのも、一体どこから仕組まれていた
のかと考えるのは考えすぎか。

いいや、有利得なくはない。人を動かすのは自らの意思と思わせ
るのが要だとそんな事を教えられたでは無いか。

釣り。魚を捕らえるには釣り糸を垂らせ。自ら動いて手足を
濡らすこと無く、餌に食いつく一瞬の機だけを逃すなど。
自分は魚か。それも生簀に放り込まれた。

もうつ面倒だ。

そう思い立ち早足に廊下に出る。後ろは歩幅をどう変えても歩調
を合わせて来るが、構うものか。

漸くとことこと歩幅を狭く歩く銀の背姿を前に見た。早足に近
づいて、気配に気がついたのか振り返ろうとちょっと止まつたとこ
ろを後ろから捕らえた。

「さや、

銀糸の後れ毛のかかる白いうなじが震え、体の縮まつておずおずと振り返る。

「天、」ほつとしたように顔を緩ませた。

「お母さん、少しひくりしてしまいました。どうしたのですか、天」

母親が微笑み正面を向こうと身を捩じらせて、それで自分の回し腕が後ろから抱くようになっていたことに気づく。だが驚かせたことに小気味よく思つて、まあいいやとさす、と振り向けないようもつと腕をしめる。

「ど、どうしたのですか。天」

「母さん…頼みがある」

いつもと違う仕草に少し慌てたその様子に面白くなつて悪乗りしわざと耳元に囁くように言つとびくりと震えて余計に面白くなつた。後方にいるだらう見張りにむしろわざとみせつけるような気分だつた。自棄になつてしまえば後は楽しい。

「はい、天。お母さんにできることなら、何でも頼んでください」

母親は平常になつて頼られたことに嬉しそうに微笑み言つた。

「あいつが俺に纏わりつくのを止めさせてくれ」

「え、けれど…天をお守りするためなのです」

「四六時中付き纏つてくるんだ。俺は一人が好きだと知つているだろ？このままでは気が狂いそうになる」

「母さん…母さんにしか頼めない」

耳元に甘えた口調で言つと、思つたとおり効果は大きかつた。そのままこくんと頷く。

「分かりました。お母さんに任せてください」

くす、と口元は弧を描いて抱いていた体を離す。

「有難う」

礼を言つとかなり嬉しそうに笑つた。

「旦那様… るりはお頼みがあります」

「なんだ、言つてみろ」男は面白そうに、膝に乗せた女を見た。

「天のお付き」しかし口は手に塞がれた。

「なんだ、天の頼みなら聞かねえよ」男は途端につまらなさ氣な顔をする。

口を塞がれているのもじもじと何か言いたげにした。

「そりや氣の落ち着かずに鬱憤とするに決まつている」

しかし、と男は口元を上げる。

「俺は振り払いいたいならそうすればいいと言つた筈だ。全ては己次第 これくらいの状況でどうともできないならそこまでだ」

大人しくなつたので口から手を外す。

「旦那様はどうしたのですか」

「お前は時々勘がいい」男は笑つが特に答えない。

「女を使うというのも手だが、取り合えずは失敗といつところだな」「千次様… るりは困つてしまひます、天に頼りにしてもらつたので」「そうか? お前が困るのはいけないな」男は口元の笑つたまま女を撫である。

「いいだらう。外してやる」

あつさりとそう言つた男の口元はしかし先ほどより愉し氣で、ちよつと不安氣に顔を見上げる。

「さあ瑠璃、これで心置きなく遊べるな?」

吸い込まれるような黒の瞳に捉えられて、また全て感覚も奪われてしまつていった。

*

むしろ戯れ半分だつたのだが、まさかこうもあつさりと付き人が消えるとは思わなかつた。それも忽然と、元々幻であつたように霞の如くに消えた。屋敷の他の者に聞いても身元は知れなかつた。余りに不信過ぎて素直に喜ぶのは阿呆だということだけは分かる。

部屋で筆を止めては耳をそば立てて見たり、夜に用を足すのに廊下で足を止めて振り返つてみたりと、神経を砥いだ。

いるのかいなか判らない。どこから監視されているのか分からず、神経が消耗する。

いつそ見えていた方が十倍もましだった。

そう思つてから、あまた嵌められた、と思つた。安易に人を利用しようとした自業自得という氣もした。母親には何の責めもないが、それを抱きかかえて自分を笑う父親が見えるようだつた。結局あれは親父のものだ。

「なんだか天はどんどんと大人になつていくよつです」「結構なことじやねえか」男はくす、と笑う。「言葉の割りに残念

そうだな」

「るりに甘えなくなりました。なんだか少し素つ氣無いよつです」「親離れといつものだ」

「けれど、お顔も険しくなりました。笑つてくれません」

「お前は構いすぎるんだよ。甘えて欲しいなら甘えてくるまで待てばいい」

「そういうのですか」

「家から離れて暫く振りに屋敷で会つてからは甘えてきただらう? だからまた暫く会いに行かなればいい」

「分かりました。るりは少し我慢してみます」「くす、と男は笑つた。

屋敷を抜け出し人の喧騒に紛れた時が一番落ち着く。人の中が落ち着くとは以前と逆で可笑しなものだ。木を隠すなら森というのだろうか。

何も宛てなく何も考えもなくぶらつく。このまま人に紛れて帰らなかつたらどうだろう。世の頂点に立つ筈だった男が、あのどび職、その店の番頭、先の豆腐屋の主人、延々と声を上げる時売り、野菜を売りに街に出では畠に帰つていく農民、はたまた浮浪をして船着場でのたれ死んでいたら。

ああ、それは愉快だ。

あの父親はこんなことを考えもしなかつただろうか。そんな姿は想像もつかない。あの男は元々人の上に立つ器を持って生まれたのだ。社会の歯車となつて歯車であることも知らずに死んでいく、きっとそんな生き方では收まらないだろう。袋に入れた針のように、どこに在ろうと抜きん出るに違いない。しかし自分はどうだ。そこそこの器用さで、どんな者にでもなれるのではないか。袋の中のじやが芋のように、ぬくぬくと。

卑下している訳ではない。才を羨むでもない。天分というものがいる。むしろああも鋭い針は袋の中には生きられない。歯車の方が随分と楽そうではないか。

室内で育てられた牡丹や芍薬の絢爛な花では無く、野に咲いた素朴な白摘草を摘んでただそれだけを造作なく土の花瓶に差そう。適当に女を娶り、秋は薄に月を眺めて、捏ねた団子を持った女が

『天』

ただその一語で、夢想は霞となる。あの母親を悲しませて心落ち着き暮らすことなどどうせできはしない。もしかすると微笑んで送

り出してくれるかもしないが、きっと何か蔭りのあるだろう。物心の付く頃から口癖は『田那様のように』だった。当主となつたその時にこそ、誇らしげに心からの笑顔を向けてくれるに違いない。

それにもしも自分が逃げ出せば、きっとあの人人が責められる。貴族でない卑しい者に育てられたからだと。あの父親のいる限り表立つてそんなことは言わせないだろうが、きっと自分でも責めるだろう。

やはり自分は当主となる。

腹を痛めて生み、どんな時も笑つて育ててくれたあの可憐な母に笑つていて欲しい。

空を見上げればいつの間にか茜色を瑠璃色が覆い始めて、そろそろ戻ろうと足を返す。元から禁じられているものを勝手に出てきているので門限も何もないが、どうせ日が暮れれば人も減り店も終いつまらない。肌寒くもある。

親父は夜に出たと言つが、一体夜の何が愉しいのだろう。

まあ、あんなに際立つては人に紛れることもできずにかえつて浮くだらう、と思い一人笑つた。

「坊ちゃん、坊ちゃん」

横を向くと、いつときかの店の者だった。

「ああ、やつと来なすつた。今日いらつしゃうなかつたら他に売つてしまおうかと思つてたんですぜ」

忘れていた、あの簪。

母親の来なくなつたことにはどこかほつとしていた。田の前にいるのに思つようにできないことに鬱憤として、その度に理由も分からずおうおうして傷ついた顔をして帰つていぐのに余計に鬱憤の溜まる始末だった。それでも来るなと言えば深く傷つくだろうし、自分もはつきりとそうして欲しいわけではなかつたから、自然と足

が途絶えたのは自然に収まつた結果だった。

今更簪をやつたりするのは不自然というものだ。未だに勝手に抜け出していることが知れて、もつ出ないで欲しいと頼まれればこの息抜きすら失つてしまふ。

「ほら、ここに。人が欲しいと言つても断つていたんですね」

なら見世に出さなければいいのではないかという気はしたが、買うといった手前今更取り消す訳にもいかない。

「少し待つて。戻つてくる」

この上着でも売ればどう低く見積もつてもあれを買つべういの金にはなるだらう、と店を後にする。

行く先は決まつていた。すっかりともうこの街のどこの場所にどの店があるかは把握している。

呉服屋がある。普通、黙つていっても呉服店の者が屋敷に注文を取りに来るものだが、ここは既に仕立てたものが売られていて値段も決まつっている。反物でなく布端でも買い取つてはいるようだ、ここで衣服を買い取つてはいるのを見たことがある。

上掛けを差し出して言つと、手に取つた店の者は口を開いてしきりに「ほおほお」と言ひ。人を待たせているので「幾らになる」と促した。

「正直なところこの感心は見せないのが商売ですが、これ程いい布は眼福です。しかし買い手の需要というのがありますのでこちらで相当には買い取ることができません。悪いことは言ひませんからこちらはお売りにならない方がよろしいでしよう

「しかし今入用だ。この店の相場でいいから買つてくれ」

「はあはあ、何かお困りのようですな。それではお預かりしますから、また買取にでも来られると良いでしょう」

まあ商売ですので何時までも置いておく保証はできませんが、と笑つて一度引っ込んでまた出て来た。黄金色の板が幾つか乗つている。

「これで」勘弁ください

それほど感心するあの衣服の値が元々どれほどかは分からぬが、昔は屋敷暮らしでないのであの簪の相場は分かる。

「これほどは余計だ」

そう言つて板を一つ取る。金に困つているのではないかと訳のわからない顔をした店の者を置いて出る。

ひゅるりとやはり肌寒かつた。

「お待ちください！」

店を出てあまり経たないところでその店の者が追いかけてきた。もう一人、店主らしき恰幅の良い者を連れている。その形相に面倒な予感はしたが、的中した。足元数間離れて路上で大の男二人揃つて土下座をする。

「申し訳ありません……」

どうにかの調子で口を開いた店主らしき男の顔は青ざめていた。「家の者がとんだご無礼を……どうかお許しくださいませ」

「大変な失礼を致しました……！」少し奇妙には思いましたが、まさかまさかこれほど高貴なお方がこのような店にお一人でいらっしゃるとは思いもよらず……！」

言い訳をするな、お前は黙つていろと恰幅の良い方が土についた顔を少し横にして唾を飛ばす。

「何を言つてるか知らないが、急ぎだ。もう行くからな」

すっかり日の暮れていて良かつた。何事かと止まっているのは人通りも薄くなつた少しの人で、この暗さでは顔に判別もつかないだろう。

「どうかお待ちを！」ちらを所持してては罪に問われてしまはず！」

「何を馬鹿な。布切れだろ！」

「お家の『家紋』が透かしてござります……！」

「何？」

そちらに歩き、風呂敷を取つて畳まれたそれを広げる。月に翳すと確かにひし形に百合の花が透かしてあつた。全く、阿呆は自分だ。
「鍼はあるか」

ははあ、と頭も回らない様子で差し出すのを取りじょぎょぎょぎと

その部分を切り取つた。

「悪いがこれで勘弁しろ」

それを置いて立ち去る。ははあ、ととにかく頭を擦り付けるのを後にした。

「すまない、遅くなつてしまつた」

そうして金の板を差し出すと店の者は大喜びに顔を破顔させた。

「有難うござえます、坊ちやま。さあさあ、こちらです」

そうして差し出すのを受け取ろうとする「ああ、」と何か情けない声がした。

見ると薄桃色の着物の娘がいる。

「ほうら、本当だらう。早く帰んな」

「そんな。だつてほら、前の言い値は持つてきたのに」

「嬢ちゃん、悪いが世の中金だ。これより高く買えるなら話は別だがな」

そう言つて金の板を振る。同じ商人でも随分と心根が違うものだなあ、と先ほどの店の者を思つたが、他人事だつた。なんだか今日は色々と面倒事の立ちそつだと早々に立ち去つとするが、しかしつ、と袖が引つ張られていた。

「それを譲つてください」なにやら必死な様子だつた。

「前に店で見かけたときからずっとそれを欲しくて、やつとお金をつくつて持つてきました」

「駄目だ駄目だ、それはもう売つたんだ」

店主は今度は自分を見、「返品は受け付けませんぜ」と言つ。拳句に「今日は店じまいだ。ガキどもは帰んな」と言つてきた。

「ああ一寸待つてよ」

そう言つて店を閉めようとする男に手を伸ばすと、ぐことそれは逆に掴まれる。

「ほお、これは嬢ちゃんよく見りや別嬪な顔立ちしてんじやねえか
明かりに照らされて露店にいる女を映したよつだ。」
「ちからは

卑しい顔をした男しか見えない。

「なによ離しなさいよ！」

言葉が早いか手が早いか娘は男の脛をがつんと蹴っていた。着物の捲れて女の脚が露になる。刹那のことだが武術の手ほどきを受けている田にははつきりと男と娘の動きが見えた。男は顔を顰め、これも何も考えていなさそうに女に手を挙げるのが見える。

しかし次の刹那男の体は飛んでいた。

「きやあ」女は驚き、突然飛んで今は伸びている男をあつけと見た。自分も「あ、」と言つて白田の男を見下ろす。

「参ったな」つい弾みで投げてしまった。

まあいいか、と今度こそ立ち去るとして、ちよつと氣が付く。「ほらよ、」女に向かつて包みを投げると、女はまつとしてそれを受け取る。

それで足は漸く家に向かつ。街はとつぱりと夜に漫つていた。

「あの、ありがとう！」

女の声がして、ちらりと流し眼に振り返る。

「私、小雪つて言つのー。あなたは？」

無視をしてそのまま足を進めた。

どうも騒がしき一日だったな、と思ひながら。

十九・舞踊

「踊り　俺が？」

珍しく家で西洋服を着ている親父に胡散臭い目を向ける。黒地で体に張り付いて、余計に細身に見えた。

舞踊はその家元の者を屋敷に招いて見たことがあるが未だ自分で習っていない。できればやりたくない　　というか幾ら教養と言つてもやる必要はあるのか。

「扇を持つて舞うあの舞踊じゃねえ。西洋のダンスと「うものだ」「何でそんなもの」

「西洋では社交に使われる。茶のようなものだと思えばいい。幾ら異国に閉鎖していても、管理上多少の付き合いというものがあるからな。当然霧崎家の当主たるもの、という訳だ」

「親父もできるってことか」「当然だ」にやりと笑う。「瑠璃もたしなみがある」「あの母さんが？」

「あいつは流石に様になるぞ。それも西洋の女の中についてもやはりあいつの美しさは一際輝く」

「親父の偏見が大分入っていると思つけどな」

「偏見？　愛だらう」男は笑う。

「百聞は一見に如かず、だ。見せてやるから一度で覚えろよ」

「瑠璃、入つて來い」と手を叩いた。

白のドレスの女が入つてくる。思わず目を細めた。

いつも結い上げてある銀色の髪はほどけて腰まで長い。白磁の肌に仄かに桜色に色づく頬、さくらんぼうのように水水しい唇、雨上がりの水溜りが空を映したような澄んだ瞳、それに白い絹の布一枚は体の線に沿つていて　　華奢だとは思っていたが、それだけではなく柔らかそうな女の線もくつきりと田の当たりにしてしまつてい

た。

何も言えず呆然としていた。

これが自分の母親か。こんなにも美しい女から俺は生まれたといふのか。

「偏見か？」

男が愉快そうに笑つて漸く意識がはつきりとする。

「なにか…いつもと違う」

「瑠璃はいつもはそう化粧をしないからな。それで十分に美しいが、これを見ると俺でさえ苛めるのに気が引ける。天女のようだろう？」

「旦那様……恥ずかしいです」女は際まで開いた胸元を隠すように手を交差させて覆う。

「喋れば瑠璃だけどな」男は笑つて言った。

「さあ、」と男は女の元に行き手を差し出した。女はちょっと手をその上に乗せる。

音楽が流れた。

西洋の曲は目まぐるしく大仰だが、それに合ひよつて成程速く大きくるくると踊る。男は女を見下ろして女は男を見上げていて、それなのにくつついたまま足を踏んだり乱れたりせずに一つになつてくるくると回つている。時々離れて女が男の腕をくぐつたり、男が女を抱き上げたり。しかしそれはカラクリの玩具のように一つで、それは息の吸う吐くでさえ一緒のようだつた。少なくとも、完全に互いしか見ていない。そこは板敷きの広間ではなく、一人しかいない音の世界だつた。

曲が終わる。

「瑠璃」

「千次様……」

見詰め合い、止まって初めて息の乱れた女の少し開いた唇に男の唇が重なつた。

大分長く重なつて、それから口が離れた。しかし体は離れないままに、女の背に回っている男の手が後ろの白縄を纏わせている留め金をかちりと外した。

「おー、

流石に声を上げて引き戻す。

男が視線をこちらにずらして、ち、と舌打ちをした。女は一拳に頬が赤くなつて、片手は前で布を押さえ、片手は後ろに伸ばして外れた留め金を戻そと躍起になつている。

「つぐづく邪魔な奴だ」

「いや、あんたが俺に見てると言つたんじゃねえか」

本当、横暴もいいところの物言いだ。母親とは正反対に、父親らしくしきよつといつ氣は全くないらしい。今に始まつたことではないが。

「まあ、こんなものだ。覚えたな？」

視線はこちらのまま、今だに女の苦戦している留め金を造作無く片手でかちと嵌めなおして言つ。

「覚えるか、初見で。あんたと一緒にするな」

「次の舞踏会ではお前も出るから、恥の無いよつこじておけよ」気にはせずに言つ。

「次、ていつだよ？」

「そうだな、招待や衣を仕立てる準備もある。余裕を見て　ひと月後の今日にしよう」

「あんたが決めんのかよ。俺は出ねえ」

「お前の嫁探しの一環だ。選りすぐりの貴族の子女も気に召さないよつだつたから、今度は西洋の令嬢というのも見せてやる」

「どうせまた母さんを見せびらかしたいだけだ」

「それは仕方の無いことだ」と無駄に物憂げな顔をする。

「瑠璃の前では全てが取るに足らないことになつちまつ　大事な世継ぎ事でさえも」

「そうだな、考えてみれば家の嫁探しに俺がいなくとも取るに足ら

ないこことだ」

「おいおい、女に声もかけられないお前の為に折角出会いを設けてやろうとしてるんだぜ。まあ出なくともいいが、少しは努めている風を見せないと痺れを切らしたお前のじいさんが勝手に伴侶を決められちゃうぜ？」

「お母さんも天が踊れるよつお手伝いをします、お相手がいないとしても難しいですから」

「それは駄目だ」親父が即刻却下する。「相手が必要なら自分で用意しろ。使用人は腐るほどいる」

「けれど踊れないのではないでしようか」

「教えてやればいいだろ」

「誰の練習だよ」

「どうも分かつていねえな、これは一人で一つ作り上げるものだ。それも主役は女だ。男は女の美しさを引き出す為にある。この点、西洋人とは気が合いそうだ」

なあ瑠璃?と言つ。

「はい、旦那様。舞踏会に招かれた旦那様はそれを思い出しにしながら瑠璃と練習をしました。身を預けるどるりは自然に体が動きます。そうして御披露目したのです。西洋の方々はとても感心なさいました」

綴じた書物がぱさりと放られるのを受け取る。

「踊り方を記して置いたものだ。元は瑠璃の為に作ったものだから、挿絵も付いて酷く丁寧だぜ」

用は済んだという用に「行くぞ、瑠璃」と言つて踵を返す。

やはりこれは少し窮屈だな。お前はどうだ?

動きやすいのですけれど、なにか恥ずかしい気持ちになります。着るのは早くに済みます。

帯が無いのはいいな、脱がせるのに時間がかかりねえ。

お手を入れられても着崩れずに済みます。

そうだな、西洋の服は概してそれらが容易によつてこる
んだろう。合理的な国だ。

聞いて呆れるそんな会話がだんだん小さくなつて、遂に聞こえなくなつた。ああも唯我独尊な親父に従順な母親が左右されと憐れにすら思つていたが、案外にあの母親だからこそ親父と付き合えるのかも知れない。

真逆のようで、どこか一点似た所で交わつてゐるようだつた。

「おい、出て来い」

そう言つと、とん、と男が一人天井から降りてきた。

「御用ですか、若」

結局、割と慣れてしまつた。思い出したように神経が痺れる時はあるが、普段は気配を消していく忘れる、とこうかつまりは慣れたの一言だ。案外に使えるし、仰々しくない態度は話し相手にもなる。

「どう思つ」

「天女というより御伽草子のかぐや姫ではないかと」

「そこじゃねえよ」

「どう思つで分かるほど若と意思疎通をした覚えはありません」
丁寧語を使えば丁寧だと思つてているのだろうか。どうも主従とまでは言いがたい。

「一度で覚えるものか?」

「若、それは赤ん坊が生まれた途端に立つようなものです」
「成程、親父なら有り得る。その上人差し指で天を指しそうだ」
「まあ頑張つて下さい。他の習い事もあるでしょうが、若は人より覚えがいい。特に芸に対しては」

「他人事も他人事だな」

「それはそうでしょう。まさか私に相手をしろと言つのではないでしょうね。それは勘弁してください。女子おなじとなら一考しますが」

「言つてねえよ」仏頂面に言つ。

「そう嫌な話でもないでしよう。屋敷の女子を選び好みしてあるよう体をくつつけ合つとはこさか羨ましい。あの薄着の衣装も毎度着て練習するのですか」

「どいつもこいつもどうしてそつ好色なんだ」眉間に皺が寄る。

「男子是自然のことです。普通若ほどの年頃ならば尚更女子の気に

なる筈ですが、どうも若はその気に疎い。旦那と見比べると容姿は似ているだけに一層不思議だ

「あじつと一緒にするな」ふん、とそっぽ向く。

「そう言えば若、」

「なんだ」

「饅頭を要りますか

「なんだ、珍しく気の利くな

そういうと若い男は風呂敷包みを差し出す。受け取ると漬物石のよつこ重くずしんと思わず腕が落ちる。

「お前、俺をからかうとはい度胸だ……」ぎり、と凄む。

漬物石と思えばなんてことはない、投げつけ返した。

ぱらぱらと、弾みに黄金の饅頭が毀れて床に音を立てた。いや饅頭ではなく金銀小判だつた。

「すみません、つい。『饅頭』と言われたら饅頭として受け取れどつこいう意味だ?』と若が呟いていたのを思い出して、解釈の助けになればと

「取つてつけた言い訳をするな。お前に試される言われはねえ」とさつと避けていた男を軽く睨む。

「それで、なんだこれは」

「『忘れていたが、小遣いだ』と旦那が

「あいつが?」

また何か企んでいるのだろうか。市街に出れば時たまにあればと思ふことがあつたが、あえては必要といつ訳でもない。その秤にかけて受け取るべきか否か逡巡する。

「若、若、金を持て余しているなら少し遊びに行きませんか」なにやら楽しそうに男が誘ってきた。現金な奴だ。

「お前……俺の見張り役じゃねえのか」

堂堂と正面から門を出て外に行く。自分だけだと禁じられている

のに、こいつがこると通れると黙つてしまひにしか。

「誰が見張りと言つたんですか」

門番の承認の通つた、百合の花押の押してある一筆をしまいながら若者が言つ。

「若はどいつも旦那を悪者にしたがる。疑心暗鬼とこいつものですよ」

「お前はある親父を知らないんだ」

「若の知らない旦那もまたあるでしょ？」

そう言ってから浮雲が茜の空を流れるのを見る。

「まあ男子は往々にして母親を慕い、その分父親を憎むものです。しかしそれが父母の役目でもありますから父親は損な役回りだ」

問答は面倒で、鼻でふんと鳴らすだけだ。横田で見ると男はふふ、と笑っている。笑うのは初めて見た。

「お前…名は？」

「影郎と呼んで下さい、若」

遷うつ雲から田を外して男は言つた。

色は茜から紺青に、しかし薄暗さは光りを立たせる。派手な色彩、呼び込みの男に女、酔つた男に目も暮れず高下駄の女がつんと通る、何か匂い立つ夜の街。

どこか祭りのように浮き立つたそんな絵空の街を映すつんと冷めた黒の瞳があつた。

「道理で夕刻から出ると思つたら、歓楽街か」

「おや、歓楽街を」存知で？若

「当然だ。よくお前もこんなところに俺を連れてこれるな。じいさんが聞いたら良ければ首であるいは刎ねられるぜ」

「旦那は良くやつたと笑いそうだ

からからと男は笑う。

「引き返しますか？」

「いい。付き合つてやる」

「そう来なくては。流石若旦那、よく分かつてらうしやる」

男はすっかり祭りに来た若衆のように嬉々として夜の街を先導した。その一三歩後ろを溜息交じりの若旦那が付いて行く。しかしどことなく、どことなく表情は和らいで、ふ、と笑う。そうして自分がより広い背中を行き交う人に紛れて見失わないようにとするのだった。

袖を引かれそうになるのをそこはそれとなく先導の従者が退けて、どんどん歩くに煌びやかな通りの終わり、何か料亭のような落ち着いた明かりの並ぶ通りに出た。建物同士も互いに主張するように辯き合つてはなくて、人の通りも格段に減る。歩く者の身なりも良くて酔いに乱れず、女や付き人を連れていったりもした。

「若、若、ここでいいでしょ」

嬉々として指すのは一際落ち着いた木造りの門。

「奥はこうなつていたのか。本当にこゝもそういう場所なのか」「こういつと/or/いう若の想像は知れませんが」男はにやりと笑う。「ちょっと雰囲気は違うかもしだせませんね」

「女と戯れるのだらう」

「それが機嫌を取るのはこちらなんですよ」

「はあ?」と形の良い眉を少しあげる。「金を払つてまで女の機嫌を取るとはどういふ訳だ」

「格式高いところじや女は袖を振るんですよ。それで好みの女に構つてもらいたければ気に入つてもらえなければならないという訳です。格別別嬪の女なんかは贔屓の客が一人一人と決まっていて大抵相手をしてくれない」

「遊郭とは女を買うところだらう。それでその女の身は持つのか」「それで持つほどの高嶺の花なのですよ。登樓代だけでなく、鏡簪櫛どころか着物に帯、調度品などまで芸妓に贈つては機嫌を取り、遂に首を縊に振つてもらつてそこで初めて床に入れるという案配です。中には男を知らない太夫まである」

「一体どれだけ面倒なんだ。よくもそんな暇な男がいるな」
うんざりとした様子に慌てて口添える。

「大げさに言いました。そんなのは見世にも一二の特別な女の場合で、そこは所詮商売、大抵は愛想良くしてくれますよ。奥間には布団の敷かれていて、よっぽどでなければ自然とそういう流れになります。ただ見下したりせず粋に振舞つてくださいなということです」

「それで今日は屋敷に戻らないつもりか」

「若、若、ご安心を。日の変わるまでには若を屋敷に戻します。それを見越して早くに出てきたんだ」「そうしてくれ」どの道思つたより面倒になつてきたのを憂いながら答える。

「若が夜食を食べ損ねないようにな」

睨み付けたのも通じず、ではいよいよ、と意氣込んで従者は入つ

ていった。やれやれ、と嘆息してから自分もそれに進む。

しかし。

「なんだい、そりゃないだろ」

「すみませんなあ。ウチは一見さんはお断りしどりますんや」

遅れて鴨居をくぐれば何か揉めているようだった。

「どうした」

「あ、若。紹介が無ければ入れないと言つたんですよ。全く商売にあ
るまじき高飛車だ。何か言つてやつてください」

「お前、来たことは無かつたのか」呆れたものだ。

「来ている訳がないでしよう。こんな格式高い遊郭は一般庶民には
縁の無い。しかし若がどிでもいいといつから一度くぐつてみたか
つたんです」

「どிでもこいの聞き間違いじゃねえのか」そつと長居は無用
と「ほら出るぞ」と促す。

渋々と引き下がつた男を後に従えて出かけたところ、見世の女は
ひそと隣に耳打ちされて顔を変えた。たた、と二人連れの後を追い
かける。

「お密はん、待つておくれやす」と呼び止められた。

「どிも失礼をしました。どிどーじちらに」

突然の態度の変化に「なんだ?」と従者を見るが「やあ」と首を
傾ける。

「まあこことこうなりこんでしよう。棚から牡丹餅といつもの
がまるでねえ

「お前はいい加減本当に護衛か? 警戒心といつものがあるでねえ
な」

「考えて分からぬ時は身を任せるのが結局古なもんです。肝要な
のは分かつたときにはどうするかですから」

やう片手を瞑つてから女に向かう。

「さうは貴人のお忍びだ。格別上等の部屋に案内してくれ」

「へ、いつ場の常とこりのことは知らないが、初めから従者と別れ別れに一人座敷に通されるようで、案内の女に連れられ廊下に行く。料亭のようだと思ったのは外観だけで、襖襖の薄暗さ、廊下に置かれる行灯の揺らめき、何か誘うよつた香の匂い、角を曲がり曲がり廊下の分かれて奥に奥に迷路の様、あたかもそれは男を惑わせ誘い込みついには食らう何かの巣窟にいるようだつた。

予想と裏腹に物音の一つもしない。女が酒継ぎ男にしなだれかかって媚を売る、なにか一種の宴会場の気分でいたが。しかし今更どうして男の引けようか。

饅頭は饅頭のように。

何故だかそれが隅から掘り起こされて、眉も動かさない冷薄な氷の内側で今念佛のように自分を定めていた。

女は何も言わない。無論何も聞かない。　影郎、影郎、影郎め。そうしてただ黙々と歩いて遂に女はつ、と止まつて膝をついた。上から女の顔を見ると、長く黒い睫と水に浸して膨れたような脣、口元には黒子の一つある。

案内ではなくこの女か。

と考えたとき、す、と襖が引かれた。そのまま動かないので中に足を踏み入れる。

「では…」じゆるりと

その障子は閉められた。

廊下よりも仄暗い部屋の奥、屏風の向こうからぼんやり明かりが漏れている。炎の明かりに誘われる夜蟲のようにそこに向かうしないようだった。

湿ったように感じられる板間を行く。畳みを踏む。きし、と静かな場に音の鳴り、音の鳴らない歩き方をしたくを思つが足を忍ばせ

るところのも可笑しいだろ？

やつと屏風のところまで来た。女は知つてゐるのだろ？か、足音のなる前から男の来る」とや、どんな男であるのだとか。どんな心持で足音を聞くのだろ？すると此処が籠の中のようにも思えて知らない場でもないように思ってきた。

その屏風の中側に行く。女がいた。女は前に手を付き品のある様子で深々と、しかしそれは家臣のように畏まるではなく何か柔らかくに頭を下げた。そして緩やかな動作で顔を上げる。赤い口紅の引かれていた。今度は黒子は田元にある。女は艶やかに口角を上げる。

「小雪でござります」

「？」

奇妙な違和感を感じてはたと女を見下ろしていた。

「お会いしとございました」

「……お前か」

髪にある梅の簪を見て、以前露店で騒いだ時の姿とようやく重なり違和感の収まった。確かにあの時薄暗く顔ははつきりとは見えなかつたが。

女の化粧と言うのは成程化ける粧^{よせ}いで正しきようだ。

とすんと腰を降ろした。

「いつかの節はお恥ずかしい」ところをお見せしました。あれより小雪は御仁に御礼できないかと外を出るたびに何時ときもお姿を求めてしまつてされど来る日も在らず、あれ以来溜息の多くなつてしましました。今宵の逢瀬はたれの導きでしうか。有難き事にござります」

知るか、と黙つている。しなを作つた媚口調、商売口上をそのまま信じる阿呆ではない。

「御名前はなんと呼んで宜しきでしょ？か」

「好きに呼べ」

「では、天様」

ぴく、と眉の動いてほんのつと変わらず作り笑う口元を見た。

「『帳簿の御名前で宜しければ』

ち、と思う。　あいつ、本名を書きやがったのか。別段隠れようという気もないが、何がお忍びだ。

「天様、今宵は献じて御礼差し上げたく『ぞ』こます」

女の動く。すすとにじり寄ってきた。そして肩に触れる。女の匂いがした。

「触るんじゃねえ」

思わず女の肩を押し返した。

「悪いが今日は連れの付き合いだ。ここで待たせてもらうが余計な事はしなくていい」

「まあ」くす、と女は口元に袖を置いた。

「天様は女子の扱いに不慣れですか」

「男の脛を蹴る女を女とは見ねえ」

む、と言えば女は白い頬をほんのり染めた。

「あれは…お忘れくださいませ」

「その猫被りを止める。氣色が悪い」

「……」女は黙つた。こちらもふん、と黙つている。

「喉が渴いた。何か取つて来い」

女は黙つたまま立つた。徳利に陶器の器を持つてくる。それに酌して差し出したのを無言で受け取りくじと口付ける。水だった。

女を見る。

「お酒にも不慣れかと思い」

悪びれなくむしろ挑発的な女の視線に口元の片側が引き攣りかける。

俺に喧嘩を売る気か、この女。

「眞い水だな」口元が僅かに上がつてもう一度味わうように口付ける。

る。「お前が酌をしてくれたからか」

「私の郷里、奥州山陵の雪解け水にござります」

「成程、お前は陸奥出身か。道理で肌が雪のようだ」

「そうして女の頬に触ると女の頬には赤味が刺す。

「何を突然口説き始めるのですか」

「少し面白くなってきた」くす、と笑い、頬を持ったまま口元を女に近づけ言つ。

「その猫の皮を剥がしたい」

「そうして女の前で結ばれる帯を引く。

ぱん。

小気味良く響いたが、それは女の張り手を男が捉えた音だった。

「ほら、意氣の良い女だ」手首を捉えたままにやりと笑う。

「……！」女はき、と睨む。

「小雪と言つたか。覚えておこつ

娘になつた女の顔を見て面白げに男は笑つた。

月が布団に格子の影を作つてゐる。

腕の中、女の体を抱いて男はくすと笑つた。

「旦那様？」

「なあ瑠璃、天の奴、最近は遊郭に通い始めたそうだぞ。血は争えねえなあ

「旦那様と同じならばるりは悪い」と思いませんが…天はもう大人なのですね」

「そうだな、男は女を知つて男になる」
くすりと笑つて男が女の内腿をさわさわと撫でる。女はびくつと体を震わせた。

「お前は本当、いつになつても可愛いな」

「瑠璃、月に姿を映せ」そう言つと女はもぞと布団から抜けて、そ

こに立つた。

一糸も纏わない体を恥ずかしそうに手で隠して、内腿をすり合わせておじ、と男の前に姿をさらす。月の光が肌を白銀に輝かせていた。銀糸の髪もそれ自体が仄かに発光しているようだった。

「ああ、」男は感嘆の溜息を漏らす。

「女の肌は雪色に限る」

「天様」・天様」

ぼんやりと瞳を開けると、娘の顔が上から覗いている。

「なんだ、もう時間か」

目端を擦つて女の膝から頭を上げた。それから立つてくあ、と伸びをする。

「よく寝た」

「よく寝ていました」

何か憤慨したように言つ。

「天様ぐらいです、遊郭で女を買つて膝枕で全部時間を使つてしまふなんて」

「ああ、また頼む。女の膝は何故だか体の錘が取れる」

男は上掛け羽織つて、女は身支度を手伝おうとするが足が痺れていて立ち上がれない。

「お前は辛抱がねえな」男は笑つた。

「普通、こうなります」むくれたようにふいと言つ。

「へえ、そうなのか」

あの人はやはり慣れていたのかな。親父もあの膝に落ち着いたんだろうか。

「何をお考えですか

「女らしい女のことだ」

「どうせ雪は女らしくありません

「分かつていたのか」からかうように男は笑つてゐる。

「天様とは出会いの場が悪かつたんですね。あの時でなければ雪を女と思つて見たはずです」

「まあどちらにせよ俺はそれほど女に?き立てられなによつだ」

「天様はきっと大きなお屋敷で洗練された美しい方々に囲まれて育つたからでしょう。きっと雪のような田舎生まれの娘は芋のように思っているんです」

「芋か、成程」男は得心する。

「ああ非道い。天様は本当に女子の扱いがなつていない」

「色を付けられ形を付けられたよく分からぬ細工料理より、芋の煮転がしたものが俺は好きだ」

「……それは褒めているのかけなししているのか、よく分かりません」

娘はふいと斜めを向いたまま、しかし白肌は頬の赤みが良くなってしまつ。男はふ、と笑つた。

「雪、一日外に買つことはできないのか」

「できません。これでも私は結構の人気なんです、天様以外から見れば器量良しらしいので」

「そうか、それじゃ仕方ねえな。まあ一人で羽を伸ばすのも悪くない」

忘れてくれ、と身なりを整えた男は襖を開ける、それに女は立ち膝になつた。

「遊女として買つのはできませんが、娘としてなら外に出られます」

「回りくどいな。そういう建前みたいなのは外では考えたくねえ」

男は面倒そうに肩を下げてから娘を見遣る。

「来るのか来ないのか」

「行きます」

女は急いで返事をした。遊女として駆け引きも通じない。何か貴族らしからぬ素朴さを感じた。

男は良しと言つて出て行つた。

*

「お前は付いて来るな」
「そう言われましても、若

旅支度をした若旦那に困った顔をする。

「ほら、饅頭をやるからどうぞとも遊びにいけ

差し出された饅頭程の包みに閉口する。

「買収とは大分世の勉強も身に付いてきましたね、若。しかし見損なつてもらつては困ります。勤めだけでなく多少親身に身を案じているんです、多少」

「そうだな、俺も余りお前に苛々しなくなつた。余り」

「何かつつかかる物言いの身に付いたのは私の所為でないといいのですが」

「自覚が合つて結構だ」

「第一、私がいなければ若は外に出られないでしょう。御家族誰かの一筆が無ければ」

「ふ、と笑つて一枚紙を見せる。

「全く」従者は首を振る。「確かに奥様も歴とし御本家様ですが……正式と言つとどうでしよう」

「なんだ、俺の母に何か文句を付ける気か」

「いや、私ではなくて。女の例も聞きませんし。しかし旦那の

許しを取つたんですかね」

「だから余計な手を回されない内に出来るんだろ。お前と問答している暇はない」

「やはりお一人では出しません」

「一人じゃねえ」

「誰です」

「お前に言つ必要はない」

「ははあ、女ですか。全く、若も色氣立ちました。遊女通いにもすつかり浸かつてなんだか責任を感じます、幾ばく

「お前の感傷はどうでもいい、行つてくる」

「行つてらつしゃいませ」呆氣なく手を振る従者に拍子抜けする。

「なんだ、いいのか」

「女と乳の繰りあいを覗くほどやほではありませんよ」

「阿呆か」呆れ顔で、しかしさつと出て行く。「単なる膝の都合だ」

「膝?」

はて、と首を傾げた時にはもう若田那はいなくなっていた。

「何か嬉しそうだな? 瑞璃」

るんるんと足取り浮いて歩いていたのを捕まえて聞く。

「はい。天の方からわざわざのりのところに会いに来てくれたのです」

「なんの下心あつてだ」

「下心ではないのですけれど。天は肩が凝るので温泉に行くそうです。それでるりに字を書いて欲しいと言うので天の言つようにな書きました。何かるりは天の役に立つたようです」

「お前は本当、危なつかしいな。やはり俺が傍にいないと駄目だ」

「天は危なくありません。それに、天につき飴玉を頂きました」

握った手を開いて見せて、ころんと飴玉の幾つかが乗っている。

「お前はどれだけ可愛いんだ」やれやれと男は嘆息した。

「それにして、温泉か」

男は頬に手をやり微かに笑う。

「俺達も行くか、瑞璃」

「はい、旦那様! 急いで支度をします。天に追いつくといいのだけれど」

「何でわざわざ邪魔を追うんだよ」

はしゃいでわたと急いだ女の頭を押さえた頭上で男はくすりと笑つた。

「旅行は好きな女と二人と決まつてている」

一十四・湯山

「え、鯉畔山に湯浴みに」

「そうだ」

男は呆れて女を見る。金糸の入った幾重の色重ね、白足袋に高下駄、膨らませた髪の結いに髪飾り、どう見ても山道を歩ける格好ではない。

「なんだ、その格好は。着替えなおして来い」

「そんな、折角時間をかけたのに」

「時間のかかるようなら置いていくぞ」

「もう…！すぐに支度します！」女はかんかんと大股で戻っていく。

「何を気立てているんだ、あいつは『氣性の荒い女だ、と思って

男は見送った。

「これならいいでしょー！」

女は何か自棄な口調で男の前に立つた。旅路の町娘の装いだった。
「良し。行くか」

山道を歩いて男と娘は行く。

「天様、どうでしたか」

「何がだ？」

「さつきの格好……雪も女に見えましたか」

「化粧が濃かつたな、いつもに増して」

「ああ、そうですか！」

女はさつさと男の前を行く。

「待て」男は女の手を掴んだ。

「な、なんですか……？」さつとすぐに首の赤くなる。

「俺の視界に入るなら大股で歩くな。無駄な格好よりも立居を女にしきる」

「無駄とはなんですか、無駄とは……雪は今日の為に……」女は珍しくぐ、と目元の潤む。

「悪かった、泣くのは已めてくれ。ほら、これをやる」

慌てた様子の男に娘は機嫌を良くする。こんな無神経な男も女の涙には弱いらしい。しかし男の差し出した手のものに、折角の機嫌にも水が差した。

「天様……私を馬鹿にしていますか」

普通薬を入れる印籠から転がり出た、手には琥珀色の飴玉が転がっている。

ぐずる子供をあやすのと同じ気分か知らん。

「俺は好きだけどな、この飴は」

女が取らないようなので男は何氣無い様子でそれを自分の口に放り込む。

「幼い頃擦り剥ぐと何故か口に入れられたものだ。薬と信じているらしい」

くすと微笑するのを見る。時々穏やかな誰かの影が見えるのは、恐らく乳母だろうか。

「天様の幼い頃?」女は思わず笑つて茶化す。「そんな頃もあつたのですか」

「懐かしいな」目を瞑ると自然と目元の笑む。

本当に俺に付き纏つっていた。不思議な程年を取らずいつまでも変わらない姿で、と思つていたが、確かに記憶はもつと娘のようにはあどけない。

「 そういうえば」目を開けて女を見る。

「なんですか」まじまじと見られてやはり白い頬の染まる。

「いや、なんでもねえ。気の所為だった」ふいと視線は逸らされた。

「お前の幼い頃はどうだ?」

「私は……あそこままです。ずっと遊女」

「へえ」男は特に何の感傷も持たなかつた。

「でも、本当に幸運だったんです、私は。田舎を出ても……花魁に

なれるのは一握りと聞きますから

「他はどうするんだ」

「売られる先先で決まります。茶屋や湯屋はもつと扱いが良くなっています」

「茶に湯？」

「まあ天様には縁の無いことです」

「湯に行くのにそう言つたか。なんなら今度茶も点ててやるだ」

「それは楽しみです」女は笑つた。

無邪気に見えて何か哀しいものが過ぎつた氣もしたが、故も無いので氣のせいだろうと男は思った。

ちやふんと熱い湯に浸かる。

いい湯だ。

露天の風呂から臨むのは茜差し込む広大な海だった。さあさあさあんと耳を澄ませば聞こえて心地よい。

「じじ」し強くこすつた背がひりひりと熱湯に染みるのがまた趣のある。

『天、お母さんがお背中流しますよー』

そう言つのを幾度追い払つたとか、とふと笑つた。

どうも俺は、母親に気のゆきがちだな。

影郎に茶化されるが普通そうでないものか。しかしくるくるとあの母親は本当に可笑しい。親父は美しい美しいと惜しげなく言つが、あれは滑稽といつまづが勝るだろう。全く見ていて飽きない。

ただ。

『旦那様…旦那様…ん……』

一人住んだ家に居る頃、一度見た母親のあの痴態。あれだけは見まわしい。

普段、忘れている。しかしこの厭わしい記憶は時たまに眠れぬ夜に蘇る。いや蘇つて眠れぬのか。「ひるひる」と寝返りを打ちながら打ち払う。この時ぐらいだ、心得覚書の役に立つのは、一見意味のよく分からぬいか、あるいは当然過ぎる文の解釈に頭を悩ませるに専念する。

ああいう女の表情を、親父にだけ見せるんだろうな。それを笑うあの父親の口元が見えるよつだ。

母親の弄ばれるのを思うとむらむらと怒りが湧く。体の芯から熱が出る。

「あん、と打ち寄せ石に大きく碎かれた波の音に、は、と意識を取り戻した。

全く。折角あの家を離れているというのに。

嫌いという感情は持っていない。ただ、面倒だ。当主とかそいつたことよりもより煩わしいのは、親父と母親だった。あの二人の寄るのを見ているとうんざりする。親父が厭わしい。なんだって母さんはあんな奴を

どうもいけないな。頭がのぼせているせいだ。

ざばんと湯から上がった。

湯上がりの男はうつ伏せになつて、女が背を揉んでいた。
「やはり連れて来て良かった」男は気持ちよさげに言つ。

「どうも。こんなお役に立てれば」

理由が便利程度でやはり何か気に食わないが、それでも確かに男の顔の和らいでいるのを見て心の温かく緩むのを感じる。

こういう気持ちは初めて。いつも男との駆け引きのあるが、この男には通用しない分いつそそんなものは必要なく、口調も客相手なのに自然になつてしまふ。

でも、今は客じやない。そうほつこり思つのが可笑しかつた。
これが客ならその分取り分の入るのに。

「お前なら傍に置いていい」

「え、」ふと手の止まる。どういう意味か。

「俺の傍仕えで屋敷に来るか」

ああ。と思った。しかし何を氣の落ちているんだろう。何を期待したんだろう。所詮は遊女のくせに。例え身分の高い男を虜にできる太夫でも、せいぜいが身代を買われ妾として囮われるのを幸せと呼ぶにしか過ぎないのだ。

「どうした、手の力の弱まつたぞ」

「行きません。言つたでしよう、私は人気なんです。ちやほやされて不自由なく暮らすのを捨ててどうして一日中あくせく働き顎で使われるところに行くんです」

「どうか、それもそうだ」

いつもあつたりと引いてしまつ。もつと強くて引っ張られた
ら、そしたら分からぬのに。

「小雪は化粧の無いほうが綺麗だな」

「え」あ、と顔を押さえる。そつだ、風呂上りに化粧台に向かって
いない 素顔を見られたこととか、と一気に血が顔に上つて隠

れたくなつた。しかも今の言葉はなに。

「嫌味ですか」

「信じられないほど屈折した女だな」

「だつて天様がそんなことを言つるのは初めてではないですか」「そうだつたか?しかしお前が白粉しらこを取つたのも初めてだろ?」「でも、だつていつも憎まれ口しか言わない。女でないとか

「俺は本當しか言つていない。俺の周りにいる女に見えないのも綺麗だと言つうのもそのままだ」

「天様はなにか…気の付かない内に女を泣かせそうです」

「そうか」

適当に答え、背を揉む手の終わつたのに男は身を起しらずに「雪、膝」と言つた。そして正座した女の膝に頭を置く。

「雪、雪、ゆきやいんこん……」

「なんですか」

「歌は歌えるか」

「まあ芸妓ですから一様には」

「そういう歌ではない。子に歌つて聞かせるよつな子守歌だ」

「天様…」女は瞳を丸くした。

「笑うか」

「いいえ。ただ、何か…」

愛しくなつた、とは言つだけ虚しい。

「余り覚えていません」

「俺が教えてやるから覚える」

そうして男が歌つた。男の声でそれを聞くのは不思議で、でも温かくて、初めて聞くよつなのごどこか懐かしかつた。

「どうした」

ぽた、と男の頬に零の落ちて女は慌ててそれを浴衣袖で拭つた。

「天様はとても愛されて育つたのですね……」

「そうだな、一人のみには」

男は下から見上げた女の顔に手を伸ばして涙を掬い取つた。それ

から女の口に飴を押し込む。

「盲いだろう」

「はい……」女は涙を拭いて笑った。

「天と呼んでみろ

「え」

「様をつけずに」

「……天？」

「意外としつくじと来るな。今からはそう呼べ

「でも、」

「郭の中では何も関係ないだろう。今も何も関係ねえ。俺とお前の
関係は無い関係だから自由なんだ」

「自由」ふふ、と女は笑つた。この人といふと自然の笑いができる。
むしろ作り笑いが思い出せない。

「天……」整つた顔に黒の瞳を見る。

ずっと前から、出会う前から 待っていた。

「雪」

男の手がまた伸びて、女の頬に触れる。その手の行くままで。
男と女の唇が合つた。

柔らかいな。

固いな。

ゆつくりしてから男と女の唇が離れる。

「雪」

「天」

ぐい、と首が後ろから男の腕に引き寄せられて、女は体を崩した。
逆に男は半身の起き上がって、それで女の唇を奪つた。この口角も
違う、ともつと深く唇を合わせられる。だけどもつと、もつと奪い
取りたい。

女を抑えて貪つて、男を止めるような女の中途半端な手もいつし
か男の衣を握つて離さなかつた。

雪の深深降り初めて、唇から温もりを奪い合つた。

「 につき餌の味のした」

「 そういうことを言わなくていいです」

「 目いな、あの餌は」

「 ……もう」 女は顔を真赤にする。唇の離したそこは一つ布団の上
だった。

「 とこりでお前はどこに寝るんだ?俺の布団しか引かれていないが」

「 ……もう!」

疎いのかそれでいて突然で、だがやはり疎いのには嫌になる。と思いつつそれが温かつた。

「 仕方ないな、俺の布団に入れてやる。だが寝相が悪ければ出すからな」

本当に、相変わらずだ。さっきのは初めてなのかどうなのか。疎いし鈍いし女の扱いに不慣れのようでいて、それでいて事も無げに突然口を吸つて何も様子の変わらない。布団を一つ忘れるなど、有る筈のない宿の手落ちに憂げに嘆息するのにこちらが嘆息してしまう。

「 それは」 つちの台詞です、覆い被さつてきでもしたたらぶちますからね」

「 やつてみろ」

ふん、としかし微妙に笑つてじろんと向こうに向いた。
この人といふと、遊女だとこうことを忘れる。

ふは、と女は湯面から顔を上げた。

「 旦那様……るりはとても熱くて……やはり難しいようです」

「 そつか?俺は極楽だけどな」

「 もう少し……頑張ります」

「そうか」男はくす、と笑つて女の頭を沈めた。ふくぶくと泡の立つ。湯面に月が写り、銀の髪がばらけて浮いている。はらりとじだからか枯れ葉の浮かぶ。

「極楽だな」男は酒を口に付けて言つた。片手は湯の中の女の頭を慈しむように撫でている。

「逆上せたなあ、瑠璃」

月明かりにはたぱたと、帯を緩めて布団に寝かせた女を団扇で扇いでいた。

「めんなさい、旦那様……お手を煩わせて……るりは放つて置いてください、大丈夫ですので……」

「悪いな、調子に乗りすぎた」

コップの水を傾けるがつまく飲めず小さな口からしたり落ちる。男はコップの水を自分で含んだ。そして女に口移す。んくんくと女の喉が鳴つた。

「俺でなかつたら幸せだつただろうとも、俺でなければ幸せにできないだらうともどひからも思つ」

女の口元水滴を指で拭つて男は言つた。

「るりはとても……幸せです、千次様に出会えて……」

「いつもいつも謝りたくなるが、抱くので気持ちを代えてしまつ」「とても……幸せです……」

女はうわ言のように咳いて口は微笑み、男は早く戻れと扇ぐのだった。髷げなのを扇いで飛んでいつてしまわないように女の細い手を握つて押さえながら。

「天、次は…いつ来るの?」

背の後ろで自分の手同士絡めて言つ。

「さあ。寝たくなつたらまた来る」男はあつさりと答えた。

「じゃあ痺れないように練習して置くね」

「別に俺はどちらにせよ変わらねえからいいけどな」

「本当、勝手なんだから」ふい、と言つ。男は笑つた。

「じゃあな」

「うん、じゃあ、また」

男の進んでから背に言つ。

「あの、ありがとう! 楽しかった」

「良かつたな」

ふ、と笑つて男は去つて行つた。

また、来てくれるかな。

待つことしかできない身。約束も何の保証もないけれどそれでも
せめて指きりをしてくれたら。

また、来なくなるのかな。

待てども来ない待ち人や、心どこかに君を待ちにけり。

「金が欲しいな」

「おやおや若。浜の真砂と人の欲は尽きないものですね、以前は無
頓着だったと言うのに大人になるとは欲に塗れることか、哀しきか
な」

「つるせえな。欲しいものがあるだけだ」

「まさか遊女の身請け代が欲しいなどとは言わないで下さいよ、そ
の年で。まだ子供でも通る程なんですから」

「幾ばく要る」

「まさか……本当にですか」

「本当にやねえよ」背にござし、ともたれる。「言つてみただけだ」

「ぽんやりと空を眺めている。

「雪は降らねえかな……」

「奥州でそんな気楽な台詞は吐けませんね、喜ぶのはせいぜい子供くらいです」

「悪かつたな、餓鬼で。　お前、奥州に行つたことがあるのか」「行つた事はないですね。若、平民より下に奥州者、て知つてますか」

「今は平民の下に身分は無えだろ?」「うう」

「極貧の国ですから、道奥から生活の立ち行かなくなつた者、親に身を売られた者がこの都に出てくるんですよ。前々からあつたんですが、奴隸を解放したことで一つ上のところに皺寄せが来たんですね、一気に人身売買の進んで安い労働力が流れ込んできました」

「奴隸が奴隸でなくなつても身分が上がつた訳じゃねえだろ?。元奴隸はどうしているんだ」

「それが色々と手厚く保護されているんですよ。虐待を厳しく罰したり、最低賃金を定めるとか最低限の生活保証とか。どうも西洋にある律令を参考にしているみたいですね、今までに無い律文です。解放の先頭に立つた者を頭に組織がつくられて監視機関になつています」

「そんな力を持っているのか、律を作れるほど。あの傲慢の権現のような親父が許すのか?貴族でなければ人間でないと言い出しかねない奴だぜ」

「若、若。幾ら若の生まれる前とは言え、これは完全に身内」とですよ。表立つて中心になつたのは公にはなつていませんがこの家の宗主の弟、旦那の叔父です。それに、そもそも解放の発端は……

「そこでんむ、と何やら口を噤む。

「まあまあそんな訳で、元奴隸への蔑視は残つても社会的保護で言えばしつかりがつちりされているんです。それにその戦禍で奴隸は

半分以下にまで減りましたからね……奴隸はほぼ都心部が所有していたので、つまり奴隸的労働力の代替に都心部に流れているのが奥州者と言うわけです

「お前は詳しいな。その解放戦乱や現状やら、奴隸については全く教えられねえんだがどこで知れるんだ?」

「何か都合の悪い歴史は闇に放り込まれるものです。私は若より若い頃から各地転々流浪しているので。知りたいのでしたら関係した者に直接聞けばいいんじゃないんですか」

「その叔父か?」

「近いところでお父上 旦那、とかね」

「それは止め。極力あいつとは関わりたくないねえ」

「じゃあ私が何か機を見て取り持ちましょう。あの面倒を見る傍ら」

「おい、何を教育係りみたいな顔をしているんだ? 時事を少し詳しくつたからと言って団に乗るな。お前は単なる付き人だろ」

一向気にせず逆にやれやれと手をあげる。

「若だつて結構傲慢だと思いますけどね」

「天、天のお洋服が出来ました」嬉しそうに西洋服を持ってきて母親が言つ。

「合わせて見て下さい」

「……そういうや」げ、と何か思い出して顔の引き攣る。

「天？……だんすは大丈夫ですか？」心配気に聞く。忘れてた。完全に。

「今週の末だぜ？」父親迄が来ていた。

「何であんたまでいんだよ」

「瑠璃がいるからだ」

はあ、と溜息を吐いた。まあ、いいや。どの道くだらねえ。

「言い忘れたが」男はくすりと笑う。

「名田は瑠璃の誕生を祝つ宴だ。すっぽかしたりして『母さん』を悲しませるなよ？」

「旦那様！それはいいのです。それは……勿論、天に祝つていただきたらとても嬉しいのですけれど、母親が自分を遠慮がちにちらりと伺い見る。

この野郎。

心の底から愉しそうに意地の悪い笑みを浮かべていた。

「愉しみにしてるぜ？」

笑うと母の肩を促して歩き去つて行つた。

「雪、付き合え」

「え、娘を頬をぼ、と染めた。「何、急に…」

「会が開かれるんだ、そこで俺は踊りを踊らなきゃならねえ。その練習に付き合つて欲しい

「なんだ……そうよね」女は何かがつくりと肩を下げる。 全く。
天なんだから。

「駄目か」

「べ、別にいいけど」

「そうか、じゃあ早速やろう」

男は女を立たせた。 そうして女の腰を寄せてぴたりと付いた。

「ちちよつと、天、こんな、なに」女は顔を赤くして焦つたよつて
身を捩つた。

「ふしだらな」とを考えるな

「誰がふしだらよ、天の所為でしょ」

「問答している暇はねえ」

女の手を取ると、思い出して足をすっと動かす。 しかし。
「きや、」女の足はもつれた。

何度もやるが、回転の一ひとつできない。

「ち、」と舌打つ。「本気でまずいな、割と舐めていた。 女に
会わせるのが難しい」

「何、これ……」女は息の乱れている。

「西洋の踊りだ。とにかくやるしかねえ」男は息つく女を立たせる。
「ちょっと休憩しましょう」

「お前、体力がねえな。どうせ寝てばかりいるんだろ」

「何よ！ 付き合つてあげているのにその言い振りは」

「文句を言つな、買つていてる時間は俺の物だろ」
ぱん、と頬を打つ箒の手は男に捕らえられる。

「まだ元氣があるな」

き、と睨み付けた。

「何よ、その言い方……そつだけど、そつよ、どうせ私はただの買わ
れた遊女よ」

「何か面倒な感傷をするな」

「面倒つて何よ、一人だとできるなら一人で踊つていればいいでし
ょ」

「それなら苦労はしない。これは男女で踊るものなんだよ、しかも誘われたら受けなきゃならねえ」

「……誘われたら?」

「俺の許婚を決める会だ」

男は投げやりに言つた。女の手がくたりと落ちる。

「……帰つて」

「は?」

「帰つてよ」女はぐい、と男の背を押し出す。

「雪、」押し出されながら男は首を振り返るが渾身に押す女の頭しか見えない。

「お金なんかいらない……お金なんか、足りてるのよー。」

ぐいぐいと襖まで押しやつた。

「天なんか大嫌い！もう一度と来ないでー！」

女は大きく手を振り上げる。

ぱあん

乾いた音が空気を引き裂いた。

「俺も、泣く女は嫌いだ」

頬の赤くなつた男は淡白な口調でそつ言つて、とん、と襖を開けてそのまま出て行つた。

「大嫌い……天の馬鹿……」

ぼろぼろと涙が染みこんだ畳の上に女の足は崩れ落ちる。頭に差してあつた梅の簪を投げつけると金箔を貼つた襖の紙が破れて穴の空く。

「私の馬鹿……」

「笑うな」

仏頂面にくつきりと赤い手の形、従者はくつくと必死に笑いを噛み殺す。

「どうしたんですか、若。振られましたか。無理矢理はいけませんよ。まあ失恋も大人への踏み台です」

従者のいない事にしたのか無視をして無表情にそらせりと書を書き始めるが、ふつぶつと墨が飛び散っている。

「いやあ、それにしても若のよつたな色男でも振られるとは、やはり男は顔じやありませんねえ」

ぎろりと睨んで立つ。従者の横をす、と通り過ぎた。

「分かりますよ、一人にするくらいの気は使います」

なら従者のお前が出て行つたらどうだ。と口もききたくなく自分の部屋である筈のそこを出て行つた。

『大嫌い』

ち、と言つのに合わせたよつに椿の花がぽとりと落ちる。

「天?」

足音に気がつかなかつた。顔を上げると雪解け水のように清らかな白肌に水色の瞳の母親がいる。

自分の顔を見て途端にびっくりしたよつに頬をぺたりと触つた。ひりひり熱の持つ肌にひんやりと心地よい。

「どうしたのですか、誰かにぶたれたのですか、天?」

自分が痛そうに眉尻を下げる摩つている。

「これはとてもいけません。お母さんが天の代わりに言つて来ます、

誰に打たれたのですか、天？」

本当、滑稽だ。苛々の気持ちの急に冷えて漏れそうになる笑みを堪える。

「親父って言つたら、『どつするんだ。』

「旦那様が？」吃驚したように目を丸くさせる。そして瞳の落ち着かずうろうろして下を向いたが、しかし決心したように顔を上げた。「ぶつのはいけないことです。るりは旦那様に言つて来ます。お母さんがいるので天は安心していくください」

そう言つて恐らく安心させるように微笑んで、傍に付いていた膝を上げて立つ。

「悪い、親父じゃない」離れて行つた手を押さえて言つた。

「え、」明かにほつとしてから、「嘘はいけませんよ、天」と叱る顔を作つて言つた。

「嘘じやねえ。からかっただけだ」

「あ、そうでしたか」そう頷いてから慌てて首を振る。「からかうのもいけませんよ、天。お母さんは本当に心配したのです」

本当、からかい甲斐があるよなあ。

「さ、天。お手当てをしますよ」

親父に向かつことの無くなつた安心のあまり誰にぶたれたか追求するのをもう忘れたようだ。苦笑して、手の引かれるのに特に抵抗をせずに母親と廊下を歩いた。

「できましたよ

肩頬一面に大きな湿布を貼つてひと安心とでもいうよに顔の和らいだ。

こんなの、鍛錬で打ち身なんかしそつちゅうしているのにな。

「天は動かすにいい子にしていました」

微笑んで、ニッキ飴を差し出した。

「ご褒美です」

「褒美だったのか」くつくつと笑う。「擦り剥ぐ度にやるから薬だと

思つてゐるのかと思つたぜ」

「天は怪我をしても泣かなくて偉かつたので、飴をあげたのです。

天はとても喜びました」

「あなたの記憶は度々改ざんが入つてゐる。どうして勝手に俺が飴で喜んだりクッキーを好きになつたりするんだ」

「るりが初めてお菓子を作つたとき、クッキーは焦げてしまつたのに天はうまいと言つて全部食べるので、とても好きなのだと思いました」

「焦げたからじゃねえのか」

「天は焦げたクッキーが好きなのですか」

「ああ、もういい。違うから焦げたものをわざわざ作るなよ?」

「はい、天」

微笑む母親のまだ手に乗る飴を見る。

「母さん、その飴食わせて」

「いいですよ。天は時々お母さんに甘えます」

嬉しそうに口元に持つてきた来てあーんと言つた飴をぱくりと口に入れた。指」と。ひんやりしていて娘のようにしつとりして細い。すぐに指は口から抜かれて出て行つた。

「天はお母さんの指まで食べてしましました」

わざとしたのも分からずくすくすと笑つてゐる。

「母さんの指は甘い」

舌を出して指先を舐めるとくすぐつたそうに笑う。

「天、指は甘くはないものですよ。天が甘えん坊なのです」

「母さんだつて自分の指を舐めるのが好きなんだろう?」

「え、」ぽけんと見る。

「何でもねえ」

「ではお母さんはもう行きますね。天、困つたことのあつたらいつ

でも言つて下さい。お母さんは天の味方です」

「じゃあさ」腕を掴む。「ダンス、教えてくれよ」

「それは…以前にお父様が、お母さんは手伝つてはいけないと、」

困り顔になる。

「なんだ、言つても無駄か」腕を放してそっぽを向いた。あ、とためらひ声のあがる。

「お父さんには内緒ですよ」

そう言つてきたのにやりと笑つた。

腰と背を支えてくるりと回る。くるくるくねりと大きく小さく一緒になつて。軽快なリズムに乗つてぽんぽん音そのものになつたようだ。人と息の合つのがこうも小気味よいとは。

ひと休憩して、ふう、と女が玉汗を拭つた。きらきら輝いて、こつちに気がついてにつこつした。

「天はとても早く覚えますね。 本当はお母さんは中々できなくて、旦那様をとても煩わせてしまつたのです。旦那様は全部一回でおきになるのにはできなくて、尖つた履物でたくさん足を踏んでしました……」

ショボンと顔を落とす。

「けれど旦那様はるりの頭を撫でて氣にするなと言つて、できるようになるまで同じことを何度もとても丁寧に教えてくれたのです」「ふーん……」

本当、態度が違うよなあ。これが使用人や家臣、あるいは他の貴族でも、他の人間だったらあの冷めた黒の瞳でいとも簡単に切り捨てるはずだ。他人に興味などない、自分以外を信じていない。目の前についても自分がそれに映つているか分からぬ、何をも塗り潰すあの黒の眼で。それでも確かに器は本物だから、自ずからその前に人は膝をついてしまうのだ。

馬車が石畠を走つてからからと。

「ここはどこですか、旦那様。お外の様子が違うよつです」

「異人を住まわせている区画だ。普段は出入りの無いよつにしている。一時交渉の場だ」

枠に手をつき津々と見てゐる頭越しに、男はふう、と街灯のぼつぽつを見る。

「別段文化は否定しねえが、あいつらは美を解するに欠けるところがある。放つて置くと花の咲かない地になりそうだ。俺がお前を置いて出なればならねえのは全くこの所為なんだぜ。他の者に任せではあいつらのいいようにされちまうから任せおけねえ」

「お花の咲かなくなつてしまふのですか」

「大丈夫だ。俺の目の黒い内はお前に灰の空は見させねえ」

男はふ、と笑つて心配氣な女の頭を撫でる。「それはさておき」「瑠璃、瑠璃、今日は洋館に泊まるぞ」

「お羊羹、」

「たまに氣分を変えるのもいいだろつ。今夜はたくさん可愛がつてやる」

布一枚の上から線を違わず円をなぞると女はひや、と背を反らす。胸を突き出すように反ってしまったのを慌てて元に戻し取り繕つように訊いた。

「天のお嫁さんはいるでしょうか」

「どうせいないだろつ」

「え」

「そんなことより、お前と連れ合つのが愉しみだ。あいつらは何の偏見もなしに俺たちを夫婦と見るだろつ。お前の美しさに素直に感嘆するに違ひない」

「異人さんはどのようですか。本当の人間なのですか」「髪や目色が黒でなくお前と似たものがいる。しかし俺たちと同じ人間だ」

「黒でないのに人間なのですか」

「お前は自分をなんだと思つていてる」男は苦笑した。

「旦那様の……奥さまです」頬を染めて女がおずおず言つ。

「ああ、可愛い。それだけを言わせるのにどれだけかかったことか。ああ、今日はお前のこの世に生まれたのを祝う日だ。盛大に皆に祝わせよう。色直しを一回はするぞ」

「るりを一回も着せ替えるのですか」

「お前、そういう言い方は悪い癖だぜ。言葉は意識をつくる」

「るりは一回も着替えるのですか」

「そうだ。空の色と月の色に。きっとお前に似合つだらう」

男の瞳の中に街灯の輝くのを見た。

「お喜び頂けるのならるりは幾度も着替えます」

「まあ結局お前は何も着けないのが一番美しいんだが、周りに見せるにはそういうからな」

「旦那様が一番と思うのならるりは着るもの何もいらないです」「よく言つた。そうだこれを今から使ってやるぞ」

男は小瓶を振る。女はきょとんと見た。

「お前が何も考えずに俺に甘えられるように用意させた。愛し合いたいというのにお前は俺に気を配つてばかりいるからな。今夜は唯只管にお前に気持ちよく感じて欲しい」

「るりは気持ちよく思つています」

「もつと良くなる」男は女の口に手をかけ開かせた。されるままに開いたところにとろりと小瓶から液を入れる。

「これくらいか」閉じさせると女はこくんと飲み込んだ。

「愉しみだな。効くまで少し時間のかかるらしいが、一体どれほど効くんだろう」

ぐすりと笑つて男は女の髪を整えた。

*

「 * * * * ? * * * * * 」

「 * * . ! 」

「 * * * . 」

「 旦那様…？」

突然言葉が分からなくなつてしまつて不安げに見上げる。

「ああ、悪い。やはりお前が美しい」という話だ。異国と言えども人の心は共通だな。やはり美というのは素晴らしい」「旦那様」いつもの言葉を喋つたのにほつとした。

しかし今度は青の目の色が自分の方を向いてきて目が合つてしまつた。何か手振りをして言つている。

「 * * * . * * 」

男は笑つて代わりに何か答えた。

「 瑠璃、thank you と言つてやれ」

「 天狗？」

「 そうそう」くすくす男は笑つた。青の目の体の大きな人も笑つている。

男が懐中時計を見る。

「 そろそろだ。行くぞ、瑠璃」

自分を連れて高い高い天井の部屋の中央へと行く。

天は。と手を引かれながら思つた。

「 さあ瑠璃… shall we dance? 」

黒の瞳に吸い込まれて差し出された手に手を置いた。言つてることは分からぬけれど、これは踊りの合図。音楽が流れ始めて、体は導かれるままに自然に動く。何も怖くない。

見たこと無い顔立ちの大勢の人がじつとこっちを見ていて、動いているのは自分達だけで、だけど怖くない。ここだけに明かりが照らされて周りは暗くてその通り、ここだけが明るいここだけが自分の場所。

二人きりになつてくるくる回る。

手、背、腰。安定した感覚。眼差し、髪の毛、洋服。優しい黒。体がどんどん熱くなつていく。回転して回転して、軸から熱く熱くなつっていく。きちんと止まれるだろうか。止まつてしまつたらこの熱が内に巡つて焼かれてしまいそうだ。

一曲の終わった。波の音のよつに大きな拍手の音が響く。高い天井を打鳴らす。

「楽しかつたな？ 瑞璃」

耳の熱くなつてこくんと頷く。

それからぱつと明かりが点いて、ざわざわと人波が広がり始めた。そこやかしこにざわめき衣擦れの音がして、そして止まつた。指揮棒の振られてまた音楽が始まつた。

「どうする？ もう一度踊つておくか？」

「少し…立ちくらみのするようです」

「何？ 大丈夫か」

男は女の肩に触れた。ぴくんと動く。男は目を眇めた。

「ほお…」

グラスに小豆色の液体を入れて其れを持ちながら会話をしていると、相手が少し興奮して背後を指し示した。

少し体を捻つて振りると黒髪の男が通り過ぎる。嫌なものを目にしたとすぐに視線を外しかけた、が。

「母さん…？」

隣を歩いている母の顔は逆上せたように紅潮し、自分で歩く力の弱まっているように体を男の方に傾けていた。すぐに足が向かう。

「大丈夫か」

「あ…天…」

瞳が濡れていた。すぐにその水溜りの目を俯きがちに逸らせる。吐くと息は熱そうだ。

「酒を飲ませただろ」「

睨むと、「いや、」と笑っている。具合の悪そうなのにどこか笑つている。

「水を持つてくる」給仕人の姿を見つけて急いだ。

「だんなさ、ま…り、も…あるけなくて…」

「もう少し辛抱しろ」

足の震えている女を抱え上げた。

「あ、」

乱れた吐息を上げる女を抱えてホールを横切つていく。人の目など気にはしない。

考え深げにじつと見ている男がいた。

ざわつく会場に戻る。

人だかりのできている方を見ると中心にいるのは黒髪の子だ。年の若い若者同士で談笑をしていて、娘は遠巻きに固まりながらそちらにちらちら視線をやっている。年配の者は年配で腰掛に深深と落ち着き情勢やらを話している。国より年で固まるもんだな、と思う。

しかしあいは本当に娘に田もくれない。
時間のあれば遊郭で遊んではいると聞いたが、あの様子ではまだまだ女を知らないな。

「ミスター・サー・キリサキ」

「ん?」

振り向くと老年に差し掛かる頃の男がいた。

「なんだ? 嫁候補の話ならあいに直接つけろ」

「奥様のことです、サー」

男は僅かに眉を動かした。微笑の消えるのは滅多に無いことだった。

「ルリ……なんだと? 分かり難い。本国語で話せ」

蠟燭灯りの揺らめく薄暗の応接間、白髪交じりの男と黒髪の男がソファに腰掛け向かい合っている。男が鋭い眼光で言うと、その老年の男は驚いた顔をし、試しに本国の言葉で問いかける。

「サー・キリサキ、本国の言葉もお判りですか」

「黙れ。話せ」

頷いて、前かがみに手を組んで話し始めた。

「ルリイニヤ・マリヤ・アレクサンドリア皇女です。かつて皇太子夫御夫妻が日本視察の折に誕生為された。しかし御子は生まれて間もないうちに何者かによつて連れ去られました。当然騒然としたのですが、門外に出てはならない取り決めで、この国に働きかけても口では言つもの一向に腰の上げる気配は無く、遂には帰国の刻限に迫り無念に去つたのです」

「その昔話が俺の妻とどう関係のある」

「お解りでしょう。その姫が実質この国を取り仕切る権力者、センジ・キリサキ貴方に見初められ妻となつていようとは……。もう諦められていたものを……やはり血筋というのはどうじょうと顯われるものだ」

「憶測甚だしい。何の証拠があつて言つている」

「あの見事な銀の御髪みくらは我国皇族代々に伝わる証、空色の瞳は王妃様そのものです」

「は」と鼻で笑う。

「黒髪黒目の人間が何人いる？髪眼の色など証になるか」

「ルリと呼んでいましたな。それはこの国に良くある名ですか？偶然と言うには最早不自然過ぎる。その名を持つことが何よりの証ではないですか？」

「下らねえな、下らねえよ。一度と俺に同じ話はするな」

男は立ち上がった。

「サー、何故拒むのです。何も貴国を責めようとや連れ戻そうと権利を主張する訳ではありません。失礼ながら我国との血縁のことは貴国にとって願つてもない話ではないのですか。率直に言つて对外軍事力に乏しい貴国が今均衡を保つていられるのは貴方の手腕によるもの。貴方もその不安定さを承知で御子息の婚姻を他国との架け橋にしようつと此度の催しをされた筈だ」

男は溜息を吐いた。

「違うな、单なる興だ」

「それならば尚更、」

「今役に立たたずとも足掛かり、か。姻戚を理由にすれば他国に先じて踏み入れることも容易い」

言葉の詰まる老紳士に男の口元は笑つてゐる。

「下らねえな。只管下らないだけだ、浮世の事は」

はあ、と老年の男は何か苦笑する。

「敵いませんな、腹の探りあいにすら付き合つてくれないとは。興味深い人だ。しかし正直なところ、どうする気なのですか。この情勢で力無き均衡はありえませんよ。眞偽は重要ではない事は貴方に言うまでもない。言わば協定、援助が得られるのは確かなことです。國を考えるのならば頷くのが当然のところを、それとも東洋の黒い虎には一体どんな深淵なお考えがありなのかお聞きしたい」

「単純なことだ。唯許せねえのは」

鋭い目を真直ぐに向けられ、自分よりも随分若い男に思わず怯む。

「あいつを下らねえ政に利用することだ」

「國より女が大事と？」

くすくすあがる笑い声。その姿は影にすらりとしたシリエット。

「当然だろ？國など俺とあいつの生きる間保てさえすればいい」

「不思議な人だ」ふう、と息を吐く。

「勝手が過ぎて潔い。國の為に生きることに誇りと使命を持つ氣持ちは変わらず確かに、どこかで貴方を羨んでいるのかもしれません……何か力の要る時は言つて下さい、サー・キリサキ。力になります。　友人として」

片目を瞑つて笑つて見せた。

「『友人』達に言つておく」

口元は不敵な微笑、瞳は日本刀のように研ぎ澄まされて黒い。

「俺とあいつの生きる間は、この國は何にも侵させねえ」

言い放ち、その男は立ち去つて行つた。

父親は一人で戻ってきた。そうして誰か他国の老紳士と連れ立つてどこかへ行く。

母さんを放つて、何をしている。

熱っぽたく具合の悪そうな顔を思いだす。

……俺にも責任はある。

連日踊りの練習に付き合わせた疲れが溜まっていたに違いない。顔に出れずに何かと耐えるのが母だから、無理をさせてしまっていだのだろう。やっと今日自分の披露も終わって、一挙に気が抜けて熱が出たのだろう。

そう思つと、早足に廊下に出でいた。

確かに招いた側が席を外す事は躊躇われたが、かと言つて苦しむ母親を一人置いて父親が抜け抜けと戻ってきたことは許せない。会場から連れ出したのは心配してではなく、体裁の為だったのだ。

母が居るはずの控え室の戸を叩く。

「母さん? 入るぜ」

そして眼を凝つた。

椅子に縛り付けられて其処にいる。衣服を緩めて安静にしている筈が。

繩は体に食い込む程きつく縛られて、手足は自由がきかない。胸部を押さえつける繩の間隔はまばらで、柔らかい肉が毀れ出ている。淫らだ。

「天……」

見られて焦り、しかしがたがたと身動きは取れずどうすることもできない。せめてにもか、必死に顔を下に向けている。自分が目を

背ければ人からも見えなくなると思つてゐる赤子のようだ。冷えた汗が母の首筋を伝うのを見てはつとした。体調が優れないのだった。

急いで縄を解き、寝かせるのに抱き上げよつとするとか細い声をだす。

「今お母さんに触つてはいけません」

そうして自ら立つてよたよたとソファに行きたせりと倒れこんだ。

「ありがとうございます、天…」

ぐつたりとしていて少し息の早く、心なしか頬も染まつてゐる。涙を流した跡、涎の跡が化粧に筋を作つてはつきりと分かつた。素肌の部分に残つた縄の跡を見て、体中が熱く燃え上がつた。

病人に、なんの仕打ちを。

瞳を閉じた母親、その時とたんと扉が開いた。言葉も出ず黒い瞳の男をきり、と睨みつける。男は自分がいるのに眉根も変えず、いつもより無表情氣味に歩いてきた。母親は足音に気づいているどうが眼を閉じたままにしている。ぎゅ、と縮こまつた拳があつた。何故か懸命に狸寝入りをしている。

「瑠璃、椅子から降りていいと俺は言つたか？」

声音に細肩が震えるがそのまま身を固くしてゐる。

「母さんは眠つてゐる」睨んだまま阻むように立つ。

「瑠璃、仕置きが必要みたいだな」

母さんの肩がびくんと動き、起き上がつた。顔は下を向いたまま、よたつきながらも急いで椅子に戻り座つた。

「あなたは……！」

激情のままに近づき、微笑のままのあいつが眼前に来る。その顔を殴つた。

ばああん

「旦那様！」

呆気ない程入った。避けられるか逆に返されるかそんな気でもとにかく気の收まらずに拳を振ったのに、酷く自分の思う通りに頬を打つ感触があった。

天才というのは嘘か。

いや、身じろぎもしなかつた。飛んでくる拳を前にして何の拳動も示さないというのは有り得ない。反射しないという方がむしろ難しい。

「旦那様…！大丈夫ですか、旦那様！」

母親は椅子から立つて駆け寄ると、泣きそうなハの字眉で頬に手を伸ばしている。そしてハの字を心なし逆にして自分を向いた。

「天！どうしてこんなことを……ぶつのはいけないことです！天はお父様に謝らなければなりません」

その後ろで父親の口元がくすりと上がったのを見た。

この為か。

一気に立場を入れ替えた。もつばきんと折れそなうに歯を噛み締めているが、酷く馬鹿らしくなつて足は部屋の出口に向かう。

「あ、天…お父さんに……」

氣弱くなつた声が追つたが、構わず大股で部屋を横切り扉を開ける。

その部屋と自分を繋ぐ長い糸を断ち切るようにばたんと閉じた。

もう、知るか。

女、女。女というものは嫌いだ。

「旦那様…お痛いですか」

男は自分を心配気に見つめる女を抱え上げた。

「あ」とやはりぴくんとする。

「もう自分で歩けます。旦那様…」

恥ずかしそうに視線を逸らせている女に構わず連れ去った。

とすんとベットに降ろされる。

「旦那様、腫れています。すぐにお手当てを」

手首がぐ、と掴まれて押し倒される。一気に体が熱くなつたのが恥ずかしい。

「天の事はお前に任せた筈だが…父親の頬を殴るとは、躾がなつていねえみたいだな」

「天は普段とてもいい子なのですが…何か今日はおかしくて、」

「躾のなつていない女に躾のできる訳がないか」

女は途端に目尻を下げ、ふるふると潤む。

「あ…ごめんなさい…悪いのはるりです……」

「そうだろうな」

女の着衣を剥ぎ取ると、しなやかな肢体が現れる。

甘たるい蜜液に濡れていた。足に向かつて幾筋も垂れた跡がある。今まで滴が流れるのを見た。

「叱られている時でさえ男を求めているのか」

「これは…ごめんなさい…！ いつもは違うのです。どうして今日はこんなになつてしまふのかるりは分からなくて、」

「分からない？」は、と男は嘲笑^{わざわざ}う。

「お前が卑しいからだろう」

女の蒼い瞳が見開いた。

言われたことは、無かつた。

それは自分で分かつていて、でも卑下すると叱られて胸を張るよう言つのだつた。こんなに美しいのだからと優しく髪を撫でてくれるのでつた。

男の手が張つた胸に伸びる。指の腹で押し潰すと、口から吐息が漏れてしまう。

「本当に卑しい女だ」

言われたことは、無かつた。

蔑む眼が自分に向けられることはただの一度も無かつた。意地悪ではあつたけれど、真つ直ぐな黒い瞳はいつも温かかつた。のに。

いつもと違う。何か雰囲気が違う。

「お前は卑しい女だ」

耳に直接囁かれ、脳髄を揺さぶる。

「　　はい」

目尻からぽろりと涙が毀れて頬を横切り布に染みこんだ。

「　　るりはとても卑しい身です、御主人様……」

男は初めてくす、と笑つて自分の衣を剥いだ。

「人は皆卑しい」

女の脚を割る。

「あ……！」

体は弓なりに反り上がり腰が浮く。意思も関係なしに歓声をあげた。

朝、気が付くと男の素肌に抱えられていた。しなやかで固くしまり心地のよい温かさ。巣の中の雛のように安心する。でも何で優しく包まれているんだろうとおずおず顔を見上げると、男はまだ眠っていた。これは初めてだつた。いつも先に支度ができていなくて謝ると、人より遅く目を覚ましたことがないから気にするなと言つていた。

初めて寝顔を見る。眉、目、鼻、口、顎……全て完璧に整っている。黒い睫が目元にかかり、寝ても凛々しい口元、もう何年も経つのに初めて顔を見たようだつた。

「とも……綺麗です」

呴くとふと口元が笑んだような気がした。錯覚ではなかつた。男の眼がすらりと開く。

「だ……あ、御主人様……」

「千次」

「けれど」昨夜を思いだす。自分は酷く卑しかつた。恥ずかしさに今すぐ溶けてなくなつてしまいたい。

「すまなかつた」

閉じ込めるうに腕が締まつた。

「俺という者が、どうかしていた。自分で思つより動搖しているらしい」

「え

「誰にも渡したくない。散々な仕打ちをして置いて勝手だが、俺の元から離れないで欲しい」

「そんなん……りは旦那様のものです。こんな身をお傍に置いて頂けるのはとても幸せなことです」

「お前は幸せを知らない」男はどこか哀しげに微笑した。

「ぶたれないだけで『幸せ』なんだろう? 毎日三食食べられて『

幸せ』『なんだりつ? 撫でて貰えればそれで『幸せ』なんだりつ?
お前は可哀想だ。いつも身勝手な俺に振り回されて、拒むことも
できずにいいよつて弄ばれている。他に身を置く場所があればお前
は俺など捨てて行つてしまつ筈だ』

「そんなことはありません。本当にるつには勿体無いほど幸せです
「それが勿体無くなかったら? もうと然るべき地位を享受できると
したら?」

「旦那様はなにを言つてこられるのですか…?」空色の瞳が揺れる。
「教えるものか」男はふ、と口を歪める。

「お前はもう死ぬまで俺のものだ」

「本當ですか、旦那様」女は顔を綻ばせる。「るつはとても嬉しい
です」

「それは本當なのか? 瑞璃」

「旦那様はいつもるつのかつて信じて下せりな」しづぽんと
して言つた。

「何があろうと許したいからだ」

「るつは裏切ることのありません」

男は何も言わずに口付ける。生暖かい舌を責め立てた。

まどろみながら腕枕に乗せた頭を眺める。きつからじと朝日を浴び
ていた。

「瑞璃……父と母を覚えているか」

「るつにお父さんとお母さんはいません」

女はできるだけ声をいつも通りにして答えた。

「お前の名は誰に貰つた?」

「…………」

「言いたくないのか?」

「言わなくてもよこですか?」

「駄目だ」

女はまた口を噤む。

「また今度に……お話しします」

「駄目だ」

「調べさせればすぐ分かる。しかしあ前の口から直に聞きたい。それならば何があのつとを許す」

女は目を彷徨わせてから震えて男を見上げた。

「話しますので最後にるりを抱きしめてください」

「最後なら嫌だ」

「とてもお好きでした、千次様」

女は男の肌に手を置いて言つ。

「『めんなさい』けれども私は那様を騙そつとした訳ではないのです」

「何?」

「るつせ……本当にこの口でないのです」

「本当は扇子は名を持たないものなのです」

女は俯いて何かに押し潰されているようにか細く口を開く。

「必要があれば、買つていただいてから御主人様に名付けられます」

「だがお前は名を聞いた時に名乗つたな」

「はい……るりは名前が無かつたのですが、るりの中にはるりもいたのでそう答へてしまつたのです」

「お前の中にお前がいる？ 話せ」

「『ルリ』と言つのは…お友達の…」ふるふると首を振る。

「今思うと、お人形の名前でした。るりは気がついたときからそれを持つていて、いつも二人でいてそれを離さなかつたのです。るりを気持ち悪がらないのはその子だけでした。その子も髪と目が違つて、るりがいなければ一人きりだつたのです。二人でいると余計に気持ち悪がられたのですが、それでもるりは離しませんでした。

けれど取り上げられてしまつたのです。……返してもらえませんでした。頑張つても届かなくて、痛くても届かなくて、るりは助けられずに氣を失つてしまつたのです。

氣についてからるりは探しにいきました。とても探して、そして見つけたのです。手足のばらばらになつていきました。裸になつて、髪の巻り取られていました。毛が散らばつて、虫のいて、青い目の泣いていました。

るりは怖くなつて走りました。その子を置いて逃げたのです。

るりはばらばらになるのがとても怖くて戻りたく無かつたのですが、見つけられてしまいました。けれどばらばらにはなりませんで

した。るりは珍しいので繋がったまで済んだのです。その代わりにとてもお腹のすいて葉っぱを食べることになったのですけれど。

るりは助かってしまったのです。けれどもう誰もいません。一人になるのは当然のことだったのです。るりはとても悪い子でした」

男はぎり、と奥歯を噛んでいた。女の話す間、地獄の烈火の如き黒い炎を宿しながら何も止めなかつた。

「ルリはるりの頭の中にずっといました。るりはとても怖くて眠れなかつたです。ルリはるりの代わりにあんなつたのです。躰のときはルリを思い出して真似るととてもうまくいきました。それに怖くなくなるようでした。それでるりはとても上等品になりました。るりはるりをルリと思うことにしました。いつのまにかルリとるりは一人になつていたのです」

「それでは人形の名がルリだつたということだな」

「はい、旦那様……るりは名前を盗つてしまつたのです」

女はこれ以上なく縮こまつっていた。触れないように男の体から離れている。男は無理に寄せようとはしなかつた。

「何故人形の名はルリという?お前がつけたのか?」

「書いてありました、旦那様。今思うとよく分からない模様なのですがなぜかるりはそれを見てるりと思ったのです。旦那様に書つた字の中にはありませんでした」

「こんな字か?」

男は紙に女の名を書いた。この国の文字ではなかつた。

「そうです、旦那様。確かそのような模様でした。どうして旦那様がお知りになつてているのですか」

女は驚く。

「るりは旦那様のものだったのですか」

「そうだ　いや、違う。俺の瑠璃はお前だけだ。人形なんかじやねえ」

女は驚いて目を見開いている。男は特別感情を込めた訳ではなく分析的な口振りだつた。そのまま淡々と続ける。

「その続きになにか書かれていたか」

女は必死に思い出そうとして、毎日見ていたものがぽんやりと浮かんだ。

「なにか……あつたかもしません。けれど掠れてしまつて判りませんでした」

「そうか……」

男は深く長く溜息を吐いた。

「瑠璃、お前のその名は人形のものじゃねえ。元々お前に『えられた名の一部だ』

「え

「自分の眞の名を知りたいか

女は表情が止まつたが、しかし布をきゅ、と掴んでふるふると首を振る。

「旦那様に……お名前を頂きたいです。本当はそのはずなのです」

「そうか、ならば」男はじりじりと離れていた女に手を伸ばし頬に触れた。ぴくんと動く。

「お前は瑠璃だ」

「　　はい、旦那様」

やつと花のようになに笑つたのにほつとしたのを可笑しく思いながら、

男は女を抱き寄せた。慈しむように可憐で脆い花を胸に包む。

自分といつものがこれほど女に左右されるとは。

男がくすくす笑つてゐるのがどうしてだか分からなかつたが、この耳にくすぐつたいくすくすが好きだつた。錘を取つてもらつたようふんわりと軽くなつて、どうしても幸せでいてしまつた。

るには千次様に出会えて幸せです。

小さく小さく口の中だけで呟いて、それでも伝わって頭を撫でられたのに女はまたほっこり頬が緩むのだった。

「あーあ」

「何を溜息ばかり吐いているんですか。そう言えば夜遊びがぱたりと止みましたね。誰か舞踏会で見初めたんですか」

付き人を無視して伸びをしてからまた書に田を戻す。

「何かさあ」ふと言ひ。

「何です」

「親父と母さん、仲良くなつてねえか？　あの舞踏会から帰つてきてから」

「そうですか？　前から田那は奥方に夢中だつたじゃ不下ですか」「それもなにか一方的でなくなつた感がある。前は親父に振り回されていいる感じだつたのに」

「それならいいことじやないですか」

「最後の記憶だと親父が最悪だつた覚えしかねえんだが。また何か母さんは騙されているんじやないのか」

「どうでしよう。田那は勘違いされ易いですが否定するのを面倒がりますからね。そこは悪い癖だ」

はあ、とまた溜息を吐く。

「男女の機微は分かんねえなあ」

「ほらほら、悩みがあるのなら人に相談がいいですよ、私どか」
だるそうに何か楽しそうな従者を見る。

「女の機嫌を取るにはどうすればいい」

「ああ、やつと若も人の気を気にする心を持ちましたか。良いことです。やはり社会勉強に連れて行つて良かつた」

「黙れ。従者風情が」

「そういうのは良くないですよ、身分蔑視をした賢帝は古今東西あ

りません」

「言い方が悪かつた。黙れ、影郎風情が」

「ああなんて人だ、旦那はそんな軽口を叩かない」

「あいつは腐つても貴族だからな、腐つても」

「若是貴族じやないんですかい」

「さあな」と頭に手を組む。

「母さんは元は貴族じやないと言つし俺も平民の生活で育つた。しかし大貴族家の跡取りとかいう。俺は何だらうな」

「若、女の機嫌を取るなら気の利いたものを上げるといいですよ」

「なんだいきなり、てめえで聞いて置いて話を変えるとは」

「いや、茶化そうとしただけなのに思いのほか重い話になりそつたので」

「まあいい。ものを?」

「そうです、そうです。鏡や入れ物なんか」

「買つてこい」

「嫌です」

男は顔を顰める。

「なんですか、その顔は。私は若の用心棒であつて小間使いじやないんですよ。大体若、ご自分で選ばず使用人に買わせるとは高慢で反つて逆効果です」

「しかし何が喜ぶか見当もつかない」

「聞けばいいじやないですか。母上とか、それか父上に」

「親父に?」はん、と鼻で笑う。

「若い時は源氏の如しもて離されようだつたらしいですよ」

「へえ……あんなのが」

「若是顔が似ていて教養も優れている筈なのに、全く色氣がありませんよね」

「つるせえんだよ。いるか」

「これはどうですか、旦那様」

「美味しいな」

真ん中に穴の開いた菓子を口に齧つて男は微笑む。

「こねて油で揚げたものです」

「そうか。お前は西洋の菓子が好きだな。作るのも上手い」

「るりは本の通りにしただけです」

「ちょっと照れて言つた。

「無い調理器具の多いので心配でしたが良かつたです」

「無いのか？　そうだ、この機に西洋型の台所を用意しよう。お前専用にすればいい」

「本当ですか、旦那様」女は顔を輝かせた。

「勿論るりの専用でなくて十分です。けれどオープンといつのがあるととても便利になると思います」

「分かつた、言つて置く」

「ありがとうございます、旦那様。るりはたくさんお菓子を作ります」

「そんなに作つても甘いものをいつもは食えねえよ

「お配りしてもよいですか、旦那様」

「家族に？」

「ご家族様にも食べていただけるなら是非…他にもお世話になつている人皆です。この家で働いている方々と、できるならこの国のひとみんなに配りたいです」

「そうか、それは割と壮大な計画だな。よし、俺も手伝つてやるわ」

女の顔に花が咲く。

「だが一番初めに食うのは俺だからな」

「はい、千次様」

それからちらり、と伺い見る。

「天も呼んで三人で食べたのならもつと美味しくなると思つのですけれど」

「お前がしたいならいいだろ」男は朗らかに笑つてしまつとした

女の頬を撫でた。

「丁度いい。入ってきたらどうだ」

「え」

ち、と舌打つた。こんな昼間から親父がいるとは思わなかつた。帰ろうか構わず聞くか少し足踏みしていただけなのに覗いていたみたいに言いやがつて。壁から姿を現すと、「天」と言つて母親の顔がほつこりする

「これの匂いがしたのですね。天にも持つて行こうとしたのですが、良かつたです。まだ出来立てなので」

また何か作つたらしい洋菓子の前で能天気ににっこりと笑うので仕方なく踏み入れた。

前にやつた緑の前掛けをして菓子がたくさん並んでいる皿を出しつけた。ほかほかと湯気を上げている。

「ドーナツか」甘たるく油っぽい匂いにげんなりした。

「火傷していないか」

「大丈夫です。上達したのです」

「なんだ、俺より先に食べたことがあるのか」

男は自分の和服の袖に手を入れ、女は遠慮がちな返事をする。

「旦那様は甘いものの苦手でしたので」

「いつから食えるようになつたんだ、あんたは」
しらけた目で見ると男はしらつと答える。

「茶だつて菓子はあるだう」

陶器のポツトに手を伸ばし、用意された新しいカップに紅茶を注いだ。毒が入れられないかきちんと見張る

。それはもう随分と紅紅としていた。

「絶対濃いだろ。自分で淹れなおす」

「旦那様のお紅茶は濃くに出します」

母親は何か得意げに言い、その上それを褒めるようにぽんと頭に手を置かれて嬉しそうに見上げ、男と微笑み合つた。

「ほんと、なんなんだ……？」

こんなに夫婦仲が良いのは初めて見る気がする。今までには何かすれ違つているようだつたのに。

「女のことか？」

男が面白げに聞いてきた。何か分かりやすい顔でもしていたか。それを受けた母さんの方も口をきりきりとさせた。

「お嫁さんですか？」

「違う」と即答する。

「そうですか……」

「何で残念そうな顔をするんだよ。母さん楽しんでいろだら
るりは……女の子もほしいと思つて、」

「俺に言えよ」男は頬をちゅ、と啄ばむ。

「夭にお嫁さんできたらうつの娘さんになります。一緒に菓子
の作れるでしょうか」

「そうか、それは楽しそうだな。そうしたら二人で暮らそつか
「旦那様、夭を忘れています」

くすくす笑つて間違ひをただすのを「わざとだよ」と溜息吐きな
がら教えてやつた。

よく分からぬことは耳に届かないようソファにぱたぱた走つ
て行つてぽんぽんと叩く。

「夭、こちらに座つて食べてみてください」

「いらねえよ。俺は洋菓子よりも　おい、ふざけるな！」

するすると腕を引かれていた。親父に触られるのは初めてで肌が
泡立つ。しかし見かけから想像できない程の力で抵抗も虚しかつた。
ソファにばすんと投げ出される。

「食わないって言つてんだろ」

「夭……気に入らなかつたですか？」少し睫を下げて言つ。

「そんな筈ねえだろ？」

答えたのは親父で、菓子を手に取つたのに嫌な予感がした次の瞬
間に口に無理やり突つ込まれていた。

「　んん！」

無理やりに顎を開じられている。母親はただびっくりして目を丸
く見ている。

「噛めねえんだよ！」

飲め。

息が苦しくなってきて、だんだん母親もおろおろとしてきた。

「旦那様……夭はもしかして飲み込めないのでは、」

ち、と小さく舌打つのが俺には聞こえた。手が離れる。「ぐんと飲み下してからふは、と息を吐き出す。

「てめえ…」

ふん、と親父は意地悪く笑う。それも背にいる母さんは見えない。

「母さん、茶！」

「あ、はい。すぐに」

ぐ、と今度は顎が掴まれた。

「おー…俺の瑠璃に何を偉そうに命令している?」

掴まれた手を離そうとするがぐぐぐと力を込めてもびくともしない。

「はい、天」母さんが紅茶のカップを持ってきたのに合わせて手の離れる。

「以後気を付ける」にこいつと笑って言つたのを、何をどう勘違いしているのか母親がにここと笑う。

「なんだか旦那様と天の仲が良くてる今はとても嬉しいです」

「誰が」「ふん、とそっぽを向いた。

「お前、いつまでいるんだ?さつさと帰れよ」

何かもう面倒そうに母親の隣に座つておまけに肩を寄せる。

「母さんに用があるんだよ」

「何ですか、天」また嬉しそうにする。

「女は何を貰つたら一番嬉しい?」

「え」母は小首を傾げて考えた。「そうですね…」

「エプロンはとても嬉しかつたです」

「前掛けは使わない。例えば親父から貰つたもので」

あくまで母親のみ視界に映して聞いた。

「旦那様から…」はたと止まる。

「何も貰つたことないのか?」

「え…と…たくさん」そう言つてから助けを求めるように親父の方を向いた。

「何もやつてねえ」くす、と親父は笑う。

「贈りたくともこの世に瑠璃に釣り合えるほどのものなどない。あ

るとすれば俺くらいだ。だから瑠璃は俺がいればそれでいいんだよ。

心通つている俺たちにはものなど必要ねえ」

「結局自己陶酔じやねえか…」呆れ顔で見た。

「分かつてねえな」男は笑う。「ものは心だ」

「旦那様にはたくさん頂いています」と柔らかに微笑んだ。

「毎晩、な」

男は笑い、赤くなつた女の頸を持つて瞳を見つめ合ひ。どうやらまた二人しかいない世界にいるようだつた。少し自棄になつて紅い茶をすすと飲む。

*

「結局分かんねえ」

「そうですか」

「ここにこと笑つて昆布茶をだす。

「気が利くようになつたな」

「いえ、私のです」と言つて自分で飲む。反応するのが面倒で方頬杖をついたままだつた。

「冗談ですよ、はい、若のも」

「すずと飲んだ。

「はあ…いいな、茶は」

「抱いてあげればいいじやないですか」

吹いた。

「若是面白いですね。市井の男子みたいだ」

「普通で悪かつたな」無愛想に答える。

「いえいえ、大事なことですよ」

「親父は普通じゃないだろ?」

「普通じゃないですね。若是旦那のようになりたいんで?」

「なりたくねえよ」

「ならないじゃないですか」

ち、と舌打つ。何か丸め込まれたような感だ。

「茶でも飲みに行ってはどうです」

「茶？」

「別に何もしなくてもいいんですよ。一人で育む時間が大事なんですよ」

「お前は知ったような口振りだな。誰か大事な女がいるのか」

「それもあつてこんな貴族の屋敷で下仕えをしているんです」

「本当一語余計とはお前のことだな、こんなとは」

「それではいつてらつしゃい」笑顔だ。

「行かねえよ」溜息を吐く。「喧嘩は面倒だ」

三十八・手作

あれやこれやと構つて子が帰つた後。手作りの菓子を二人仲良く囲むといつ夢が叶い、るんるんと洗い物をしていた。

「瑠璃……」

「あ、旦那様」

背後に来たその人を振り返ろうとしたが、

「ひや、」

着物の裾を割つてひんやりした手が腿に触れる。

「あの、もうすぐに洗い終わりますので、」

濡れた手は食器を落とさないようにしてもじもじと言つが。

「俺が食べたことのない菓子を天には随分と作つてやつたみたいだな？」

その手は撫で上がつたかと思つと尻をつねる。

「はああ」

思わず声が出たのは、それは餅なら千切れてしまつような痛さだつた。膝から力が抜けて手を台に付く。

「それはその……旦那様は召し上がるいかと思い……天は好きでしたので……」

つまみは取れてほつとする。ひりひりするのをさすりたい。

「作れ

「え

「天にも手伝わせて、俺に菓子を作れ」

「あの、けれど御貴人がお台所に立つのはいけないことは……るりでは天に言つことはひ、」

ぎゅい、と抓られて言葉が止まる。背後の声が囁くよつよつ。

「仕置きをしてからの方が分かりやすいか？」

「あ、るり、天と一緒にお菓子を作ります。すぐに、」

竦んで女は早口に答える。

「いい子だ」

指が離れ、耳を甘噛みすると男は離れていた。女はひりひりしながら痺れていた。

*

母親が戸口に立つて何か言い難そうにもじもじしている。

「なんだよ?」

「天…お手伝いして頂けませんか」

「手伝い?別に構わねえけど」

「では、お願いします」

ひとまずほっとして、だがまだ何か不安げにとことこ歩くのについて行つた。

どうやら台所に連れて行かれて戸口で立ち止まる。

「……なんの手伝いだ?」

「え……と、お菓子を作るのを手伝って頂きたくて、」

「俺より女中の方が役に立つだろ、料理なら」 そうくると背を向きかけた、がはっしと服端を摑まれていた。瞳が潤んでいる。

「天に手伝つて頂かないとお母さんはとても困つたことになつてしまいます」

「はあ?」

「お願いします、天」

「……」

なんでもうそ必死で泣きそつとの意味不明だ。

+++

「なんだつたんだ、一体?」

持たされた焼き菓子の袋を手にして訳の分からぬまま廊下を歩く。焼きあがつた頃にはとつぶり日の暮れていた。

『天、これを混せてください』

『天、この型で抜いてください』

誰にでもできそつな」と、余り自分のいる意味はなかつた気がするが。

『ありがとうございます』『天のおかげでたくさんできました』
酷く嬉しそうに笑つた顔を思ひだす。そう言へば作業中も、始めてしまえば途端に浮かない顔の消えててきぱきと、非常にしきづきとして『天は上手です』『力のあります』としきりに感心してみせていた。なんだか悪い氣もしなくて、母親と一人台所に立つて、のを時々可笑しく思いながらも、時間を忘れて楽しんでいた氣もある。

部屋に戻る。そこについての見つも見て一挙に現実に戻つてきた来たようだつた。

「若、なにか白く汚れていますよ」

「ああ、」粉のついているのをぱんと払う。

「そこで払わないで下さい。誰が掃除をすると思つてているんですか」

「お前じやねえだろ」

「若でないことは確かです」

「全く口煩いな。余計な口出しをするな」

はあ、とベットに横たわり、ぽんと包みを枕元に投げる。

「おや、もうお休みですか」

「疲れた。お前に」

「それはなんですか、甘い匂いがしますが。まさか私の為に?」

「黙れ。灯りを消して出て行け」

灯りと気配の消えるのに合わせて瞳を閉じた。鼻に甘い香りのする。

台所に女の姿がある。何か作っていた。

『夕飯はなんだ?』

手元を覗くと鉢に白いものを練つていて。

『クッキーが夕飯になるかよ』

呆れて笑うとはにかむ。その白い顔の顎を持って上げる。

愛しい

林檎色の唇に近づいた が、

『大嫌い!』

ばかり

「痛つてえ!」

布団、朝日、生生しい頬の痛み、 徒者。

「てめえ……寝起きの挨拶がそれか!」

立ち上がつてすぐに従者に掴みかかる。

「仕方ないでしじょう! 防衛本能です」

「何の防衛だ。寝てる者に殴りかかるとは不道徳の過ぎるぞ

「朝御飯のできたというので、寝坊をしている若を起こそうとしてあげたんですよ、そしたら若が私の顎を掴んで これ以上は言わせないで下さい」

「何の言い訳も立つてないぞ。覚悟はできているな? そこに直れ」

投げようとするが流石に用心棒りじくまくいかない。相手も仕掛けで来る。

「刃向う気か

「悪いのは若です!」

「丁度言い、手前には田代から鬱憤していたんだ。相手になれ!」

「望むところです。若に手ほどきして差し上げましょ!」

「ほお……舐めるなよ。手加減しないぜ」

喧嘩が始まった。

……

「若、中々腕をあげましたね」

「ふん、俺の勝ち越しだな」

「いやそれは違うでしょう」

「お前の方が多く投げられた」

「若の方が痣の多い」

「もう一度はつきりさせてやろうか」

「嫌です。腹の減りました。それにやり過ぎると解雇されかねない」

「それは丁度いい。一拳両得じやねえか」

「分かりました、私の負けです。手加減の難しい程に若は強くなりました」

「だから一言余計なんだよ、手前は」

「噛み付くよつこぐ」と睨みあげる。合わせてぐぐ、と腹の音が鳴る。

「あはは、若は可愛いですね。弟のようだ」

「何を従者風情が……」ぴき、と青筋の立つて手を上げるが掘まれる。

「まあまあ、若は昨夜夕飯も夜食も抜かして寝たんですからそう恥ずかしがらズとも」

「減つてねえよ」ふん、とそっぽを向く。

「貴人は食わざとも高楊枝、ですか。誇り高いんだか意固地なのか」

「影郎、行くぞ。折角作ったものが冷める」

「はいはい」

大股に歩いていく背に笑つて従者は従いて行つた。

久々に市街を散歩した。

空気は清潔しいが雪溶けの道はびちやびちやと抜かんでいる。靴を履いてくれば良かつたかな、と思つたが引きかえすのも面倒で濡れたまま行く。市井のものは藁を結つたものを履いていて自分だけ浮いてる氣もした。

ふいといつかの呉服屋を思い出した。

「よお」

吃驚と田を丸くした店の者にすかさず「忍びだ」と言い含めると、ははつと萎縮しながらも心得たように普通の風を装いそそと茶を用意してきた。

「今日は何をお求めで」「あんじょ」

「靴はあるか」

「少々お待ちくださいませ」

店の者が奥に行つた後、気を抜いて茶を啜りながらなんとはなしに店の様子を見ていた。

来る者は多いが買う者はなくほとんど売つて帰つて行く。それも一束三文のようで、断られることもある。横を通り過ぎる店の者を捕まえて聞いた。

「商売になるのか」

「商売上がつたりですよ。近頃の物価の上がりようときたら。西洋にものが流れ、国内の流通が滞つているんです。儲けた金は貴族の手元に行くばかり、生活は苦しくなる一方だ。この都はまだどうでもありませんが、不作も相まって農民には飢餓する者もいます」

「ほお……」

呼ばれて、引っ切り無しに来る客の相手をしに忙しそうに戻つていった。それと入れ替わるように先の店員が靴を持ってくる。なん

だか目がうるうるとしょうもない顔をしている。

「若旦那様。あるにはありましたが……、いえ、申し訳ありません
がやはりこちらはちよつと……」

「それでいい、間に合わせだ」

手から受け取り、履き替える。

「失礼ですがこちらをお履きになつて外に?」

「ああ」

「あの、やはり見てくれの悪いですからお止めになつた方が」

「なんだ、歯切れの悪い。もう行くぞ」

「毎度有難う」れこます。お氣をつけて!」との声を後ろに聞いた。

やはりさくさく歩ける。気分がいい。

少し上機嫌に団子屋を見つけて入り、団子を貪つていると世間話
が聞こえた。

また米が値上がりしたぞ。

今じゃ白飯食うのは貴族と奴隸、作ったもんが食えずに米を
貰ひのに奴隸と偽る始末、全く可笑しな世の中だ。

あちらこちらで米屋に一揆の起つていて、物騒になつたものだ。

何、この都では関係の無い。天下の霧崎様のお膝元だ。

しかし霧崎様は奴隸を優遇しすぎじゃないのか。喧嘩が起こ
ればひつ捕らえられるのは必ず平民といつぞ。

滅多なことを言つた。誰が聞いているとも知れない。

ひそひそと声は小さくなつてそこで聞こえなくなつた。

興味深くはあるがなんとも落ち着かない心地がして、錢を置いて
店を出た。そういえば雪道の歩き難いのもあってか人の混みようも
無く以前の活気が無い。

やつやと歸れ。」

足を帰りに進めたその途中、何やらやいやい人ばかりのあった。怒鳴る声が聞こえて、人の輪の中に一人男がいて揉めているようだつた。

「なんだと、奴隸がいい氣になりやがつて！」

「奴隸じゃねえや、平民でさえ！」

「ならその米はなんだ！」

どすんと押されて小男が引っくり返り、白い米が泥水に浮かんだ。泥まみれで小男がどもる。

「あ、あ、あんたを訴えますぜー！」

「なに、」

少し引いた男の態度に小男がは立ち上がつた。

「役所に言えばすぐに手が回りますぜ。さあ、謝つて下せえ」

「くそ……誰が奴隸なんかに、」ぎり、と瞼んで睨み付け、小男は息巻く。

「今まで散々こき使いやがつて、なのに許してやるつて言つてんだ、土下座をしなけりやあんたは今すぐ豚箱行きだ！」

訛りに滑舌も悪く捲くし立てるので聞き取りがたい。

「土下座だと、」

「有り金も置いていきんなせえ。そしたら無かつたことにしてやりますぜ」

といふざら抜けた並びの悪い歯を見せて笑う。

「もつ我慢できるか」

「ばがん、

きやあああ

小男を殴り飛ばして観衆の悲鳴歎声が上がった。

「やつたなー。もう詰しませんぜ、見てる」

と膝を立てて背を向けるのをぐい、と掴んだ。

「歩けない体にしてやりや問題ない」

「そりやいい、手を貸すぜ、」

輪から出できた者かした
それを見て次々と傍観者た
た者が輪に入つてくる。

「日ひる鬱憤してたんだ」

「どうせなら、もうこした後、こいつを橋下に括り付けて役所に見せ付

「おいい 御貴族様は戻るしが能の無い才畜生が」
じき、と拳を鳴らしてじりじりと近づくのに垢にまみれたような

赤ら顔か青くなつていぐ。

「ふん、一度と口の聞けないようにしてやる」
「やめなあんだ！」皆勝浦は放らせませ

齧るように拳を振り上げる。怯える小男にいやにやと躊躇的な笑みを浮かべている。

「すいやせんでしたあー！」

土下座をしたのは小男だつた。

「旦那様、慈悲深い旦那様、どうかこの卑しい身にお情けを」
額を泥水に擦り付けてへつらうが、男達はふん、と嘲け笑つ

腹を蹴った。軽々と犬ころのように転がるが、なおもまた額を擦り付けてぶるぶると謝っている。皆大笑いをした。一人の男が困む者達に向かつて大声で言う。

「」の畜生を皆で一回ずつ蹴つて回そうぜ。それで許してやる」「ひい、と小男は頭を抱える。男達が幅を狭めていく。

「おー、もうここだわ！」

誰か若い男の声に頭振り向く。日焼けも無いすんなりと涼しい田

元の若者がいた。

「なんだてめえは」

「邪魔なんだよ。通りを塞ぐな」

「偉そりに……どこの坊主だ」

若者の革靴を見てふん、と鼻を鳴らす。庶民には手の届かない代物だ。

「若造が高く止まりやがつて。てめえら金持ちはそりやすかしていられるだろうな、誰が食えようと病にかかるつと関係ねえもんなあ」「ちょうどいい、」いつにもちよつべら世間勉強してもうおうぜ。ぱりぱりせいぜい後で親父さんに泣きつくんだな

脅すように拳骨を見せるが、しかしその若者は眉一つ動かさず冷めた目をしてくる。

「生意気な奴だ、本当にやるがー。」

拳が振り下ろされる。

雑で鈍い。

体を避けよつとした
泥濘ぬかるみに足を取られた。

しまつた、背から。

引っ張られつつも体勢を整え、拳を鼻先で避ける。後ろの奴をどうにかと振り向きかけるが、今度は手首を掴んできた。

「早くー！」

「？」

田端を流すと女だった。そのまま走る。

「どいでどいで！」

「じやどやする野次馬をかき分けて、女はぐいぐい引っ張り行く。

「おー、あの奴隸がいないぞ！ 気の逸れた間に逃げやがった！」

もう面倒だつたので女に引っ張られるままに歩を合わせて走つた。
じつやつていいるのか着物のくせに思い切り走るので脚の白いのが見
える。男はふ、と笑つた。

相変わらず女らしくない女だ。

女に手を引かれて街の通りを走っていた。
雪水が跳ねている。

可笑しいな。

しかし頬に刺さる寒風はどこか爽快だった。
橋のところで漸く止まって女は身を折りぜえぜえと息を切らした。
息の限界だつたらしい。白い吐息が湯気のようにあがり結つた髪も
ところどころぼぐれて、頬はりんごのように赤くなっている。その
様子が可笑しくてくつくと笑った。

「何よ、笑うことないじゃない」

耳まで真赤になりつつ急いで髪を整える。肌に当たる冷氣がどう
いうことか温かく感じられた。

「ありがとう、雪」

「べ……別に、」

下を向いても」「、と言つ。「あ」と言つたのは、鼻緒が切れてい
たようだつた。

「これを履け」

風呂敷に入れていた草履をやつた。靴では先のような事のありま
ずいだう。

「……いいの?」

「おぶれと言われるよりましだ」

「そんなこと言わないわよ!」

膨れた顔にまた腹から温かい笑いがこみ上げてきた。

こんなに可愛い奴だつただろうか。

会わない間に何か様子が違くなつた。肌の白かつたのはより白く、

唇の赤かったのはもつと赤い。田元の黒子がちゃんと付いている。何も変わっていないのに変わっている。

「お前、何か変わったか」

「天も、なんか」

「なんか、なんだ」

「なんでもない」

「変なところは変わらないな」

「元から変じやありません」

ふいと向くのは相変わらずで、くつくと笑う。見ていると本当に可笑しい。しかし。

男は瞼をゆつくり閉じてから開けてもう一度女を見、微笑した口元は少し寂しい。くると踵を返す。

「じゃあな」

「あ…」と女は背を見る。

行ってしまう。

「天！」

男は片顔だけ振り向いた。

さらりとした黒髪、涼しげな瞳、整った口元、細身のすらりとした背…前よりもずっと凜々しくなった。

「ありがとう！ずっと大事にする、この草履」

女は顔いっぱいに笑顔を作つて手を振つた。

「許婚さんとお幸せにてー」

一気に田頭が熱くなつて、いけないと思つて橋に駆けた。

早く渡つてしまおつ、この橋を。向こう側まで。早く川を越えてしまおつ。

橋の真ん中で足が止まってしまったのは、ぐ、と手首が掴まれていた。

「……離して」

「勝手な勘違いをして行くな。許婚はいない」

「え、」
振り返り、すぐ近くで目が真っ直ぐぶつかってしまって触れられている手首が熱い。

「だつて……今、会ったのにすぐ行つて……許婚さんがいるから、「お前は俺など嫌いなんだろ?」

「馬鹿……」

ぼろぼろと涙が零れた。

「何も分かつてない」

「お前が言つた」

「離してよ」

「俺が勘違いしているなら言え」

「してる」

「それじゃよく分かんねえ」

「……すき」

「聞こえねえ」

「天が好きー大好き…！」

橋の真ん中、大声で叫ぶ。男はぼろぼろ泣く自分を黙つて見ている。

「離して」

「嫌だ」

「天は嫌いなんですよ、泣く女は」

「嫌いだ」

女は掴まれた腕を振る。鼻水まで出でてくる。もうぐしゃぐしゃだ。もう嫌だ。皆見ている。何で自分だけこんな恥ずかしい目に合つて

いるのか。

「だが差し引いてもお前は好きだ」

男が女を抱きしめた。

女は吃驚して涙が止まる。嘘。男の胸しか見えない。ああ厭だ、自分の涙が男の衣に染みを作っている。

「小雪、俺の許婚になれ」

涙がぼろぼろ出た。しゃくり上げて、男の胸で泣いた。

「小雪……」

「夭……」

真つ直ぐの男の瞳に、目を閉じた。

何か「ごそ」と音がして　　唇に、当たる。甘い匂い

思わず瞳を開けると、男が自分の口に洋菓子を差し込んでいた。

「雪、クッキーを食うか

「なに、それ……」

気が抜けて笑ってしまった。

そういうことはあんまり変わってない。

「抱きてえ」

ほんやつと男が呟き、松の雪がざわ、と落ちる。

「何をおもむるに……よく街に出るよつになつたと思つたらまた遊郭通いを始めたんですか」

瞳をどこか遠くにやつては、と吐息を着ぐ。

「おや」

従者は惱ましげな若者を眺める。少し上を向いたその顔は、唇の裏に隠れた黒子が見える。

「色つぽくなりましたね、若」

「阿呆」

「ほりほり、全然進んでないじゃないですか」

「お前、大事な女がいると言つたな」

「全く……」

「抱いたか」

「やだやだ、前は何故皆そう好色なんだとか自分だけ綺麗なつもりでいたくせに好いた女の出来た途端これだから。そういう男に男に限つて発情すると止まらない」

「好きな女は抱きたいものだな」

「そういうことです」

「梅花の色が似合つだらう……」 そう呟いたかと懸つと立つ。

「ちょっと、どこのに行くんですか」

「こつもの無視をしているのか本当に聞こえてないのか黙つてさつと出て行く。

「あーあ。春ですねえ」

苦笑いをして腕を組み、窓外を見る。

「梅ですか……」

松の木の傍にはまだ蕾の固い梅の木があつた。

「雪、」

男は女に手鏡を渡す。黒の漆に金箔の散つていて絵を造つてある。繊細な造りは職人の手によるものだらう。

「ありがとう」

女は微笑んで受け取るが、どこか少しきじちなく陰る。

「でも、天……」

「気に入らないか

「そんなことない。とっても素敵」

「そうか」女の笑顔を見て微笑み肩を寄せた。

来る度に男からものを受け取る。家具など大きなものではなく手に持つてくる小物が多いが、趣味のよくいすれも見たことがないような美しさで一つ一つとても高価なものなんだろうと思う。無意識に中々使うのには慎重になつてしまつ。ひょっとしたらそのへんの調度品や着物よりも値の張るんじやないだらうか。

「雪、次は何が欲しい」

結い上げてある頭をそつと撫でて微笑む。これも男から贈られた髪飾りの貝が灯りを受けて七色に輝いていた。

「なんか、天じゃないみたいだね」

「そうか?」

「前はもつとがさつだつた」

「そうか」

仏頂面をするかと思つたらくす、と笑つた。店の看板芸妓も嫉妬するほど艶やかだ。以前と同じ顔の筈なのに、なんだらうこの花を磨り潰したような噎せ返るほどの色氣は。こんな近くでこんな風に微笑されて、百戦錬磨の芸妓だつてきつと惚れてしまうだらう。

「大人になつたみたい」

頬に熱を感じながらも、声が思つたより寂し気な響きになつてしまつたのに自分で驚く。

「やうか

「もう、そればかり

「お前が可愛くて他を考えられねえ」

「嘘、」

「本當だ……」

男は女をもつと胸に抱き寄せ、すると由^{うなじ}に項^{うなご}が見える。女の前に腕を回して後ろから抱く形になった。

耳の形が可愛い。鼻の形もいい。睫が長い。花より美しいのは女だ。摘み取つて愛でたいものだ。

「雪……もういいか

ぴくりと耳が動く。

「ま、まだ……」

「そりか……」残念そりだが苛付^{ひびき}は無く、代わりに柔らかく腕に収める。

「そりだ、天 膝枕^{きしゆ}はいいの?」

氣をとりなすように言つとそつと手が重ねられる。

「うん? いや、いい。こうしている方がお前に触れていられる」

「前はそればかりだつたのにね」

「子供^{がき}だつたな」男はふ、と笑う。

「お前の魅力にも気が付かなかつた」

「そうでしょ。やつと氣づいたんだから

「ああ

「変なの」

男はぎゅ、と女を抱きしめると、唇を奪つた。

「ん……」

ぼてんとした唇を割り入つて、長く、濃く、貪るよつ。つい欲する

気持ちをそこに注ぎ込むよつに。愛しいなどとつよりも情欲のそれだから

愛しいなどとつよりも情欲のそれだから

息の苦しきなる頃に唇がゆっくりと離れた。

Jの口付けの後、決まって言つのは。

「また来る」

そう言つて腕の解かれて立ち上がった。

「まだ時間あるよ……？」

「お前がゆっくりすればいい」

男は笑つて、少しの乱れも残さず衣服をただす。そうして何の後腐れもなく行つてしまつた。

分かつてる。

「抱きたくて、時間を取つたんだよね……」

女は一人やる瀬なく笑つた。

四十一・欲心

「お前は嘔吐きただな」
「まあ、それなりに」
「一三度と言わねえ。だが何度逢いに行つても頷いてはくれねえ……」
「え、嘘。まだ抱いたことのないんですか、遊女を？あれほど通つておいで？」

男は余程驚いたのか素つ頓狂な声を出すが、若干沽券を傷つける台詞はわざとか否か、それから勝手に得心したよつて頷く。

「流石若、狙つていたのは太夫ですか」

「どうなんだ？いやだがあの可愛さならそつかもな」

「可愛い、ね。太夫なら一応の年はあると思いますが」

「いや、小娘だ。しかしどうだらう、女とこうのは年の分からない生き物だからな」

「奥様とかね。美しさが氷中に閉じ込められてこりよつだ」

「お前、俺の母を変な目で見てるんじやねえだらうな」

「若よりはましです」

「どういつ意味だ」

「変だと思つているでしょ」

「確かに思つてこりな。身の回りの女に限つてどこか普通の女と違うよつだ」「皆違つんですけどね。良く見てこりから他と違つて見えるんです」

「ほお。相変わらず知つた口を聞くな。影郎風情が」

「それも段々に口癖と思えば愛嬌のありますね」

「本当、お前は憎たらしこなあ。雪と違つて」

「若に愛でられる筋合にはあつません」

「毎の喧嘩でもするか」

「食後の運動みたいになつてきましたね」

「ほきほきと拳を鳴らして薄つすら不敵に主従は笑う。

「女つて、好いていても男に抱かれるのは嫌なのか」「え」

半分開いて唇から紅茶がしたしたと流れ落ちる。「あ」と焦ったのを合いの手のようにぽんぽんと白布で拭われていた。

「ごめんなさい。有難うござります、旦那様」

「天が悪い」「ふう」と相変わらず嫌そうな目を自分に向ける。「八つの茶中に品のねえな」

「るりは旦那様がとても好きなので抱いてただくのはとても嬉しいことです」

恥ずかしげもなく「ぐ生真面目な顔で答えたのを男は笑つて見る。「どうだろうな、お前は抱かれることそのものが好きなんじゃねえか」

「そんなことはありません。るりははしたなくないです」

「良く言つぜ。暫く抱いてやらないと寂しがつて欲しがるくせに」

「そ。旦那様、そんなことはないです! 天が勘違いをしてしまいます」

「はいはい」必死に言つのを男は笑つている。

「欲しがつて……」

「生娘は割合難いぞ」にやりと笑つて言ひ。

「雪は生娘か」

「な、」女は言葉の詰まる。

「どう思うの?」

「生娘なんだろ?」

「……天は?」

「お前が初めてだ」

「まだ抱いてないのに」ふ、と笑う。「やつぱり天、初めてなんだ」

「可笑しいか」

「ううん。前は全然女の子に興味無さそうだったもんね」

「早く抱きたいなあ」

男は女を寄せて言ひ。

「触つてみる？」一寸頬を染めて言ひ。

「いいのか

「触るだけ」

そう言つて男の手を胸の上に被せる。

「分かんねえ。お前は重ね着をしそぎだ。雪とこづくせに寒がりか」「もう。お洒落でしょ、これは」

「別に俺は胸が無くてもいいから気にするな」

「失礼ね。決め付けないでよ　じゃあ、仕方ないわね」

そう言つて女は何枚か下の着物に手を入れさせる。

「お、」

男の手が胸の輪郭を確かめるように腕を作る。

「見かけによらずあるな」

「どういう見かけよ」

「しかし思つたより固いものだ」

「だから着物でしょ」

そう言つて今度は肌衣一枚の上に乗せる。

「柔らけえ」

「ほら」

外そうとしたがしかし男の手はそのまま女の胸の質量を確かめる
ように下から持ち上げる。

「ちよ、ちよっと」

「ある」

「やつぱり嬉しいんだ」女は笑う。

「俺の手に丁度いい」

そう言つて揉み出す。

「あん」女は声を漏らした。「やん、夭……」

「面白いな」そう言つて止めないどころか余計に緩急をつけて揉む。

「だ、だめ……ん、」

唇に吸い付かれた。

「あ、ふ……んん」

口角を何度も無く変えられてから中に男の舌が入つて口内を味わう。乳房は揉まれている。

初めてなんて、信じられない。

男というのは女を相手にすれば本能で扱いを知つてゐるものなのだろうか。

ああもう駄目。もどかしい

唇が離れる。唾液が自分の口を伝つてするのが分かつて官能的な気分になる。

「天……」潤む瞳で女は男を見上げた。目の合つたのにしかし男は女の肌蹴た胸を正して立ち上がる。

「さて、帰ろうか」

「いいの?」

「江北見えても理性を保つのは大変なんだぜ? そう長くござるか

笑い、いつもあつて飾り物の奥の床を背にして男は行く。またぽつんと女だけが残つた。

「幻滅するよね」ぽつんと呟く。「天は綺麗過ぎる」

「私は遊女なのに」

決まって心に穴の空いた気持ちになる。

「お前はまた豆に貢ぐなあ」

感心しているのか馬鹿にしているのか腕を組んで微笑している。ち、と舌打つ。女物の着物一揃いを届けさせるのを見られたのだった。

「遊女に惚れたのか」くすくすと笑つてゐる。「難儀だな」何か厭

わしげに目を瞑つた。

これが。

影郎が色のあるとか言つていたのは。確かに憂いのある表情が何か女の心を買ひそうだった。

しかし関係ない。そつそと行くに越したことは無かつた。

「梅の花咲く春の頃、か

ふ」と男は笑う。

四十三・遊女

「また今日も？」

影郎は身なりを整えている若田那に茶化した口調で声をかける。
「早く会いたい。夜を待てない」

「若は本当見事に引っかかっていますね」

「何に」

「遊女に」

「遊女じゃねえ。雪だ」

「ちょっと入れ込みすぎじゃないですか。遊んでも遊ばれぬのが粋ですよ」

「遊んでる訳じゃねえ」

「若はね」

「雪が遊んでいると言いたいのか」

「雪さんが悪いんじゃなくて、遊ぶのが遊女の仕事なんです」

「雪は違つ」

「でも結局実を見れば若は遊女に金を落としている訳でしょう。裕福なのをいいことに湯水のように親の金を使って、こゝように焦らされ足繁く通つていて。世間じゃそれをいい鴨とこうんです」「雪を愚弄するな」

「愚弄じゃない、いや小娘と言いますが遊女としては大したことです。若は純粹で騙されたと思うかもせんが、遊郭といつのは男女ともそういう遊びを承知の上の付き合いなんですからどうか責めないでやつてください」

「違う」

男は背を向ける。

「約束はしたんですか？ 売れっ子ならいきなりいつても駄目ですよ」

「雪は俺だけだ」

やれやれ、と少し哀れんだ目で背を見送った。

まあ、女を知るのも大事な勉強でしょう。

「もう二度も通わせて置いて、酷いじゃないか。今日はてっきり床に入ってくれると思って来たものを。

生き地獄に落とす氣なら初めから袖を振つてくれた方がましだった」「だつて…どれほど私を好いてくれているのか確かめてからじやなきや嫌なんだもの」

詰る男に、女は恥じらう娘の瞳で見上げる。

「よく言ひ。お前は父子程年が離れた金持ばかりを客に持つと聞くぞ。若い男はすぐに破綻してしまうと知っているんだろう。娘というのに末恐ろしいな。お前はきっと都一の遊女になるぞ」

笑う男に娘は少し拗ねたように頬を膨らます。

「でも私が袖振らないのは本当に少しなのよ」

「どうだか」

「ねえ、じゃあ特別に次は……」

女の背伸びに合わせて男は少し膝を折る。肩に手を置いて、ひそかと女は囁くように何か耳打ちした。男は思わず口元を綻ばせる。

「本当か」

「その代わり、鞍替えなんかしたら遊郭に登あが樓れなくしちゃうから

「恐い恐い」

「私を好きなら問題ないでしょ？」

女の顔は無邪氣で悪戯気だった。男は水ぼったい果実のような唇を見つめる。

「ああ、待ちきれない。今夜は駄目か」

「夜は駄目」

「なんだ、やはり他に男がいるのか。俺よりもいいのか」

「夜はいつも空けているの」

女は答えにならない答えを返して袖を口元にふふふと微笑する。それは途端に艶やかな女の顔つきになり、男はぞくりと背を粟立たせて女の手首を掴み体を引き寄せる。

「約束、本当だな」

「どうしようかな。強引な人は苦手」

女はやはり蟲惑的に笑いながら、抱かれた体を抵抗はしない。

「分かった、分かった、今のはなしだ。ただ俺はそれだけお前を好いているということだ」

そう言ひつと男は突然に女の水ぼつたい唇に吸い付いた。

「ん……」

女は弾みで身を捩じつたが、がつちりと肩は押さえられており、巧みに蠢く男の舌に次第に応えていく。

.....

「はあつ、は、あ……」

随分長く貪られて、唇を離されると同時に女は乱れた息を吐く。雪のように白い頬は淡い梅の花の色に染まっていた。

男はそれを見て上機嫌に笑う。所詮は遊女。幾らお高く止まるうと、高い金を払わせているのだからこれ位のことには応えられなければ買われる価値は無い。

小娘の身でそれを分かつてしているのが可愛いところだ。

「ではな、小雪」

楽しみにしている。

お返しとばかりに女の耳に囁いて、男は漸く女を離して去つて行く。

人気の小娘と詫つからその手腕を拝見するかと遊んでいたが、やはり主導権はこちらが握らなければいつまで立つても上手く躱されるだけだ。

男の口元は心なしあがる。

今までの分、次で元を取らせて貰おうか。

ほくそ笑んで木を回つたところで、どん、と人と肩がぶつかつた。

「おつと、すまない」

「…………」

答える代りに若い男は睨み付けてくる。その殺氣立つた眼に、男は今度してにやりと笑つた。

あの女を買えずに袖を振られたんだな。無理もない。若造如きが、此所に登樓するだけでも大したぼんぼんだ。

「いいものが見れて良かつたな、坊主。覗き見代はただだ

から、と笑つて背にした。

四十四・失恋

座敷、男と遊女が居た。

対面しているが不自然な沈黙だつた。いつもは待ちきれないといばかりに合わせに手を入れたがるのに、何か男の様子がおかしい。最近は見なくなつていた仏頂面だが、それも前に増している。

「天……どうしたの、黙っちゃつて」
耐えかねて、とうとう女が口を開いた。

「……何でもねえ」

それは妙に心をざわつかせた。線香花火のぼてりと膨らんだ緊張のようだ。

「なんなの？」

この、なにか叱られる子供のような対面は。
この場に似つかわない張り詰めた空気につい苛立つた口調になってしまった。

「分かんねえ。　帰る」

沈黙の次にやつと口を開いたと思つたら男はもう立ち上がつた。
「ちょっと、待つてよ。 それじゃ分からぬ」

「お前の方が分からねえ」

袖を引っ張つて振り向いた男の顔にはつとした。初めて見る。
「天……？」

「俺だけじゃなかつたのか、雪」

その余りに物苦しい表情に言葉が出なかつた。

「その唇……幾人の男に好きだと仄めかした？ 縱度男に口を吸わせた？」

「何……何で急にそんなこと」

「俺と睦みあう前に、その潤した瞳をどんな男に向けなんといつ名

を呼んでいた？

「天、」

「どれだけの男に肌を晒し枕を共にした？」

「天！」

「なんだ……」

暗い目の男に気圧されて何も言えず、ぐ、と黙る。

「私……遊女なの」

ただ泣きたい気持ちでそれしか言えなかつた。願えるならばその胸を貸して欲しい。

「そうだな……」

しかし男はどこか諦めた微笑で答える。

「天は此処をどこだと思っているの？ 私は親の顔も虚ろな小さな頃にここに売られてきたの。生きる場所なんて此処しか知らない。ここで育つてここで水揚げされて、遊女として籠に入つているの。金で男に身を売つているの！ 天はその客の一人に過ぎないの！」

爆ぜた気持ちが止まらない女の声は震える。

「天は……天は綺麗だから分からぬよな。こつして生きるしか知らない。こうして待つことしかできない。

男を受け入れることでしか生きていけない……！ それ以外の生き方なんか知らない……！ 前は天といふと普通の町娘になつたような気分になつた。他愛もないお喋りで、憎まれ口を叩いたり、天は来る癖に全然体には興味の無くて、私を遊女として扱わなかつた。

だけどもう今の天は私の体を求めるばかり……高価な贈り物をすれば心も買えると思つてゐる。他の男^{ひと}と一緒に。でも私は遊女なんだから当然よね

「そうか、」

「興冷め？」無表情の男に女は笑う。

「ああ」男は立つた。「帰る」

「そう」

涙を拭いて、女も立ち上がる。

いつも涼し気で余裕気だった男は、今は日の光りも暗く、無氣力で投げやりな倦怠した空気を漂わせていた。

「なあ雪、あの時俺を好きだと言つたのは本当だつたのか

「本当、だつたよ」

「そうか」力ないまま微笑する。

「俺も本当だつた」

籠を出て行く男の背に向かつて叫ぶように女は言つ。

「裏切られたと思っているんでしょ。だけど遊女なんかと本氣で恋をしたと思った自分の馬鹿さも笑つて何も責められないんでしょ」何も返さなかつた男の姿が消え、女の頬をはらはらと涙が落ちる。

「だつて好きな人の前では娘でいたかつた」

*

「振られたか」「

くす、と笑われた。

「振られすらしていねえ」

「許婚を連れてくるといつ日取りは取り消していいんだな？」
無言で通り過ぎた。

さらさらと筆の流れる。沈黙に耐え切れずに口を開く。

「若…？」

「なんだ」

そう言つてはらりと頁を捲る。文字を追つて視線は上げない。

「随分勉強熱心ですね…？」

「ああ、大分遅れてしまつたからな」

男は薄く笑う。

「遊びすぎた」

「 そう氣を落とさず」。ほら、次は貴族の女にすればいいじゃないですか」

「もういい」

さらさらと。一層、けれど今までと何か隔絶した大人びた表情をしていた。

「徒馬鹿ただだった」

「千次様、千次様、天のお嫁さんはいつに来ますか。るりはお菓子をたくさん用意したいのですけれど」

「聞いてやるな」

「え」

「初恋は男の愚かで実らぬものだ」

「旦那様…？」

「俺は別だけどな」

微笑んで、男は不安気な女の頭を撫でた。

四十五・縁側の守娘（前書き）

章末闇話。

四十五・縁側の子守唄

ねんねこせ　ねんねこせ　ねんねこやまの赤犬こ
いつぴき吠えればみな吠える　ねんねこせ　ねんねこせ

ぱん、と白い布が翻る。

一列に洗濯物のかかつたを物干しを見上げ、嬉しそうに微笑んだ。

「……何の歌」

振り返ると、縁側に座つた小さな息子がいた。

「子守唄ですよ、夭。お母さんはたくさん歌えます。たくさん覚えたのです」

笑顔を余計に綻ばせて、空になつた籠を持つてその傍に座つた。
それから、ん、と膝に抱き上げて、腕の中に抱える。一緒に青い空
を眺めた。

「父さんで、どんな人」

「とてもお優しくてとても立派な方です」

「次、帰つてきたらわ……」

「はい、夭」

「やつぱり、いいや」

「夭、何でもお母さんに言つてください」

「習字……母さんから」

「はい、夭の御文字をお父様にお見せするのですね。とても感心な

さると思います。天はとても上手なので」

「そういう訳じゃねえけど。 母さんは見なくても褒めてばかりいるから、本当が分からねえし、」

「天は本当にとても上手いのですよ。きっと天は旦那様のようだ」

立派な方になります。お母さんは毎日とても嬉しいです」

「ふーん……母さんは、寂しくないのか？ 僕と二人で」

「旦那様も一緒にいます。旦那様と天とお母さんと、ここは三人のお家なのです」

「三人、」くす、と笑う。

「三人です」ふふ、と笑う。

本当に、嘘みたいに幸せそうに笑う。

俺で寂しさが紛れると言つのなら。 そうして笑つてくれ
るなら、俺は。

「 父さんのように、なるよ」

母親と青い空を眺めた。
子守唄が聞こえる。

ねんねこせ、ねんねこせ……

四十六・添寝

「天様 相済みません、小雪は今夜は別の、」

「誰でもいい」

男は構わずくぐる。

「小雪以外の女なら」

*

蛙のようだ。

ひつくり返る女を見て、思った。其れは卑猥な水音と耳障りな嬌声を上げる。

涎。汗。粘液。痙攣。

ああ、浅ましい、浅ましい。
快樂とはこんなものか。
夢にまで見た甘美な世界は。

朧月夜、行く長い廊下に白く浮かび上がっている姿がある。

「天、」

微笑んだ。華奢な体で包むように腕を背に回してくれる。

「天はとても辛いのですね。お母さんには分かります」「小さな体のくせにほんほんと、あやすように背を叩く。

「甘えていいのですよ、天」

冷え切った体だった。こんなに夜更けになるまで、一体いつからあの廊下に立っていたのだろう。

「母さん……」

「お母さんが慰めてあげますよー」

微笑む声でそう言つた。胸の中のものが温かかった。

「なんなんこひりよー。おこひりよー。」

月が格子に落ちる布団で、母親が添い寝をして歌つてゐる。

「母さん……」

白い着物の体をぎゅ、と抱いた。抱きついた。

「何ですか、天？」

「俺　この家を出てもいいか」

銀色の頭を今更不思議に思いながら見つめ降ろす。かぐや姫だと影郎が言つていたが、丸く銀の光りを反射して月の様だ。

「俺は当主の器じやねえ」

田奥が熱くなるのをぎゅ、と抱いて耐える。

「馬鹿で、馬鹿で、本当に浅ましい。塵となりたい」

「天はいい子ですよ。お母さんは知っています」

「悪い、そういうのに疲れた。俺は親父の様にはなれねえよ」

「天は天です。天はどうしたいのですか」

「勤めもせずに有る金を使って、何も考えずただ遊郭で女を抱きた

い」

「それでは天はこの家にいたいのですね」

「いたくなえよ。だけど出て行く程の理由もねえ。ああ浅ましい。もう何もかもが厭だ」

「天はとても苦しんでいるのです。　とても好きだつたのです

「違う」

ぐ、と腕に力がこもつた。

「色欲だつたんだ。だつて有り得ねえだろ、遊郭の女に本氣で惚れるなんて。遊女に惚れるなんて間抜けで好色な男だけだ。ただの客

なのに自惚れて本当に阿呆だ。貢ぐたびに阿呆だとほくそ笑んでいたに違いない

「そんなことはありません」

「母さんに何が分かるんだよ」

「お父様もとても苦しみました。苦しいと人にも自分にも辛く当たつてしまふのです」

「親父が？親父になにか酷いことをされたのか」

「それは仕方の無いことだつたのです。旦那様はそれで今でも御自分をお責めになります。旦那様は悪くないのであるよりもそれで辛くなつてしまつて、けれども辛いと旦那様も余計辛くなつて、一人で酷く哀しくなつてしまふのです。けれど一人で哀しめば不思議でその分深く繋がるのです。だからとても幸せになるのです」

「……よく分かんねえ」

「天、お母さんもとても怖かつたです。全部うまくはいかないかもしません。とても哀しいことの大きくなるかもしません。けれどお父さんは諦めなかつたのです」

「結局、母さんは親父が一番に好きだつてことだら」

「あ、と溜息笑いをして閉じ込めていた腕を離した。

これも、親父のだ。俺には結局何もないと。

四十七・池底

月夜に水を遣る男がいる。

花の根元、夜の土に水を遣り池には朧月と男どが照らし出されて
いた。

廊下を行く息子の姿に気が付いて、ふ、との口元を穏やかに緩
める。

「天、こっちに來い」

「……」

無愛想に、行く。

詰るなら詰り嘲るなら嘲ればいい。

「憐れな男だ」

仏頂面のまま庭に降りてきた自分を見てくすくすと笑った。

「ど」が俺似だ。しかしこれで汚名も晴れるだろう

上機嫌に笑うのははそういう理由か。

「俺が慰めてやろうか、天？」

冷たく長い指が頸に触れてくいと上げられた。防ぐ間もなく蛇の
前に喉元をさらしていた。見下ろす切れ長の黒く冷たい眼。口元の
微笑は人の首の刎ねられる時さえ変わらないだろう。

「可愛い息子だ」

くすりと笑んで 頭にぽんと手が乗つた。

有り得ない。何で…今まで一度も

「な……」

ばき

月があつた。朧月。視界は夜の空のみ。冷たい池水にふかぶ
か浮いている。氷と蓮も浮いている。

くつくと笑う声が聞こえる。遂にあつはつはつはと聞いたことのない程愉快そうに笑いだす。ばしゃんと盛大な音を立てた波も搖らいで、ふかふか仰向けに浮いてる。

「どうやら殴り飛ばされたらしい。よろけて落ちたのではなく、立つていた場所からこの池の真ん中まで一瞬で。本当、有り得ねえ。

「ざまあねえな、天」

一しきり笑うのに満足すると、さう一言残して遠ざかつて行き、最後には物音が消えた。

油断した。

投げるとき、力の抜けた人間は呆氣ない程軽く飛ぶが、ああ、そういうことだ。それにしても親父に手を乗せられただけで動搖したというのが涙が出るほど悔しい。頬がつるんと熱い。体が冷たい。水をすつた衣服が重たい。

肺から息を吐き出した。それとともにぶくんぶくんと体が沈んでいく。

冷たく冷たく、頬だけ熱い。いや、本当は体も熱いのか冷たいのかもう分からない。

本当、ざまあねえ。

このまま水を飲めば死ぬだろう。生きようとしなければ死ぬだろう。死んだところで親父は絶対に何の咎も抱かない。

生死を選ぶのは、俺の意思だから。

+

「旦那様、天はどうでしたか」「ああ、慰めてきてやつたぜ」「有難うござります。天はとても喜んだと思います」「そうか?」

「天は本当は旦那様に習いたかったのです。小さな頃はお父さんがどんな人かたくさん聞きました。お父さんのようになると言いました」

「お前は罪な女だな、瑠璃」「え」

「男はな、母親の求める男になりたいと想つちまうんだ。だからあいつがなりたいのは、俺じゃなくてお前が見ている俺だろう。しかしそんな人間はいねえから絶対に叶わねえ。憐れな奴だ」「なにか…るりの所為なのですか」

「ああ、そうだ」

妖艶な微笑。

「美しさは罪だ」

女の白い手を取つて胸に引き寄せた。

「さあ、暖め合おう。外は寒かつたな」

女は乱れてただの獸になる。

心内で浅ましさを嘲笑う。笑う度にささくれた氷柱わらが五臓六腑を突き刺していく。

このような手酷い扱いを受けても女は嫌と言わない。言えないのか。

あいつも。

他の男から同様のことをされて、それでお前は何も言わず男にされるままなのだろう。あの時もあの時も、初々しい娘の振りをして、俺が帰れば他の男の情婦となっていたのか。俺がお前のはにかんだ笑顔を懸想をしている間、お前は他の男の前で涎を垂らしていたのか。

燻る怒りは收まらず、爆ぜる。爆ぜ口を求める。ただぶつけるだけ。

汚れている。

こんな汚れた行為で人ができるというのか。

どこにいる人間も、貴族も坊主も賤民も、等しく汚れた肉の塊だ。この自分の身でさえも。

ああ、浅ましい。

その媚態も嬌声も、嘘。乱れた様も、嘘。
獸となつてているのは男だけ。嘲笑つてている女の側。

「天が元気になりません…」

「元気じゃねえか。三日も空けず遊郭通り、いや不健康と言えば不健康だな。俺も夜街に出はしたが淫事に耽つていた訳じゃねえ。夜の活気が好きだった。ここは割と重要なからな?」
女は聞いているのか顔は曇つたままだつた。

「天の夜遊びを止めさせてえのか?」

「そうではないのですけれど」

「もう添い寝に行くのは辞める」

「え」

「お前が慰めるから甘えるんだ」

「けれどおりはお母さんなので…放つて置けません」

「俺は近頃放られているな。俺の妻じゃねえのか」

「ごめんなさい」しゅんといつ。

「夜のお勤めは?」

「今夜、」

生真面目に言う女に[冗談だ、と男は笑つた。

「近頃はお前を腕に包んで眠るだけで満たされる。お前はどうだ?」
「るりも、旦那様の腕の中で眠るのがとても幸せです」

くすと笑う。

「俺の抱き枕を返して貰おうか」

来なくなつた。

いよいよあの母親にすら見放されたか。影郎もいるのかいないのか姿を見せない。一人ベッドにござりんと仰向ける。

抱き心地が良かつた。ふんわり良い匂いのしてすっぽりと腕に収まつて柔らかく、肌は滑らかで髪は月色ですらすらとして、そして

温かつた。ずっと抱いていたかった。浅ましい気持ちは沈んで、ただ腕に抱いて心が安らいだ。夜に地獄六道を彷徨つこともなく眠れることができた。まるで菩薩を抱いているようだった。

あれが欲しい。

せりせりと、墨の匂いは心を落ち着かせる。そのまま何も無かつたように忘れていけそうだった。しかし発作の如くに胸は搔き鳴られる。遊郭を踏んでまた心は般若となる。一度と見たくない。いや一日だけ。

この無意味な繰り返し。無意味な行為。なのに何故来てしまう。何故自らを堕としめる。

雪……

障子越しの雪明り、畳に一枚布団、男と女
違う女を腕に抱いて、胸の内で呟いた。ああ、苦しい。一体何をやっている。あの女は遊女。遊女に過ぎない。夫婦になるなど懸想してなんと幼く世間知らずで馬鹿だつたんだろう。ただ情欲と混ぜこぜにしてそれを恋心と勘違いして。忠告を受けていたのに違うなどと言い張ったあげくがこの様だ。

寒くてこの布団から出られない。温かくてこの布団から出られない。

また今日も、女を抱いて眠りに着ぐ。

い。

四十九・早川

「若、
家来が立つていた。

「久しく顔を見せなかつたな」

「前の話、つけて来ましたよ」

「なんだ、前の話？」

「話を聞くつて話です。まあ付いてくればいいですよ」

物知り顔で言う男に、まあどうでもいい、気晴らしにかと思ひ頷いた。

+

「いやあ、これがあいつの息子か！ そつくりだ、そつくりじゃないか」

しきりに歎声の声を上げるのは、

「おつとすまない、早川光次郎 君の親父さんの友人だ」

唯一無一の、と言つて片目を瞑つてみせる。早川家は由緒ある上流貴族に名を連ねているが、経済力の淘汰にさらされて前代が故人となつた際に没落の危機にさらされた貴族だ。親父の友人というのは本當か。早川は規範から敢えて外れるような奔放な家風があるが、それにしてもこの目の前の男はなんというか、軽薄すぎる。

「おい、それは疑いの目だな？ 僕みたいなのがあの貴公子と付き合ひを持つ筈がないと？」

あの親父をびくともしない巨大な壁石だとすれば、この男は石ころのようにころころ転がつていけそうで、その姿の全てが隠れず見えるようだ。

「いえ、父の御友人にお目にかかり、恐縮をしてしまいました」

「いや、いい、いい。やつくなるな。一昔前のおこつのよつで飯味が悪い」

「親父の……若い頃?」つい呟く。

「そうだ、懐かしいな……よく一人で外に繰り出しては博打をしたものだ」

成程悪友といつやつか。もしかしたらあの外面はいい筈の父親を夜遊びにひきずりこんだのはこいつか。

「それが女ができた途端にぱたりと止んで付き合ひが悪くなつたと思つたら、今じゃ完全にもう、忘れているんじゃないかという程顔を見せない。この共に戦線に挑んだ盟友を!」

「父上は、遊郭には行きましたか」

「勿論。一時期は酷かつたな。婚約者がいる分際で芸妓どころか貴族の女にまで片端から手を……」

おっと、とそこで止まる。

「知っています。父上は勝手で放蕩者です」

「やうかそうか、いやそうか。きっとあいつは息子に嫌われるだろうと思つていたがやはりそうか。世界で一番持ちたくない親父だよな」

「唯一無二」と言つておいて散々ない様で納得してから話す。

「まあそれでな、異常に女に持て囃されたところを来るもの拒まず」という接配で節操が無かつた訳だ。最低だろ?男として

ふん、と何か恨みが込もつてゐるようだつた。

「婚約者って……母さんの前に、決まった人がいたんですか」

「ああ、いた。全く、申し分のない許婚がいながらないがしろにして遊び呆けて しかし遂にあいつの心を射止めたのが君の今のお母さん、瑠璃ちゃんと言う訳だ。あいつの傍仕えだつたんだが、本当に愛らしかつたな。手の一つや二つ出したくなつて当然だが、それにしてあいつの惚れ込みよつには驚いたものだ」

しみじみと男は自分で頷いた。

「いい女は男を変えると言つが。あくまで淀には沿つて貴族・霧崎・

跡継ぎ、家家と言つていたのが一介の傍仕えを妻にしたんだからな。全く普通じやない。貴族たる特權の奴隸制を崩壊させたのが貴族一の貴族で、理由は偏に奴隸の女を妻にしたいから、だ。これによりあいつの華々しき傲岸不遜も粹を極めたとも言えるだろ？

「奴隸……！？」

「え、ああ…なんだ、まさか知らなかつたのか」

男はしまつた、という顔をしたが、ままよと思つたようだ。

「奴隸だつたよ、瑠璃ちゃんは。それも『扇子』っていう特殊な奴隸でな、あいつの小間使いだつたんだ。　そう、あいつの所有物だつた。あいつはそれに嫌気が差して制度をぶち壊したんだ」「窓の外の空をぼんやりと見遣る。

「大勢の人が死んだ　瑠璃ちゃんがどう思つたのか知らない。たがあいつは一層厭世的になつた」「とても怖いこと

『二人で哀しくなる』

月の下儂げだつたのを思いだす。親父はそんな素振りは一切ないが。

「……」

「衝撃が大きかつたか？母親が元奴隸で」

「別に…俺は、」そう口で答えても白々しく、頭は整理のつかない混乱に陥っていた。

それから混乱に陥りながらも混乱に陥つていて自分に嫌悪を覚えてきた。

母だ。それで身分がどうだつと何の関係がある？

「当然だ」男は微妙な表情で言つた。「あの家では平民だつて『卑しいもの』だから尚更だ」

「いや実際あいつが変なんだよ。　俺もさあ、いたんだ、奴隸の子が」

何故だか自嘲のような笑みを浮かべる。

「好きだとかそういうのは分からぬ。どういう気持ちで見ていた

のか。奴隸じゃなくなつて、どう接したらいいか分からなくなつち
まつた。やはり奴隸として見ていたんだなあ、と思った。可愛いと
思つていたんだが、あいつのよつに堂堂と妻にするなんてことはで
きなかつた。どんな荒波からも守れる自信はない。そこまで愛して
いるのかというと分からぬ。……なんて深くも考へない内に、あ
の娘は俺に見切りをつけて出て行つちまつた。止める理由もない。
あの子は逞しいから、どこでも生きていけるだらう」「うう

男は束の間瞳を閉じてから、濃茶色の目を薄く開いて微笑む。
「俺は結局、普通の嫁を貰つて普通に楽しく生きたかつたんだ」
しかしどこか寂しそうな微笑み方だつた。

母さんが、奴隸……

信じられない。花のよつなあの人人が。貴族の娘にはないよつな滑稽などころがあるがそれは愛らしさとも呼べる。とにかくも信じられない。

しかし信じられないとはほどうう意味か。

やはり奴隸を卑しいものとして見ていたのか。いや違う、いや違う。町で見たあの小男 元奴隸だつたらしいあの男が卑しかったのだ。それで並べて奴隸に嫌悪を覚えてしまつたのだ。それだけではない。弱い者を集団で虐めそれに笑い声を上げる あの市井のもの達にも嫌悪を感じた。

貴族が尊いなど思つていらない。貴族といつのは見てくれの白粉の塗り固まり、それに嫌気すらさしていた。しかしそれは忍耐だ。倫理というものを教え込まれそれから外れないようにすることで、見てくれを保つっている。思つたことをそのまま行動や口に出すなど、そんなことをすれば表面に醜い亀裂が走る。その亀裂を表に出せばそれを割つてしまおうと輩が出るとも限らない。表に出さずに関係を保つといつのは忍耐のものでそれは美德と言つてもいいのではないのか。

いや違う、違う。どちらがどうだといつ問題ではない。

「天?」

きょとんとしかしどこか心配気な顔でその人が見ていた。

「むつかしい顔をしています」

母親手製の洋菓子を親子三人で食べるという恒例の茶会。父親と同席など胃がむかついてきて美味しいものも美味くなくなるというものだったが『同感だが我慢しろ、瑠璃の望みだ』と言われ渋々と席を同じくしている。

「何かお悩みですか。お母さんにお話し」

「光次郎に会つたんだつてな」恐らくなぞと遮つて、男がかすりと微笑んだ。

「元気だつたか」

「まあ。　変わつた人だつた。貴族であるといふことも忘れてしまつ」

それを聞いて、やはりそつかとくつくと笑う。割と上機嫌らしい時の笑い方を見るに、やはり本当に親しい友人だつたのだろう。

『千次に殴られた?』

面白そうに、興味津々という様子で聞き返してきた。

『ほお。あいつも一丁前に親父振りやがつて。俺もあいつを殴つてやつたものだ。全く良き友だつた。誰も殴ることできなかつた可哀相なあいつの為にあいつの捻くれた根性を叩いてやつたんだからな』

『いや、単に笑いものにする為だつた』

『いやいやあいつは無駄なことを一切しない。笑いものにされたなら笑いものにされたことに意味がある筈だ』

『あいつは人を嘲笑うのが趣味なんだ』

『まあ俺もそう勘違いしていた。いや確かに勘違いだとは未だに言いい切れない』

結局悟す訳でもなくかに思い出話をしだすような風だったので、さつさと暇^{いとま}せて貰つて出てきたのだった。

「御友人様に、」母親もほっこりと笑顔になる。「ちよは元気でしたか」「ちよ?」

「あれはあの家を出て他所に出て行つたそだぜ」

親父が氣を引こうとするように母親のフォークを持つ手を取つて自分の口にケーキを入れた。

「当然だ、あんな奴のところに義務もないのに居たいものかくすくす愉快そうに笑う。

「自ら解放に尽力して逃げられるなんて皮肉だな」

母親は浮かない顔をする。本当に相手の心を慮らない奴だ。「まあ感謝はしている。俺達の愛の為によく頑張つてくれた」そう言つて女の手を自分の口元に持つてきて軽く口付けた。

「身分は関係ないか」

ぱつりと言つと、父親はくすくす笑つた。

「本当に馬鹿だな、お前は」

依然どういう意味なのかはつきりとは分からぬ。

*

五一 * · 自慰

「おやすみ、瑠璃」

半身起こして額にちゅ、と口付けると同じ布団の中に身を沈めた。ちよいと袖を引っ張られて、ん？と片田を開く。

「あの、旦那様……今晚も、宜しいですか？」

「何が？」

「それは、その、なんでもないです。　おやすみなさいませ、旦那様」

「ああ、おやすみ」

しどりおどりして隠れるように布団に潜つたのを可笑しく思いながらまた田を閉じた。

+

隣の小さく膨らんだ布団が時折寝返りを打つてはもぐもぐとしている。

「眠れないか」

「あ、旦那様……起こしてしまいましたか？」

「お前の無防備な寝顔を見ないと眠れねえ」

焦つて申し訳なさそうな顔をした女の頬を撫でると、熱が出たようになその頬を染めてもじと足を擦り寄せた。

「白湯を持って来ようか」

「あ、大丈夫です、旦那様」

「遠慮はするな。それとも卵酒か、ああそうだ、お前の好きなあの甘い飲み物……ココアでも作つてやる」

「違うのです、旦那様。体は温かいです」

半身起き上がった裾を必死になつてはつしと掴んでくる。それから視線を自分の臍に向き、顔を赤くさせた。

「反対に、体の熱くて……」

「お前も盛りだなあ。俺の盛りの過ぎた頃ことは年差があると一度しねえな」

笑うと、女はきゅと腰を結ぶ。

「盛つてはいません」

「そりか？」

背筋に一本指を這わせるとしかし細い体をぐくぞくと身震わせる。その手で尻を円を描くように撫でると、吐息を漏らして潤んだ声を出した。

「あ……旦那様」

「ほり、盛つてるだろ」

手を離すと物足りなさげな息を漏らしたが、しかしそれから慌てて首を振った。

「るりはそうではありません」

頑な態度に口元は弧を描き、着物の裾を捲り上げる。

「あ、」

露になつた白い腿ももを開帳させると太腿をくつつき畳ませようと必死になるが、抵抗は虚しかつた。せめて見えないよつこと恥ずかしそうに足の間を両手で覆う。

「どうだ、瑠璃。湿つているか」

「るりは湿つていません」

両足首を広げたまま拘束して聞くと、自分の恥部を押さえながら首をぶんぶんと振つて答える。銀色の髪が散らばり乱れた。

「そりか？」

女の手をなんなくどかすと、そこに自分の指を宛てた。少し探つてから離すと透明で粘つた糸が引く。女は顔を真つ赤にさせて手で口を覆つた。男はくすりと笑う。

「あ、あ……」

「湿つてるんじゃない濡れてるんだな？ 隨分と淫乱だ」

「るりは……いんらんでなくて……」

「気にするな」

ふ、と笑つても「も」言つ女の頭を撫でた。

「お前の体をそつしたのは俺だからな」

「旦那様……」ぎゅ、と服にしがみつく。「大好きなのです」

「るりは千次様がとても好きで……だからなのです」

「分かつてゐる」

笑うと女はぽつと頬を染めた。

「お前に新しいことを教えてやるわ」

「旦那様のお役に立つことですか」

「お前の役に立つことだ」

「え」

+

胡坐の上に座らせて、その姿が鏡に写るよつに向いた。抱きかかえた腕の中できょとんとしている愛らしい女の姿が映つている。

「旦那様……？」

ふんわりと抱きしめられて男の頭が自分の首につづまる。黒髪がくすぐつた。そつと耳に心地よい低い声が呟く。

「酷く可愛い……俺だけの瑠璃」

「んつ」

唇に吸い付かれた。すぐに離されると息継ぐ前にまた口角を変え合わせられる。何度も、何度も、焦れつたくなる程に、浅く何度も啄ばまれる。

「ん、ん……ん」

唇の柔らかさを堪能してから離された。上気しだした頬を撫でて男は鏡越しに聞く。

「瑠璃……先ほどは何と言つた? もう一度言え」

「千次様が、大好きです」

「「Jの世で一番?」

「一番です……」とろんとして鏡の中の黒い瞳に取り憑かれていた。

「Jの体と心は誰のものなんだ?」

「千次様のものです……るりの全部は千次様のものです

「ああ、なんて可愛い……」

男は銀の茂みの奥の股をまさぐると指を挿し入れた。

「あつ……」

くちゅくちゅと男の指が小さくかき混ぜている。

「「J」もか」

「あつ、そこも…そこも…で、す」

「何があうと俺以外の男に捧げることはないな?」

「ありません、千次様、だけに……」

「本當だな?もしもお前が他の男に腰を揺するようなことがあったら……」

男の声は酷く低くなり抱いていた片手が女の首に絡みつく。

「殺してください。千次様のお手でるりの首を絞めて止めて下さー」

「瑠璃、瑠璃…ああなんて可愛い」

男は微笑してその手を頸まで持つていき、柔らかい唇を割らせる
と指で舌を弄んだ。口端から唾液が一筋零れる。それが恥ずかしく
て口を開じようとすると、もう片方の手の指も歯と歯の間に入れら
れて、口を開けようとした。舌を弄り回しながら綺麗に
並ぶ小粒の歯をなぞつたり歯茎を撫でたりして口内を犯していく。
閉じられない口からは唾液が溢れて毀れていった。

「見ひ、瑠璃」

漸く手が外されると、鏡には酷く淫らな女がいた。頬を上気して
涎を垂らし、開いた脚の奥の銀の茂みはきらきらと雫が垂れ落ちて
畳にとろりとした水溜りを作っている。

「それほど俺に契り立てているところのなら、自慰を許してやるわ

「じ…」

「そうだ」

男は女の手に手を重ねると、それを女の茂みに潜らせた。

「あ…」ぴくんと女は動く。「るりの指が…」

「お前自身の指でここを弄るんだ」

「あ！」

指に指を乗せて器用に操りそこを弄らせると、女はあ、あ、と喘いだ。「ほら、」と言つてさらになべてこと指を一本中に入れさせると、女は一層切ない鳴き声をあげた。

「はあああ…！」

「どうだ、自分の中は？」くすと笑う。

「あ…なんだか、とても変な気持ちのします…」

「さあ、自分でもう一本中に入れてみろ」

「え…入りません、旦那様…それはきつこようです

「俺がお前の指一本より狭いと言つ気か？」

「あ…違います、違うのですけれど…るりは壊れませんか」

「まあお前は壊れると淫らになるが、体の方は問題ねえ。入れる」

「はい、旦那様…」

女は中指を押し込む。第一関節で止まつたところを男にゆっくりと押されて根元付近まで呑み込まれていった。

「あ、るりの指がるりの中にあります。とても変です

「次は動かしてみろ」

「う、それはとても頭の痺れて」

最後まで聞かずに男は手の甲を持つて指を抜き差しさせた。水音が鳴る。

「あ、あ、あ…」

「自分で搔き混ぜろ」

「そんな、」

「目を瞑つて…俺の指だと思うんだ」

男の手が外れて、言われた通りに目を閉じ想像した。

蜜液が

壺から溢れ出でていく。

「そうだ… それは俺の指だ。お前の中でどう動くかは体に染込んでいる筈だ」

「あ、あ、あ、あ…！」

先ほどとのつたない動きと違い、指は見えない手に操られてでもいるように巧みに動く。女の声は高く早くなつていく。

「あ、あ、旦那様…そ、そ…あ、」

鏡に写った女は、瞳を閉じて少し唇を開いて喘ぎ、いつも冷じられている程に自分から大きく脚を開いている。そして自分の指で自分の茂みの奥を搔き混ぜ弄つてる。もう夢中のようだつた。

「あ、旦那様… るり、あ、るり…」

男は耳元に囁く。「いいぞ、瑠璃」

耳を通り抜け直接脳を揺さぶるような甘く低い声にびくんと女は背を反らした。

「あ…！」

きゅうと指は締め付けられて、自分の中に指を入れたまま女は体を反らせた。ぴくぴく痙攣した後、くたと男の胸に背を預けた。

自分の指が入つているのに気がついて漸く抜く。はあはあとまだ少し苦しそうに息を吐いて、頬は紅潮していた。

「どうだ？ 自分の中の感触は？」

「とても温かく… ぐけゅぐけゅしてぎゅうぎゅうしてこました。指

が取り込まれてしまふかと思つました」

「そうか」微笑して頭を撫でた。「それでいつも俺を気持ちよくさせているんだぜ」

「本当ですか… るりは気持ち良いですか」

「ああ、お前は最高だ」

微笑んで言うと女はまつりと笑顔になつた。体の芯からじんわりと暖まつていくよつこ、ひどく嬉しそうだった。

「今度は旦那様にお気持ち良くなつて頂きたいです

女は向きを変え、少し自分にのしかかつてすぐ下から顔を見上げてきた。尻尾があれば振っているだろう。
微笑したまま手の甲を掴んで口元に持っていく。

「あ、旦那、様…」

男の均整の取れた口元に自分の指先が入るのを見る。濡れて生暖かで鋭敏な感覚に、電流が走ったようにぞくりと肌が震え、熱い液体がまた漲つていくのを感じる。ちゅふんと綺麗になつた指が抜かれた。

「可愛い瑠璃」

円を背に影のかかった男の微笑に、見惚れていた。

「「」、「めんなさい」、旦那様……」

「駄目だ。全く許せねえな」
男が女の手首を掴み、捻りあげて両の腕を上げさせている。背は壁。

「るり、一人でじいするのが悪いことと分からなくて……」
心なしひんぐに染まつた頬。潤うつ瞳、濡れた白魚の指先。

「分からない？」

いつもよりも低い声にびくつとする。

「お前は自分を誰のものだと言った？」

「だ、旦那様のものです」

「ここは？」

膝をぐりと押し付けられ、ひ、と皿づ。布越しに敏感に反応してまた染みをつくった。

「旦那様のものです……」

「ならば何故勝手に弄つた？」

「「」めんなさい……けれども、旦那様に習つたことを忘れないよう」と思つて、」

「俺に許可を取ればよかつたんじゃねえのか？」

「お手を、煩わせたくないくて」「
ぐり。

「は、恥ずかしくて」

「俺のいない間に欲情していたのが？」

「欲情という訳では、あつ」

ぐりぐりと、押し上げられてほとんど男の片膝に乗る。

「お前は淫らな女だ……俺の膝に乗るだけで喘ぐ」

「ふ、う……旦那様……許し……あああ

つま先立つて男の角ばった膝に体重のほとんびが乗り、股の下が熱ぐじんじんとむずる。

「も、もう…お許しく…」

遂に床からつま先が離れ、ひくんと電気が走つてつま先が伸びた。「全く」

ふう、と軽い溜息と共に膝を降ろすと、女は自分の足で立たない。ずるずると、両手を降ろされるままに床に尻をつけた。糸が切れたようにに瞼も半分に綴じ、長い銀の睫は下を向いている。

「参ったな」

襦袢から覗く白い脚に、蟻を誘うような甘い蜜がてりりと垂れるのが見えた。

「お前に仕置きしようとするど、俺までが欲情しちまつ」

滑る銀の髪を手に絡め掴んで上に引き上げると、頭皮の刺激に女が気を戻す。着物の一番上の紐が解かれて手首を縛つた。

「これで悪いことができないだろ？」

「はい…」

まだ虚ろに小さく頷いた女の頭を男は導く。

「分かつていてるな？褒美じゃないぜ」

「はい、御主人様…」

頭に乗つた男の手がぴくりと止まり、何も言わずに女の瞳を見た。女も冷水を浴びたようにはつとして黒の瞳を見返す。重く震える沈黙だった。

「千次様、」

女は慌てて名前を呼んだが、薄暗い瞳の男は自嘲して口元が歪む。

「……いい。俺がこういうことをするからいけねえんだ」

細い紐を解くが、女は解かれた手首を不安げにくつつけたままにしている。

「俺の所為だ」

男は女を離れた。

「るりが悪いのです！」

女は立ち上がり、扉に向かう男に向かつて泣き出しそうな顔で訴える。

「もう勝手にじいをしません」

「いい……それも本来夫が定めるような」とじやねえ

「るりが悪いのです……待つて……待つてください、旦那様。るりにお

仕置きを、」

「お前は悪くねえ」

もう扉を出て行つてしまふ。

「どこへ……旦那様」

「鎮めてくる」

「るりでつ……」

ぱたんと閉まつた。女は崩れた。ひくひく泣いた。

+

「縛つてぐだぞ」

「はあ?」

母親が紐と手首を差し出している。

「そういうのは親父とやれよ」

「旦那様は……お怒りなので……」

俯いて泣き出しそうだった。なんだか分からぬが面倒だ。はあ、と一つ溜息をついて手早くきゅ、きゅ、と結んだ。蝶々結びで綴じてやる。

「とても上手です」女は結び具合を確認して、自分では解けないと見ると笑顔になる。

「痛くないのに固いです。夫はやはつ旦那様とよく似ていらっしゃいます」

「だから」能天氣さに怒りの氣も失せる。

「心の底から不本意だ」

……

「旦那様、」

帰ってきた男の元にとたとたと駆け寄った。

「るりはいい子にしていました、旦那様」

蝶々に結ばれた両方の手首を男に見せる。

「そうか」

男はちらりと見たがそれ以上何も言わずに横を通り過ぎた。ふわりとびんぐの匂いがした。怯む。しかし香がじんわりと心の穴を通り抜ける前に男を追いかける。手首を前にとたんと足がつまづく。あつ、と当然手はつけずにじつじょつもなくおでこを下にしてぶつかるのにぎゅ、と口を開じる。

ぼすんと身体が抱きとめられた。

「危なつかしいな、お前は」

「旦那様……」また手を煩わせた哀しさと、固い温もりの安心が入り混じる。

「俺の前以外で結ぶな。俺のいなことひけたらじつする」「るりは痛くないので、」

「俺が痛い」

ぎゅ、と腕に抱く。ぽろ、と一つ零れる。

「もつしません」

「俺を想つてするならいい」

「千次様……るりはあいしています」

「俺もだ」

手を解いて、抱きしめあつた。

暫く抱き合つてから紐を拾う。

「しかし先ほどの結び方は存外可愛かったな」

それで女の首に紐を回し蝶々をつくる。

「ほら、可愛い」女は頬を染めた。

「もつと色とりどりの着物の紐でお前を色々に結んでみよう」
新しい遊びを見つけたように楽しそうな男の笑みに、女も嬉しそうにこくんと頷いた。

「あーあ」

赤い長椅子、空を向ぐ。園子屋。日光を遮る赤の蛇腹傘の遙か上に広がるのは、清清しく乾いた晴れ空。横に置いた蓬^{よもぎ}園子も美味しい。茶を啜つた。

「くわ親父」

ぱつりと呑ぐ。

田を腫らして結んでくれと頼み込む母。何があつたか知らないが、絶対に親父が統べて諸悪の根源に決まっている。

あれほど一途に、好いた女に想われたら、

それなのにあいつは。どうしてそう不実なことができるんだ。それともあべこべなのかもしない。両方誠実ではうまくいかなくて、どちらか不誠実な方がうまく行くのかもしれない。しかし俺は。

どちらも気が進まない。

女を手酷く扱つてみても、するほどに自分が情けなく惨めに思えてくる。やはり互いに誠実でないと安らがないだろ?。園子をぐい、と歯で巻り取る。そろそろ出るか。

「相すみません、こちへ、隣に宜しいですか」
「ああ、どうぞ。今出るといひなので」

柔らかな女の声に、櫛の乗る皿と茶碗をどかし、そこで気がつく。女の顔に覚えがあつたが、知らぬ振りをして土産の団子を手に立ち上がつた。

「今日は天氣が宜しいどすなあ」

「どうだう。遊郭の外で女に会つたらどんな態度を取るべきなんだ。」

「ああ、まあ」

適当に生返事をして立ち去るがいいだう。しかしひんやり柔らかな手に手を留められる。遊女というのは肌の触れ合いで簡単にするのがいけない。屋敷の者など畏れ多くと、一定以上に俺に近寄りすらしないのに。

「遊女と客の痴話喧嘩は珍しくありまへんが、随分ひいきにして貰つたのにあてつけのように他の芸妓を呼んでばかりでは小雪こゆきが可哀相であります。何かうちの娘むすめが御粗相を？」

「お前の娘？」

眉を顰める。口元の黒子。こいつは確か、初めにあの女のところへ案内した遣り手という取り持ちだ。もし親子で遊郭にいたとしても娘を知りもしない男に平氣で差しだすのか。

「小雪のかつての姉女郎、秋桜と申す者じしやくでございます」

「どうもこれは、面倒だな。

「関係ねえだろ」

柔らかな物腰だった表情がきりとして、女の声が凜とする。

「单なる妹への情にございません。小雪は見世の看板娘。ないがしろにされては見世の暖簾に泥を塗りられるのと同じこと」

「それで？」

「本来芸妓は三日通えばその一人を通すのが礼にござります。気まぐれにお慰み頂いて袖を濡らすのは雪ばかりにございません。」愛

顧頂けるならば芸妓を誰ぞとお決めくださいませ
「相分かつた」ふう、と息を吐いた。

「 もう、あの暖簾はぐぐらねえよ」

女の手を柔らかに振り解く。

「迷惑をかけた」

「お待ちを」

黒子の女を見下ろす。物哀しげに口元が歪む。

「どうしてあの時雪を俺に引き合わせたんだ」

元々、そうすればこんな辛い そんな仕様も無い責めにまで及ぶとは、情けない。

「 あの方の……息子様だったからです」

「 何?」

去りかけた足を思わず振り向いた。

+++

「 との次第に」やがてまわ

溜息一つ。

「 それで、紹介も無いのに俺を通したのか」

「 はい、お見かけして一目でそつと分かりました」

女は懐かしげに、そして少しだけ哀しそうな微笑をした。

「 雪は自分で気づいていませんが、あの方が通わなくなってしまったあの日以来、本当には笑わなくなっていたのです。それは单なる

寂しさだけではないでしょう。遊女といつもの哀しさを知つてしまつたからかもしれません。あの子が本来の笑顔を取り戻したのは天様のおかげなのです

「あの子の人気は容姿以上に努力で身に着けた賜物。その意地もあつて、泣き伏せることもせずに恋いもしない男に愛嬌を振り向く。遊女の籠にいるあの子が余計に痛々しくて、」

「もういい」女を止めて、赤みの差す羊雲に目を細める。

「雪のところへ」

不思議と、胸のつかえが取れたようだつた。

+

「天……」

幼い頃……

帰つてこない父親、寂しそうな母親……遊郭通い……

小雪。

何もかも。女の顔を見ても、猛る感情は何も無かつた。此処まで来ると、笑いたくなる。いいだろう。

「ついてこい。親父に会わせてやる」

お前の誠の待ち人に

五十四・割器

「千次様……！」

一日見て、堰が切れたように娘は男に駆け寄った。

「雪、」

抱きついてすすり泣く女。男は懐かしむように頭を撫でる。少し離れたところで母親が睫を伏せたのを見た。自分はそのまま何も言わずその場を離れる。誰も気がつかなかつた。

惚れた女は父親の情婦。

父と娘程もある年差で、今まで愛しさを込めて呼んできた名は親父のつけた芸妓名。幼い頃から見初められて手懐けられて、水揚げしたのもあの親父。親父が飽きた女にまんまと惚れこんで貢いで。あのはにかんだ笑顔。

初めて向けられた、初めて胸の高鳴つたあの笑顔は、表情は。元から自分に向けられたものではなかつた。

「夭……ごめんね」

縁側、ぼんやりと朧月を眺めていたところを女が隣に座つた。
「黙つていた訳じやないんだけど、」

「いい」

欠けた月を写す波立ちの無い黒の池。心は不思議な程静かだつた。諸行無常、悟りを開いたような。

「これでもう完全に、未練を断ち切れた」

隣で空気が震える。

「あの… 天、天のことは本当に」

「言つな」

立ち上がる。女の顔は見ていない。

「もういいんだ」

池にぐにゅりと浮かんでいたそれに、ぽんと石を投げた。黒い波にぐにゅぐにゅ搖ぐ。元の形になる前に、立ち去った。

今まで布を被せたままだつた調度品。暗い影に写すのは、黒い髪と黒い瞳。

『生き』

『瓜』

『本当によく似て』

『だけど才は』

『どこが俺似だ?』

『似てねえよ』

小刀を鏡に突き立てる。ぴしひとひびが入つて割れ、からんからんと落ちた。

+

「『内儀様も一緒に、』

「あの… るりはお茶を入れてくるので、少し」

奥の方に引っ込んでいくのを、あ、と追いかける。

「それなら私が、」

袖を引きとめられた。

「気にするな、あいつは人見知りだから」

「……美しい奥様ですね」

「そうだろ」

朗らかに笑い、ほらお前の番だろ、と言われて双六を受け取った。

しかし時間がかかるても戻つてこない。

「火傷したのかもしだねえ。見てくる」

女は床に膝をついてわたわたりと緑の茶つ葉も書き集めていた。傍にはお湯でぐつしょりと濡れた雑巾がある。無残に割れた陶器が散らばっている。

「何をしているんだ、お前は」

「あ、」びっくりと背を震わせるが、こちらを向かない。「今、すぐに」

男は茶縁に流れ雲の描かれていた陶器の破片を摘み上げた。

「ごめんなさい…旦那様の大事な御湯のみを…
ぐず、と囁るのが聞こえた。

「危ねえからどけ」

女の両脇に手をいれ猫のように持ち上げると、離れたところに降ろす。女の目は真っ赤だった。

「これくらいで泣くんじゃねえ」

溜息交じりで言うと、「大丈夫でしたか」と遠慮がちに後ろから声が掛かる。娘は床の有様を見ると、あ、と声をあげ急いで雑巾を拾い絞つた。

いい、と男が制止した。後ろでひくひくとしゃくりあげる声。床の惨状。

「　「めんなさい」

「雪?」

「私、そんなつもりじゃなくて…。本当に、『めんなさい…』」
ぱつと頭を下げたかと思うと、走つて行く。

「雪?」追いかけかけたが、後ろの駆け泣きにひり、と叩打うち、振り返り女の傍にしゃがんで頭を撫でる。

「泣くな、瑠璃。湯呑は気にするな」

*

布団、しゃくづの漸く落ち着いた女。

「ごめんなさい」

「謝るなら居心地の悪い思いをさせて帰してしまった客人に向けてくれ」

「御客人…」ぽつんと呟く。

「全く、天の奴も連れて来た早々にじいにかに消えやがつて。何がしたかったんだ、あいつは」

「天は…悪くないです」

女はぎゅ、と布団を握る。

「の方は…天のお好きな人だったのではないですか。けれど旦那様の…御寵愛を受けていて、天は悲しくなったのではないか」

「寵愛? 何か違う。何かお前は勘違いしている」

「あいつは娘のようなものだ。本当に引き取らうかと思つたこともある」

「けれど、」

「俺を信用していないな? 瑠璃。まあ結婚以来一度も他の女を抱いていないとは言わねえ。しかし兎に角あいつはそういうんじゃねえよ」

「はー……」

「納得してねえ癖に囁いた口ぶりはやめや」

女を抱き寄せて首に口付け、細い腕を慈しむ様に愛撫した。

「身体で教えてやる。俺がどれほどお前だけを想っているか」
身をよじるのを押さえつける。しかしいつもと違い本当に抗つて
いるようだった。

「嫌です」

それは一緒になつて以来初めて聞く、拒絶の言葉だった。

五十五・疑心

「何……？」

男は顔を顰めた。それに怯えるように女の声も震える。

「旦那様は……いやなりこやと言つていいことおっしゃいました」

「嫌なのか」

田を瞑つてこくんと頷く。

「俺に抱かれるのが、嫌なのか」

「今は、今は、とても……眠いのです」

「嘘をつくな

ぐいと肌着を左右に割り、身体を露にした。白い肌に桃のような乳房が零れる。身体を使って押さえ込んだまま手を肌に滑らせた。

「や、」

女は嫌がるよつに体を捩り、柔らかい肌がくすぐる。顔は涙を溜めている。

「その顔、懐かしいな、瑠璃……」

男の舌がちろりとその口端を舐めたのに怯えて一層もがくが、敵うはずのない腕中の小さな抵抗が余計に煽らせると知らない。女の細い腰を掴む。

「やあーー！」

「やあ……」

狭く深い鍾乳洞の奥までを塞いで、男は感嘆の息を漏らした。

「お前よりいい女はいねえ」

「だ、ひどい……いやと、いった、のこ……」

女は紅潮しながら小刻みに震えている。

「聞き入れるとは言つてねえ」

「ひど…ああ」

律動と共に女はもつ言葉を喋れなくなつた。

+

最後、柔肌に指を食い込ませて達した。抜き出すと、吐き出した欲がかき出されて零れ落ちる。ぐたりとうつ伏せていの女の頭を持つて来させるが、しかし女は嫌がるよつに顔を背けた。

「本当にどうしたんだ、瑠璃」

「とても……ひどいです。るつは嫌と言つたのに……やはり旦那様はるりのこと……」

「何故嫌がる」

「……眠くて、」

「まだそういうことを言つのか」

「今日はとても…多かったです」

「そうだな。今晚は酷くそそられた」

男は汗ではりついだ女の髪を除けてやる。

「久々に余裕を失くした。すまなかつたな、るり。だがたまにはいいだろう? お前だつてあんなに気持ちよさうに声をあげていたじゃねえか」

「……雪さんが、いたから」

枕に顔を押しつぶして微かなほど声はくもぐるが男は聞き取つた。

「お前、」ぐに、と強めに頬を指で押す。

「いい加減に怒るぜ。雪をそういう目で見たことはねえ

「分かっています。そうではないのです……」

女はもぞりと起きて、肌掛けを被り自分の脚を腹を体を拭き出した。時折くすんと鼻を鳴らしている。

肌掛けの紐を結ぶとさらに上から着物を羽織つた。

「……どこに行くんだよ

男は半身起き上がり着替える女の後ろを見やる。

「天のところへ」

「悪かつた…もうしねえ」

「そうではないのです、天が気になるので」

「お前の方こそ、天を気にかけ過ぎじゃねえのか。あいつの年で添い寝つて……毎晩毎晩、慰めるつて、本当は何してるんだよ」

「旦那様！」

女は振り返り、銀の瞳で強く眼差す。睨んだようでもあった。るりは天のお母さんです」

「結局は血の繋がりがねえだろ」

女の瞳にぐ、と涙が滲む。

「瑠璃、」

少し男の声が怯み、自分も着物を掛けとベットから降りる。それと同時に逃げるようにからつと扉を開けた。

「雪さんは…えりか様に似ていました…！」

女は走つて出て行つてしまつた。男は呆然とする。

「えりかに…？」

独り、答える。

「そんな訳、ねえだろ」

+

「んこん、こんこんと叩く。

「お母さんです、天」

から、と戸が開いた。

「何しに来たんだよ？」

「天……！？」

血に、塗れていた。

五十六・暗鬼

「また親父と喧嘩か」

母親は目を泣き腫らしていた。

「親父が駄目なら俺、どいつもこいつも都合良く代わりにしゃがつて」

「天…そ、それは」母親は口に手を当てて震えている。

月が照らす。額から臉頬、首に衣服にべつたりとついた血糊。黒を塗り替えて、鮮烈な赤。

「あんたも、こうしてやろうか」

切り裂かれた片顔、小刀を滑る、ぬめ紅。

「そうすれば、もう親父の人形にならなくて済むぜ」

「人、形…？」

「その外見じゃなくて、あいつがあんたをを本当に愛しているのなら何も変わらねえだろ?」

くすりと笑って、一步、近づく。

「よ…」刃と血に怯え、異形の子に怯え、目を見開き震える母親。

逃げればいい。傷つけられて、逃げて、突き放されればいい。きっとあの男は突き放すだろう。血塗れで救いを求めた、顔に傷だらけの女をあの冷たい目で一瞥して。その時盲目な母親から幻想が崩れ、あの冷酷な男が見えるようになるだろう。

眞実は傷つかなければ見えない。

刀を振り上げた。

とすん……

白い肌が血に濡れる。

「天…」

頬に宛てられた白い手に赤の血が伝づ。 母親が、抱きついていた。

「とも、ともともとも痛いです。手当てをしなければなりません」

「母さん……」

母親の手を重ね、ゆっくりと降ろす。

「大丈夫だ。もう、固まつた」

「けれど、天、血がたくさん…たくさん、そのままでは…そのままでは天は、」

かたかた震えている。震えていたのは、

「大丈夫だ…死のうとした訳じゃねえ。顔は致命傷になんねえよ」

「本当…ですか。けれどとても痛くて…」自分の片頬を押さえて涙を流している。

「すまなかつた…」

母親の折れそうな細いからだをぎゅ、と抱ぐ。

「天…？また、辛いのですか」

ぎゅ、と抱きしめ返される。ひどく温かい。

「いや、「母親を放す。

「天…お手当てを」

着物が血に濡れてしまつた母を見る。

「そうだな」

とくとくと、顔が脈打つてゐる。巻かれた包帯に手を当てるとき。

白い包帯は、母親の肌掛けだった。

「ありがとう、母さん」

「いいえ、天。お母さんは何もできなくて…きちんと見て貰わない」と、

「今まで、俺を育ててくれて」

「天…？」

「出来の悪い子に育つて」めんな

「え…」

ふ、と笑う。

「俺はこの家を出て行く」

「天…！？」

かし、と小さな両手で服にしがみつく。

「どうして…」

「今の俺に、此処にはいれねえ」

「何か…嫌なことのあるのなら言つて下へど。お母さんがなんとかします」

「そういうんじゃねえよ」と笑う。

「御跡継ぎですか」銀色の瞳がなんとか留めようと必死な様子だった。

「お母さんからお父さんにお話します。旦那様はきっとなんとかしてくれます。天が後を継がなくてここにいられるよつて」

「親父の力なんか借りたくないねえ。其れが嫌だから、出るんだ。この家に囲まれて自分で立てない自分が」

「天はもう立派です…！」

「俺は、親父の影に付き纏われる心を振り払いとえ。このままガキでいるのは耐えられねえ。もつと、もつと…親父を越える男になつたら、母さんに会いに来る。此処で、あんたが誇りしく思えるような霧崎家当主に」

「甘えてんじやねえ」

声が夜を通り裂く。 黒い流逝姿の男がいた。

五十七・家出

夜闇を背負つて立つ男。その直刃^{すぐは}の如き黒い眼が、自分の喉元に切つ先を当てている。

「一度此処を出て行くのなら、霧崎の名を捨てひ

「ふらふらと好き勝手放蕩をして、霧崎の名を貶めるんじゃねえ。此処で当主になるか、其れが嫌なら名を捨てて出て行け。遠慮はいらねえ、家の一つお前がいなくともどうとでもなる。むしろそんな甘えた奴に継がれるよりは、潰れちまつた方がまだましだ」膝をついてしまいたくなるよな、このびりびりと引き裂くような空気。暗く大きく全てを支配するこの夜そのものが男の纏のようだつた。

「継ぐか、名を捨てるか。覚悟もなしにほざいてんじやねえ

これが、親父。

俺は。

「霧崎なんて、いらねえよ

崩れそうな膝に力を入れて立たせる。

「正直、実感沸かねえよ。男も女も貴族の連中とは肌が合わねえ。白々しい、意味も無い人形に見えて仕方ねえ。こここの使用人も家名も一てめえの家族すら、俺は命を張れる程大事には思えねえ。その通りだ、こんな奴が、幾らめつきを固めたところで柱になんかなる訳がねえ。支える為の芯が入つてねえんだからな」

「俺がこの家にいたのは、俺が大事なのは唯一人^{ただ}だからな」

分け与えて破れた布を纏つた、ところどころ自分の血のついた、

「 だけどそれは、俺のものにはならねえ」

白い体を浮かび上がるは、大きな大きな、触れることもできない黒い夜。

「 霧崎の名なんかいらねえよ。俺は、母の呼んでくれたこの名一つで十分だ」

「 そうか」

「 ならば出て行け」

男の声は静かに、抑揚もなく。

「 但しこれのみは覚えておけ。一度とこの屋敷に足を踏み入れるんじゃねえ。俺を殺す覚悟がねえならな。もしもお前が甘えてこの家に足を踏み入れるようなことがあれば、俺がお前の息根を止めてやる」

「 上等だ。一度と帰つて来ねえよ、こんな家。次にあんたの面を揉むのは死に顔だ」

切つた啖呵は戻らない。今までで一番悲しい表情の母親に胸をしめつけられて、最後に絞りだす。

「 母さんに何かあつたら、あんたを殺しに来る」

そして、長い廊下に背を向けた。

「 天…！」

伸ばした手を、握つて。

「 じゃあな、母さん。 元氣で」

放して、背を向ぐ。もつ、振り返らない。

「 天…！」

悲痛な声がするが、とたと駆け出せりとした足音は不自然に止まる。

「お前も……俺の妻として生きる覚悟を決めた筈だ」
「旦那様……はい……」

「天、天、いつてらつしゃいませーるつばさつとさつと、天のお母さんです！」

透き通る叫び声が、背を追いかけ夜を縫つて届いた。

「天　　お前もお前の道を行け」

五十七・家出（後書き）

三章、完。ここまで読んでいただき有難うございました。次幕まで少し間が開きます。

「ところで瑠璃、随分危つい格好をしているな。そつ肌を見せては男の目に毒だぜ？」

「駄目です」

「……そつか」

五十八・外伝「梅の薔薇の咲く頃に。」(一)

「お前は此処の見習いか？」

引っ込み思案で、地味な子だった。

梅の薔薇の咲く頃に。

そう不器量という訳ではないけれど、この大見世には選りすぐられた華やかな娘が大勢いた。

都一の格式で、公家も上流御用達、そうとくれば顧客好みに洗練されていなければならないから、そこで芸妓と名乗るには立ち居振る舞い、舞や歌に三味線、気の利いた会話もできないといけない。桐楼郭の太夫と名乗れば貴族の屋敷でも丁重に扱われる程だった。それが元は田舎か出てきた頬の赤い娘であつたとしても。

そんな訳で、此処にいるのは売られて来た田舎娘だけでなく、それなりに裕福な町の子だつて門戸を叩く。うまく貴族に寵愛を受ければ妾にしてもらつて使用人を顎で使う生活ができたり、あるいは大商人の嫁とか、そんな逆転劇の起こりうることを夢見て。

それほど夢見がちでなくとも、ここに登場できるはある程度以上の格式のある男達。そんな男達にちやほやされて袖を振ることもできるとなれば、冴えない男の嫁になつて何人と子の面倒を見、家事炊事店に追われ皺くちゃになつた末に邪魔者扱い、最期はお陀仏、そんな人生よりもと思う女も少なくない。

「いえ、ちがいます。わっちは勝手女です」

芸妓の見習いなのかと聞いてきた客に答える。

「ここで働いて、しかも芸妓の見習いになれないといつことはつまり上の下といつよつた位置だらう。」

でもそれでいい。三食きちんと食べられるし、そんな華やかな世界なんて自分には縁遠い。覚えだつてきっと良くないし、そんな目の色を変えて努力する意味も見出せない。なんてはつきりは思つていた訳ではないけれど、幼ながらにどこか諦めの心があつた。

「わうか

男は茶を飲む。自分はすぐに下がる。入れ替わるように襖が開いて遣り手の女がすっと襖を開けた。

ここに遣り手は年増でなく、大抵は年季明けでも十分女の色香を持つ女だ。

「誠麗しゅうじやこます……本日はどちらの芸妓になさいますか」普通、日替わりで芸妓を抱くなんて許されないので驚いて口が開いて遣り手を見る。

「そこの子で遊ぶ」

後ろを振り返ったが誰もいなかつたので肝が冷えた。

「申し訳ありませんなあ。そちらの子は飯炊き童で、禿どころか見習いでもないので……」

「いい

「いい、じゃねえよ」

もう一人いた連れの男が、困った様子の遣り手とぽかんと口の空いた自分と決定事項のように動じない男との止まつた場を取り持つた。

「何考えてんだ、お前。流石にこんな小さな子にまで手を出すのは

友として見過「」せねえ

「手を出す？」男はくすりと笑う。「低俗なお前と一緒にするな」

「なんだとつ」

ひきりと筋の立つ男を無視して鳥の濡羽のよつた黒髪の男は遣り手を見やる。

「下がれ」

「は…失礼いたしました…」「ゆるりと」

黒い瞳に見下ろされただけで、案内人は頭を下げて襷を綴じてしまった。

取り残された。そんな。

「来い」

男が手招いていた。

+

「なあ、実はお前って幼めの娘が好みだらう、変な意味で」「穢れのない女が好きだ」

男に櫛で髪をすかれている。持つてこさせた化粧道具箱と姿見がある。後ろで髪をすいている男の顔を見れる訳が無く縮こまつていった。ひどい、ひどいよ。こうこう仕事じゃないのに。どうなつてしまふんだろう。何をされるんだろう。

「そしてお前に穢れさせられるんだろ」

思わずびく、と震える。こういう場所で育っているから男がどういうことをするか分かる。でも、まだ初潮も來ていないのに。ひどい、ひどい。なんで。

「全く、お前の所為で震えているじゃねえか」
やれやれ、と男は嘆息する。

「十割お前の所為だ」口を尖らせてもう一方が抗議した。

そして髪を結んで紐を括り付けられると、顔に手が伸びた。強張る。

……

「ほら」「ほう」

はつと目を覚ませた。頬をくすぐつたい毛で撫でられ唇につんとあたりぽふぽふされて、顔をくすぐる余りの気持ちよさに眠りかけていた。涎を出ないようになじつて「ぐんと飲み込む。

「目を開ける」

開く。

「わ……」

そこには別の子がいた。元々白すぎる肌に赤みが差して、頬は柔らかそうで口紅は小さく桃に近い紅色が差されていた。分かるところはそれだけだけど、何もかもが変わつて見えた。

「わたし……？」

その通りに口が動く。

「女は皆原石だ。磨いた者が光る」

男はくす、と笑つた。初めてまともに見たのは鏡越し。ひどく整つた、今まで見たどんな男よりも、いや女よりも美形の人だった。「そしてお前が女の化粧ができるといつのも軽く氣色悪い。まさかそんなことまで習つのか、坊ちゃんは。最高貴族で括るにも程があるぞ」

「お前だつて化粧した女の顔位毎日見飽きているだろ？」「うう

「ああ、はい。十を知つて一から九を知るといつやつですね。分か

りました、この天才が」

「十五位じやねえか？」

「そうですね」

半ば呆れた様子で相槌を打つていた。

「お前、名は？」

「…小梅」

「成程。お前は雪がいいだらう。これからは小雪と名乗れ」「勝手に名をつけるな。そしてつけるなら何で名を聞いた?」

「馬鹿。芸妓名だ。それに雪に梅は美しいだろ?」

「あ、の……」

「私、芸妓じゃ……」

「どうらいにせよなんでお前にそんな権利がある?」

「俺が後見をしてやる」

「はあ? お前、なあ……醉狂な遊びは悪い癖だぞ。しかも今じゃお

前も、」

妻子持ちだろ、と言うのが耳に残った。男は構わずほんと頭に手を置き瞳を覗く。黒い瞳に吸い込まれた。

「小雪、お前は都一の芸妓になる」

五十九・外伝『梅の書の咲く頃』(一・)

と言つて何をするでもなく、男はただ遊びに来ていた。

遊んでくれに來ていたというか。鞠や独楽の玩具や、飴や駄菓子、綺麗な鏡など、はたまた珍しい土地の物、異国の中の、とそういうものを手土産に、一緒に時をすごす。一緒になつて遊ぶのではなく、鞠突きをしているのを穏やかに見ているとか、そういうつた。

「雪は東北の生まれだそうだな」

「はい」

記憶はないが、そちらしかった。奥州武家の血筋だと。なら何故物心もつく前に売りに出されたのか。成長してから疑問に思うのを経て、見世の適当に作った経歴だらうと理解した。何せこういう場所だから、浅ましいのを嫌う。血筋は良いが売りに出されて、といふ『悲劇の子』がほとんどだった。

「話を聞かせてくれ」

父が娘を慈しむような態度で、膝に乗せて戯れる。

「どうほくでは、雪のいえをつくります。いえの大きさほどたくさんの雪がふるので、みんなで穴をほればいえになります。冬のあいだはみんなでそこに住みます。おふろは雪でできいて、あたためれば雪がとけて水をはこばなくてもおふろのお湯になります」

「へえ」男は時々相槌を打つて、面白そうに話を聞いている。

「雪は食べるとなこしこのでとつておきます。なつにはみんなでねかずにも雪を食べます」

でたらぬの想像だつたが、男は時折髪を耳にかけてくれながら楽しそうに耳を傾けるので、得意になつて話をするのだった。東北なんて異国ほど遠い場所で、きっとばれたりなんかしない。

「雪、りんごを持つてきたぜ」

「りんご」

「東北の果実だらつ。好きか?」

「はい、ゆきのこりんごです」

せうか、と男は笑つてそれをぽんと手渡す。赤い小ぶりの果実がころんと手の平に収まつた。

「洗つてあるから食べて良いぜ」

言われるままに初めてその果実に皮^ヒと齧^クりついた。すっぱい。

「どうだ?」

「おいしいです。なつかしいです」

くちゅうと水水しいそれに齧^クりついた。

「そうか」男は笑つて眺めている。

それから季節になると度々『りんご』を持つて来てくれた。

今でも、すももを見るといつとんと語りてしまつ。思えばからかわれていたのだろう。

+

芸妓としての姉さんがついて、見習いが始まつた。男は気ままに来る。皆羨ましがつた。特に看板の姉さんについている禿は、どうかむろ

してあたしじゃないと悔しがっていた。だけど大きくなるに付けてだんだんとそれは自分の気持ちにもなつていった。

「雪、」

会いに来てくれる。だけど、それは。

「千次さん、早う」

此處は女を抱く場所。

芸妓を連れて、行ってしまう。

女は誰と決まっていないようなので、皆その人の気を引こうとめかしこんでその当時はひどい絢爛振りだった。その人が頻繁に通ったその時は、ここ数十年來の繁盛と言われたほどだ。

だけど通う日が多くなるほどに、日に留めて貰えずに、又は一度きりの契りを結んだそれきりで涙で袖を濡らす遊女でいっぱいになつた。

馬鹿ね。

金持ちで身分が高くて美麗で。だから媚を売る。だから振られるのよ。

私は知ってるの。

あの人気が言う『美しい』を。あの人はその人を探している。その人になる為に私がいる。

私は袖を濡らす様な惨めな真似は決してしない。男に袖振つて笑う、それだけ美しい芸妓になつてみせる。

だけど禿かぶつも板についてきて、新造もそろそろという頃には姉さんが決まつた相手になつていて、それで姉さんが看板太夫にまでのしあがつっていた。

一番最初に声をかけてくれるのは自分なのに、時も過はぎさない内

に姉さんが奥の座敷に連れて行つてしまつ。朝、ひどく色っぽい乱
れ髪で帰つて来ては、心がじくりじくりと痛んだ。

姉さんは綺麗だつた。綺麗になつていつた。それに元々一番の芸
達者で、芸を丁寧に仕込んでくれた。小雪のおかげといつて優しく
してくれた。

姉さんは好きだつた。だけど、じくりじくりとしていた。
子供に戻りたい。早く大人になりたい。

なんなか分からぬ。子供が親を取られる気持ちだつたのか、
それとも。

だけど、覚えてい

「小雪、俺の娘になるか

「え、」

一度だけ、そう言われた。娘…娘になつたら、本当の、娘…こ
くんとしてしまいそつになつた時。

「あいつも喜ぶ」

あいつ、ところの内儀様のこと。思わぬ程きつぱりと、首を
振つていた。

「雪は都一の芸妓になります」

「そうか」

少し残念そうに言つて、だけどどこか褒めるように頭を撫でてく
れて、これで良かつたんだと誇らしげに思つた。その話は一度はし
なかつた。

雪は都一の芸妓になります。そして千次様だけに雪を捧げま
す。だから待つていてください

そう決意を胸に秘めたのを。

六十・外伝／梅の書の咲く頃に。(II・)

思つ通り、水揚げはその人がしてくれることに決まつた。芸妓史上類を見ない揚げ代だつたそうだ。

その日に行われる初めての道中も、姉さんが看板芸妓だつたおかげで誰に気兼ねもなく見世一番華やかに行われることになった。姉さんも惜しみなく用意をしてくれたし、その人からもこれ以上ないという程見事な仕掛けの一式を贈つて貰つた。

決して絶世の美貌という訳ではなかつたけれども、姉さんの仕込みと血の滲む努力の甲斐あつて芸妓は見世一番の腕になつた。それ以外でも男女の機微をつぶさに観察して、その仕草や駆け引きを自分の中にしていた。

後ろ盾は大きい。だけどそれに引け目を感じないほど、努力でのし上がつたという自負があつた。

そして、華やかに華やかに煌びやかに、天女の遊覧と語られ草になつた道中を終えた。

座敷に上がる。自分の為に調度も全て新調された広い座敷。手塩にかけて育ててくれた男と二人。白い床。まさに人生最高潮の夜。の筈だった。

「千次様……雪はずつとお慕いして参りました」

男にしなだれかかり、潤んだ瞳で見上げる。体中がすでに火照つている。

「雪、」

頭を撫でてくれた。そして揺れる蠟燭灯りに目を眇める。

「美しいな……」

涙がぽろりと出た。漸く、漸く可愛いから美しいに。娘から女に。

「雪、もう……」「

縋り付いて体を押し付ける。

「もう、子離れだな」

慈しむように撫でていた手が離れる。一欠片の不安を消そうとその手を両手で包む。

「はい……雪を、早く女にして下さいまし……」

男はくすりと笑った。

「それはお前の男に取つておけ」

すらりと立つ。

「千次様……？」

「可愛い雪、」見上げる額に腰を屈めてそっと口付けた。満月の月に向かう。

「千次様……！」言ひようの無い不安に襲われて立ち追いかける。仕掛け重ねの着物が重い。

「雪、」彼は変わらずの微笑を湛えている。

「お前の道を生きる」

夜に消えていった。

覗いたそこには夜しかなかつた。窓の外、身を乗り出しても一階から人影も見えない。

夢……？

どこから……？

あの人は、初めから夢だったの……？

わんわんと、泣きたかった。

だけど、意地が許せなかつた。

初見世の日に、買われた男に逃げられるなんて。

誰にも気づかれないよう、袖を噛み締めて声を押し殺し、涙だけ

濡らした。

翌朝、袖はぐつしょりと濡れていた。

水揚げ代は、身請け代を越えていた。年季も解かれて。

そう、自由にしてくれた。

だけど、私は。だけど、私は。

「あなたに…！」

全て、無くなつた。ねえ、都一の芸妓になつてなんの意味があるの？ そうなれば貴方はまた私の元に来てくれるの？ その時は抱いてくれるの？ 私の道つて何。私の男つて何。私は、何のために何をしてきたの…？

遊郭に、残つた。

結局私は此処で生まれ育つたようなものだつた。出て行く理由も宛てもない。姉さんだけには察してしまわれて、慰めてくれた。

の方はいつも他の女を想つていた。

しまいには一人でしとしと泣いて慰め合つていた。互いの嫉妬を明かし合つた。他の女を想つて抱かれるのと、女と見られず可愛がられるのと、どっちが、て。

そんなの決まつている。

姉さんは遣り手になつた。もつ芸妓を続ける気力の抜けてしまつたと。この体をそのままにと。

私は宙ぶらりんに見世の花として居座つて。男に袖を振つてばかりいた。

ただ、ぼんやりと。

ただ、ぼんやりと。

待つていた。

誰を？

あの人があなたに来てくれるのを？それとも、ワタシノオトコ

？

「お会いじとひざいました」

「

黒い瞳を見上げて、妖艶に笑つてみせた。

愛し合つて抱かれたい。

梅の蕾の咲く頃に。 (完)

六十一・籠舟（前書き）

あれから雪が溶け、春になった。だけど外は未だ寒い。せつせと半纏を縫う。

「……」

男は新聞を読んでいた。表情は特にない。逆に言えばいつもの微かな微笑も無かつた。ぱたりと閉じ置く、それを見計らつたように。

「旦那様、」女がいた。

「どうした？ 瑞璃」

「いえ、あの、何か面白い」との書かれているのですか
新聞にちらと目をやつた女にくす、と笑う。

「つまらないことだ」

お前も読んでみるか、と手渡すと女は開く。音読しながら目を追ううちにだんだんと申し訳なさそうな顔をした。

「米……て……國の……が、……るりには少しむつかしこうですか」

「そうだな、悪かった。部屋にこんなものを持ち込んで」

男は女を見上げる。新調した水色の着物と白い真珠の髪飾りをつけていた。

「綺麗だ」くすりと男は笑う。「これを見て欲しくて先ほどからつろつろしていたんだな」

「つるつるしていた訳では……ただお邪魔してはいけなくて、少し、」
顔を赤らめてもじ、と自分の手を弄った女の頬に手を伸ばし撫せ
る。

「お前は本当に可愛いな、瑞璃」

そつと抱きしめた。

「いつまでも変わらずにいてくれ」

「はい、千次様」

女も遠慮がちにその背に手を回し、頬を染めて微笑む。
「ずっと千次様にあいして頂けるように……」

胸に包み込んでいたのをゆっくりと離した。

「さあ、お茶にしよう、瑞璃」

ぽたんと落ちた水滴で、カップが一つ傾く。口に当たる瞬間がつく。

「天……」

目元の涙を掬つた指があつた。指に乗つた雨露に口付けるようにそれはその唇に吸い込まれる。

「旦那様……」

何も言わず、慰めるように手が頭を撫でる。

「天の、半纏を縫つているのですが……るりはびひやつて渡したらよいですか」

「俺が渡してやる」

涙の乾かない女を優しく包んで微笑んだ。

「本當ですか。いつになつたら天は見つかりますか」

「分からねえ……瑠璃、俺は少し留守をする

「え」

「留守番、できるな?」

「ど、どのくらいでお帰りになりますか」

「分からねえ。だが三田四田じゃ帰つて来れねえだろつ
かし、と女は袖を掴んだ。ふるふると首を振る。

「るりも連れて行つてください、旦那様。きっとお役に立ちますの
で」

「すまないな、瑠璃。俺も辛い。だがお前を失う恐ろしさを考えた
ら連れて行けねえよ」

「お危ないのですか、旦那様。行つては嫌です、旦那様。旦那様：

「……」

「可愛い瑠璃」

男は微笑んで、縋り付く女の頭にぽんと手を置く。

「大丈夫だ、瑠璃。ただお前には俺のいない間、家を守つていて貢
いたい」

「けれど……るりは一人はとても……」

「瑠璃、」

男は女に口付けた。

暫く抱擁した後に、ゆっくりと離れる。

「愛してる」

「はい……」

「こくんと女は頷いた。

「お気をつけ……行つてらっしゃいませ、旦那様」

冷たい風を切つて、少しの間だ、と言つて笑つて行つてしまつた。

だがいつになつても男は帰らなかつた。

「旦那様……」

とうとう一月が経つたが、音沙汰は無い。女は瘦せ細つていつた。

「天……旦那様……誰も……るりは……」

* * *

三ヶ月が経つた。

「瑠璃、帰つたぜ、瑠璃」

男は部屋を開くが誰もいない。おかしい。それも、昨日のうちに
もう電報を入れていて、

使用人は皆出揃つて迎えたと言つのにどうこうことだ。

「瑠璃？」

誰もいない。

「おー、瑠璃はどこだ」

呼び出して睨んだのは、彼専属の執事だった。乳母兄弟の関係で、今は執務上の片腕と言つていい。

「俺が帰るとは言つてあるんだろうな？」

「……お伝えしてからです」

執事は言い難そうに重々しく口を開く。

「どうこうことだ」

「若君がお帰りになると伝えた途端にお部屋に御籠りになられてしまって……」

「……」

「若君に仰せつかつた様に見守り申し上げていましたが、お食事時にもお部屋から出られてはいません」

「……」

男はちひり、と女の衣裳が仕舞われている部屋を見た。勘だ。

がちやり。

やはりそこには鍵が掛かっていた。更衣室ともなつてゐる為、内側から施錠できるようになつていて。もっとも女の更衣中に入るような真似はしないので鍵は意味などなかつたが。しかしここは唯一と言えば唯一、女の占有する個室でもあつた。

「おー瑠璃、どうした。俺だ。帰つたぜ」

しいんと物音一つ立てずに居ぬ振りを続ける態度に、男の目が徐々に険しく眇められる。

「開けないなら開けるまでだ」

「若君つ、実は……」

執事が焦つたように止めようとしたのにも間に合わず、男はばきんと匂を蹴り倒していた。はあ、と執事は手を額に当てる。年とともに落ち着いてきたと思えたがやはり変わらない。

奥でこんもりとした布の塊があつた。それは蹴り破られる音とともにびくりと動き、かたかたと震えている。男の近づく気配と共にますますぎゅっと縮まる。もうそこには分かつてゐるのに観念するどこのか余計頑なに身を隠そうとしている。

「また何をしているんだ、お前は」

しかし力一杯の抵抗も男にとつては造作ない。ぱつと布を剥ぎ取つた。

「な……」

言葉を、失つた。

呆然と、まじまじと、見る。

それは美しい銀色の髪、空色の瞳

丸々と、太つた体。

六十一・在処

華奢だつた面影は見るも無残に、ない。赤ん坊の体がそのまま大きくなつたように白く柔らかそうな肉にふつくら覆われ、背が高くないのも相まってころころとしている。関節を覆う肉に一重の顎。

「は……」

「若君……」

くらりとよろけたのを執事が支える。

「瑠璃が……俺の瑠璃が……」

もぞもぞと動く。薄暗い奥、幾重にも重なつた色とりどりの着物を敷いて巢にした、それは白い仔豚だつた。

肉厚の瞼に押し潰された丸い瞳が潤んで見上げる。哀憫を誘つ申し訳なさげなハの字眉も今は物乞いのように情けなかつた。

「あれは……瑠璃じやねえ……」

男は半ば放心し、自分に言い聞かせるように額に手を当て正気を保ちよろけた体に力を入れようとする。

「若君、お氣を確かに……ひとまずこちりへ」

体を支えて、ふらふらとする馬をソファの方へ導いた。

+

かちやりとコーヒーが置かれる。飲み口に青と金の線が引かれた「一ヒーカップ、漂う挽きたての豆が香ばしい。しかし男の眉間にほんの少し皺が寄つていた。

「……何があつた」

「若君……」

「お前がいながら何があつた、川野！ 瑠璃を頼んだ筈だろつ……」

執事の襟が掴み上げられ、がたんと揺れたコーヒーテーブルに茶黒い液体が毀れる。

「落ち着きくださいませ、若君」

冷静さを崩さない、むじろ髣髴めるよつた口調に、ち、と言ひて離す。

「話せ」

「いえ、若君」

「……なんだと」

毅然として落着いた調子の言葉に、男の声はますます低く怒気を含む。

「若君はこの二ヶ月ほどんど睡眠も取らず食事も疎かにして政務を執られたと聞きます。それも幾度もお命を狙われて緊張の状態であつたと…… 瑠璃様のことは全てお話ししますが、この屋敷に帰られたからには何よりも先ず安心してお休みになられる」と第一です

「俺が帰った第一は瑠璃だ」

「瑠璃様の御為にもです。失礼ですが、若君はお疲れの為氣が立つていらっしゃる。そのような状態で今瑠璃様にお会いになられても、余計に若君の心身に差し障ります」

「大事なのは俺の体じゃねえ！ それならば初めから出てなどいない」

「ですから、そのように気性の荒れた状態でお接しになられても、かえつて瑠璃様をお傷つけになられるだけだと申し上げているのです。今瑠璃様にお会いになられて、若君はどうされるおつもりですか。先ほど何ができると言つのですか」

ぐい、と一層眉間に皺を寄せて睨みつけ、しかしあ、という深い溜息と共に男は精根の尽き果てた様子でふらりと立ち上がった。

「……寝る」

ふらふらとしながら、男は一人寝室に向かっていった。その背に深深と執事は礼をする。

「お疲れ様でした。ゆっくりとお休みくださいませ、若君」

+++

眠り続けて三日目の昼過ぎ、着流し姿の男が食事を取っていた。

「そんなに寝ていたか。何度も目覚めはしたが、体が重く起き上がりなかつた」

「当然です。常人でしたら目覚めることもなかつたでしょう。若君が無事な姿で帰られて、涙を流した者がどれほどいたことか。この三日間、屋敷中の誰もが心配の余り全く身の入らないひどい有様だつたのですから。お食事を終えになつて医者に診せた後には、皆に顔を見せておやりになつてくれさい」

「ああ、分かつた。それにしても、帰ってきた時には当たつてすまなかつた、川野。記憶に虚ろだが、随分と気が立つていたようだ。俺としたことが辛抱もできずに扉を蹴破ったなど信じられねえ。可哀想に、あいつのことだから余程怯えてしまつただろう。他に俺は瑠璃に何かひどい事をしなかつたか。　そうだ、早く瑠璃をここに」

「若君、瑠璃様は……」

「分かつてゐる。三月の間に変わり果ててしまつた。だがそれも俺のいない寂しさの所為だったのだろう。辛い思いをさせた」

「もう瑠璃様はここにいらっしゃいません、若君」

口をつけたみそ汁の器がぴたりと止まり、傾くことなく降りてかたんと音を立てた。

「……どういう意味だ。此処にいなくてどうしている」

聞き返した静けさは、返答如何では逆鱗の予兆を孕んだ緊張だった。

「若君、順をお追つてお話しさせて下さこませ」

「……」

無言を「了」と取つて執事は話し始める。

「 若君がお出になつて七日が過ぎた頃から、瑠璃様はお食事をほとんど召し上がらなくなりました。体調をお崩しになり、ひと月田には遂にお倒れになつて床に伏せるようになつてしまわれました。原因は拒食による栄養失調です。私共も試行錯誤をしてなんとかお食事を食べて頂こうとしたのですが、ほとんどお手をつけられずにお残しになるので……止むを得ず、使用人数人がかりで押されてでも召し上がって頂いたのです」

男の眉がぴくぴくと動くが、表情を変えず黙つて聴く。

「それが瑠璃様にはお堪えになつたらしく、それからは御自身で召し上がるようになられました。中でも多種取り揃えさせた洋菓子は特にお気に召され、洋菓子職人を雇つて作らせることにしました。瑠璃様専属で作らせた洋菓子を瑠璃様は大層お喜びになり、すっかりお元気になられたかと一安心したのですが……」

「気づけば瑠璃様は一日中お茶をなさり、お菓子を召され続けるようになりました。 それでのよくなお姿に……」

「よつになつた、じゃねえだろ」

口を噤んだのを見て、男が糺す。

「姿じうのだけの問題じゃねえ。菓子の取り過ぎは体に毒と分かつているだろ。何故そのままにしていたんだ」

「仰る通りでござります。誠に申し訳ございません。私の不届きによる責任でござります」

「責任の在り処など訊いてねえ。何故だと言つた」

「それは……瑠璃様は、お茶の時は必ず菓子もカップも含めて席を三人分用意させました。まるでそこに誰かいるように、一人ままごとのように楽しそうにおしゃべりになつて……。お控えになるよう申し上げると、大切なものを取り上げられる子供のように怯えて若君に助けをお求めになり……。瑠璃様がそれによつて寂しさを紛らわせていることも存じていましたので、また食を拒みお命を危険にさらすよりは、若君がお帰りになる迄と思い強くお止めすることができなかつたのでござります」

ふう、と男は嘆息した。

「話は分かつた。特に瑠璃を無理に押さえつけたくだりは全く許せねえところだが、お前なりの献身に免じてここまでにつこでは咎めない。　だが、」

改めて真っ直ぐにその黒い瞳で射る。

「瑠璃がいないと言つたのはどつこいつことだ。幾らお前でも返答には心しゆよ」

「瑠璃様は、若君のお田覚めを聞いて自害なさぬつとしました」

「何を馬鹿な」

「元々瑠璃様としてもお弱りになつたお心の限界だったのです。も

「一度と若君の手に触れる」とはできないと取り乱しなさるのをなんとかおなだめしてひとまず竜之介様のいらっしゃるお屋敷にお送りされ申上げました」

「竜之介だと？」

男の眼が鋭く眇められた。

男は囁み付かんばかりに執事を見据える。

「何を勝手な真似をしているんだ。過ぎる程忠義立てるあいつが、瑠璃のこととなると俺に背くほど想いを寄せているとお前は知つていい筈だろ?」

「お言葉ですが若君、瑠璃様のお体を考えればそれが最善かと思ひます。瑠璃様の疾患は偏に寂しさに依るもの。この三ヶ月、瑠璃様はただの一人とも会話をなさつていないので。お話し相手になるどころか、屋敷の者に会つのを恐れるようにお部屋にお引きこもりになつて、一步も出られていません。昔の記憶もあるでしょう。若君のいないこの屋敷は瑠璃様に取つて地獄に一人残されたような心だったのかもしません」

「瑠璃様が心許されているのは、若君と天様を除けば竜之介様のみ。若君はまたすぐに家をお空けにならなくなる。次に瑠璃様がどうなるともしれない恐れを考えると、出過ぎた愚考ではございますが、何よりも若君の憂いを考えての所存にござります。せめて天様がいらっしゃれば」

黙つて、男は立つた。

「どちらへ、若君。恐れながら今瑠璃様を追いかけられても、かえつて瑠璃様のお心を追い詰めることになるかと」

「家の者達に顔を見せたら、すぐに此處を発ち仕事に戻る」

「若君、それ以上の御無理はいけません。若君が考へている以上に体に重すぎる負荷をおかけになつてはいるのです」

「瑠璃がいねえのにこの家にいる意味はねえよ。」

一刻も早くこ

の面倒事に田舎をつけて、瑠璃を迎えて行く

「若君、今度こそ私めも微力ながら若君のお手伝いをさせて頂きます」

執事は追いかけるように男の後ろについたが、主人は軽く足を止めて振り向く。

「お前がいるからこの家を任せて出れるんだ。俺の留守中、頼んだぜ、川野　それと、」

くす、と口元を上げる。

「瑠璃に手を出したら殺す　そう竜之介に言つて置け」

その微笑は冗談か本気か知れない空恐ろしくなる笑み。だが帰つて初めての余裕不敵のその表情を見て、安堵と嬉しそうな表情を浮かべて止まりぴしりと立つ。

「勿体無いお言葉、恐縮でござります。この川野、若君のご期待に添えるよう全力を持つて応えさせて頂きます」

深深と礼をした。

「行つてらつしゃいませ、若君」

「おつ」

男は微妙な微笑で出て行く。

しかし門を出て一人になつた時、その笑みは消え口元は引き結ばれる。だが黒い瞳には変わらず強い光が宿っていた。

「瑠璃　」

「るり　」

下に俯いて、自分の衣をぎゅ、と握っている。新しく寸法に合わ

せて作られた着物のようで決してきつそうではなかつたが、泣きそ
うになりながらできるだけ体を縮めこみ、連れられてきてからずつ
とその様子を変えずに黙つてただそこにつつ立つていた。

どうしたことか、今や丸々と太つてしまつて、子供のように華奢

で愛らしかつた姿とはかけ離れていてしまつていた。

だが、その心をぎゅっと締め付けるような愛しさは変わらない。
むしろそのなんともいたたまれない様子は余計に憐憫の情を誘い、
今すぐにも手を引いて抱きしめてやりたかつた。

「では瑠璃様を宜しくお願ひ致します。竜之介様」

本家からの執事が、礼をして出て行く。礼儀正しくはあつたが、
そこに感情は感じられなかつた。尤も、冷静で機械的なこの姿こそ
が何百という使用人を取りまとめるのにあるべき形なのかもしけな
いが。

「瑠璃……会いたかつたよ

やはりそこに突つ立つたままだつた可愛そつなその人にふいと口
元が微笑み、腕に抱きしめる。

兄だつていい。

「りゅ、う……」

う、と言つて唇をかみ締めるのが分かつた。

「いいんだよ、泣いて」

撫でてやると、ずっとせき止めていたものが溢れ出したようだつ
た。

「つゅう、つゅう……！」

自分の名前を呼んでしがみ付き泣き咽ぶのを、優しい気持ちです
つと撫でていた。

「るりは何も悪くないよ……もう大丈夫だから、安心してお泣き」

+++

「りゅうー。」

ぱたぱたと手を引つ張られていつて、何事かと思えば花壇に咲いた花を指差して酷く嬉しそうに笑う。

「お花の咲きました！ るりがお育てしたのです」

「そうだね、綺麗に咲いたね」

花咲くような笑顔を取り戻していた。

何か気が紛れればと思って輸入した苗をあげてみたら、毎日せつせと世話をし、遂に赤い実を成らせた。それを一緒に食べて美味しいと言えば大層に喜んで、それからはすっかりと土いじりに夢中になっている。今では花壇というより小さな農園にまで大きくなった一角で、花に野菜までを育てていた。

体の脂肪も綺麗さっぱりと落ちて、もうすっかりと元の体型となつていて。それどころか前よりも健康的な肌色で、頬はばら色に染まっていた。やはり華奢ではあるが、抱きしめれば折れてしまいそうな病床の夢ではなく、無邪気に走り回る子供のような健康の美しさで輝いていた。

「これはりゅうです」

「え？」

花の咲く土に水を遣つて嬉しそうに言ひ。四輪の花が咲いていた。

「これは天で、これは旦那様で、これがるりです」

そのいっぱいの笑顔に締め付けられるような切なさを感じた。一輪を囲む花達。そのあまりの無邪気さ。ずっと心の奥にしまつている筈の、叶わない願い。

春が巡っていた。連絡は、一度もない。

「りゅう……」

腕の中の心細い声。

いつからか、一緒に布団の中で毎晩を眠つた。それはあの人への背徳の思いはしたのだが、そういう疚しいものではないと言い訳のように思い直す。

夜一人きりで眠るのが怖いと点々と濡れた枕を持って来て言うので、寝付くまでと思って添い寝をしてやつた。添い寝だけのつもりでいて、だけどいつの間にか深い眠りに落ちてしまつから、今ではそのまま一緒に眠つてしまつていて。不思議なことに、自分までひどく安らいで眠れるのだった。今まで本当に眠つたことがなかつたと思つほどだ。

「……旦那様は、まだ……帰つてはいないのですか」

「お帰りになられたと連絡を受けたら一番に瑠璃に教えるよ」「ありがとうございます、りゅう。るりはお花を持つていきます。旦那様はお喜びになるでしょうか」

「きっと喜んでくれるよ。るりが育てた花だからね」

腕の中で嬉しそうに笑つたのが、身じろいだくすぐつたさで分かつた。髪を撫でてやると、ふわりと微笑んで瞼を閉じる。

「りゅうはとても暖かい……」

くすぐつたく、温かかった。

一番温かな時間だつた。

+

石段を登り終え、男は朱色の鳥居を見上げる。

そのままぐぐり、境内を進んだ。枯葉を掃いていた尼が、手を止

めて見咎めるように声をかけた。

「もし 何か御用でしょうか」

男は砂利石の上に跪く。

「お迎えに上がりました、奥様」

「顔を上げてください」

毅然とした声に、燕尾服の男は顔を上げた。

「お立ちになつて、馬鹿な真似事は止めてください。私はもつあの妻ではありません」

艶やかな黒髪を肩で切揃えた女は枯葉を脇に寄せ立ち去つとすが、それを追いかけるように男は立ち上がる。

「若君には貴女様が必要なのです、えりか様」

足を止め、しかし振り返り乍ら尼はひんやりとした聲音で囁く。

「あの方がそうと?」

「いいえ、」

分かりきつた返事を聞いたようにまたぞり、と足を踏んだ。

「奥様！ 霧崎を いいえ、ただ若君をお救いください」

いつもは冷静沈着な執事が、膝を砂利につけ絞りだすように声を出していた。

「若君がお倒れになりました」

砂利の音が止まる。

「危篤の状態で、こうしている間にもいつお命が……お命が お願いします、奥様。今だけでも 「ですが私はもう……私よりも

「奥様の名を、うわ言でお呼びになりましたー」

振り返る女の瞳は、凜としていた。

「連れなさい、川野」

+

男は床に臥せつていた。額には濡れ布を乗せ、熱を帯びた息を苦しそうに吐いていた。

「千次様……！」

狭い八畳間、臥せる布団に駆け寄りその汗ばんだ手を取った。

「こんなにおやつれになつて……一体何のお病に、」

「御過労でござります」

「過労？ 主人にこれほど過労をかけるとは、一体お前達家臣は何をしているのです！」

「返すお言葉もございません……ですが若君にしか成せない事が余りに多すぎ……御自身を酷使なさるのを止めようにも、今やこの国は若君一人で背負つている状態。誰にも代わることができないのです」

「お世継ぎは……！ 父君の大事に息子は一体何をしておいでですか？」

「御子息様は只今 出奔なされています」

「な…… いえ、分かりました。事情は聞きません。息子ではなく前妻の私までを呼んだからには、今それを糺しても無駄なのでしきよ。ですが、あの娘 ただ今の妻まで、一体何故千次様のお傍に付き添つていないのです」

「瑠璃様は別邸にて御養療なさつており、若君の重体はお伝えしております」

「妻に知らせもしないとは、お前ともあらう者が一体何をしているのですか、川野。すぐに伝えなさい」

「若君は弱つたお姿を決して人に見せようとなさらない方です。特に瑠璃様には、御政治に関わるような事に触れさせることは一切無く、不穏な空氣もお疲れも微塵も感じ取らせないようにしておいでした。これまでの若君の御意思を私が無碍にする訳には参りません。それに私は……」

口を噤んだ執事を一括するが如くにきつゝと向かつた。

「妻とは夫を支える者です。それを余分に背負わせてどうするのですか！外にも内にも休まることが無ければお倒れになるのも当然のことです」

「その通りでござります、奥様。貴女様こそ霧崎家当主の奥方に相応しき器。若君をお支えできるのはえりか様、貴女様を置いていらっしゃいません。どうか今こそ若君のお傍にお戻りお支え下さいませ」

「今更何を言つのです。あの方にはもう」

「私は今まで、貴方様以外をこの霧崎家当主　若君の奥方と認めたことはございません」

「元々、瑠璃様に当主奥方の役は荷が重過ぎるのでござります。それどころか若君のご負担となつていらつしゃる。もつ私には見ていられません。……勿論一介の家臣である私が若君の御意思に背くような事などはありません。若君が御大事になさるというのならば、私も瑠璃様に誠意を持つて仕えさせて頂きます。ですが、若君の真の御正妻は貴女様唯一人。私だけではございません。この家の人者皆が、貴女様の帰りをお待ちしております」

「川野」

静かな口調で女は口を開いた。

「お前が口を挟む問題ではありません。一刻も早く、あの娘に伝え

るのです

「……は。御無礼を致しました」

執事は下がる。

「瑠璃様は私が責任を持ってお連れします。留守にする間、どうか若君をお頼み申し上げます」

「言われるまでもありません」

熱に浮かされて意識のない男の顔を見つめ、女はきゅ、と唇を引き絞る。凜としたその姿に、執事は深く礼をして退がると襖を閉めた。

変わらず冷たいその手を握りしめ、女は男を見つめる。

「千次様……」

*

汗ばんだ男の体を拭ぐ。均整の取れた筋肉質の体は年を経ても昔に変わらず、しかしあはり顔にはやつれが見え、細身な体も余計に痩せているようだ。

意識はない。ただただ苦しそうな息を吐き、汗を流す。

医者の話では、生死の境を彷徨う重体であるそうだった。しかし病ではないので出来ることはない、体の不具を無視して酷使して來た結果で、常人では既に命が尽きている。後はその人の胆力に賭けるしかないということだった。

「どうしていつも、貴方は一人で抱えてしまわれるのですか」

湯呑みの水を男の口に流す。しかしそれは大部分が口から滴り落ちてしまつ。流す尋常ではない汗の量を考えれば、このままでは衰弱し果て命も死んでしまつに違ひない。

「お許しくださいませ」

女は意を決した表情で、水を口に含んだ。男に覆い被さり、枕に乗る頭を手で抱えて水を口移しに流し込む。

「……は、」と顔を上げ、流しやすいよう頭を抱えたまま、願うよう見つめた。

「どうかお飲みくださいませ、千次様……！」

「ぐん

男の喉仏が動いた。

「千次様……！」

思わず喜びの声を上げると、男の口が何か求めるように僅かに開く。

「ただ今……！」

女はまた水を含み、男の口に流し込んだ。また喉が動き、口を開け、女は口移しに水をやり、それを繰り返す。

「う……」

そして遂に、黒い瞳を開ける。半分だけ開かれた瞳が傍らにいる女をおぼろげに捉える。

「え……りか……？」

「はい、千次様……！えりかで、『ござ』います」

まだ熱に浮かされた様子ではあるが、意識を取り戻した事に女は涙を流す。男はその顔を見上げ、呟いた。

「す……まない」

それからぱたんと音でも鳴るよつに瞳を閉じた。

「千次様！？」

不安に駆られたが、聞こえてきた寝息に安堵する。

そのやつと得られた眠りを妨げないよつに、何もせずに女はただ

ただそこで見守り続けた。

「「安心下さい」

医者の言葉を聞き、ほつと安堵の息を吐く。そこにすやすやと眠る顔は和らいだ表情で、もう熱も引き深い眠りに落ちているようだった。

「もう峠は越えられました。ただ完全な回復という訳ではなく、まだお体は弱らされている状態ですので目を覚まされてもまだ十分の安静をお取りになつて下さい。さもなくばまたお倒れになるとも分かりませんよ」

医者は微笑んで、それにしても、と続ける。

「本当に、匙を投げるしかない」状態でしたのにやがてお命を取りとめられた。御自身の胆力もさることながら、奥様の献身的な介護が無ければこうはいかなかつたでしょう

「私は……妻ではございません」

「それはそれは、」無礼を致しました。ですが傍らにおられるのが深く心を置き休められる方でなければ、いつも安らかにお眠りにはつけないでしょ?」

医者は相変わらずにこにこと言つた。女が懇懃に礼を述べると、では私はこれで、と立ち上がつた。「お送り致します」と女も続く。

医者を見送った矢先、遠くに一つ人影が見えた。背の高い背広の

男と小柄な西洋服の女。その方へと歩む。歩いていたその一人は自分の姿を認めたと見えて足を止めた。女の方はさりげなくなつか執事の影に隠れるようにしている。

「えりか様、若君のこと本当に有難うございました」

既に医者とすれ違つたのか、執事が深く頭を垂れた。

「礼を言われる覚えなどありません。……目の前の病の者に手を差し伸べるのは、人として当然のことです」

毅然と言いそのまま横を通り過ぎた。娘のように小柄な女は、倣つて頭を垂れているのかただ顔を伏せているのか分からぬ。

「しつかりなさい」

一瞥して言い捨て、女は屋敷を後にした。

+
眠る男の布団の前に正座する。一年の間に痩せやつれてしまつていた。

「旦那様……」

しょぼんと垂れた頭。手をぎゅと握つて顔を少し上げ、男の顔に近づいた。手をついて震える唇でゆっくりと男の薄い唇の上に近づく。吐息があつて、ますます唇はふるふる震え、頬に痺れたような熱さを感じる。

ちゅ、と触れたと同時に弾むように唇は離れかけたが、その前にぎゅ、と頭が手に押される感覚があった。

あ

バランスを崩してとさんと男の体に覆いかぶさるようになつて、唇が重なり合つ。柔らかく重なつて、それからふわりと離れた。髪

を絡めた両手に頭が支えられ、すぐ下でその唇が悪戯っぽく笑うのが見えた。

「瑠璃」

田を覚ました男は春の日差に照らされたような微笑みを向け、暖かな声で言つた。

「お前が見ていてくれたんだな。何故か……母が傍らにいるような気がしていた」

「あ、 るりではなく、」

女が言葉を紡ぐ前にまたとさんと引き寄せられて、胸に抱きしめた。

「謙遜はいい。 ありがと、 瑠璃」

とくんとくんとなる暖かい心音が聴こえる。

「格好悪いところを見せてしまったな……」

それから男は慈しむように懐かしい手つきで髪を撫でた。
「迎えに行くのが遅くなってしまった。随分寂しかつただろう?」

俺もだ。体を休める時はいつもお前のことを想えていた」

「旦那様、 旦那様をご看病したのは、 ……えりか様なのです」

「えりか? あいつも来たのか」

そんなことより、と男は女の顔を挟んであげさせ覗き込む。

「姿が戻つたな? 瑠璃。いや、前よりもより美しい。肌は白い花びらでは頬はばら色だ。 お前は本当に稀な奴だ。年を経る」とに

美しくなつていく

黒い金剛石のような瞳に見つめられれば、田は逸らしたくとも逸らせない。頬が染まるばかりだ。

「あの、 るり…… 旦那様、 旦那様はお休みにならなければなりません

ん

「なんだ、もう少しこいいだろ？。心配をするな。もつ倒れてお前を不安にさせるようなことはしねえ」

相変わらず微笑をして、腕に入れたまま庭の方に目をやる。

「美しい庭だろ？。母の為に手入れされた庭だ。伏せながらも四季を感じられるように……」

白い花が一面に、しかし僅か僅かに俯くその花はどこか刹那で儂い美しさで佇んでいる。

「お母様……の」

「そうだ。あれは母上の好んだ花……瑠璃、お前は白百合の化身だ。母が俺に与えてくれた」

枕元に丁寧に置いてあつた扇子を女の胸元に差し入れる。

「この形見はお前が持つていてくれ、瑠璃。唯一俺の持ち物だ。俺のいない時は俺だと想い、お前がいない時俺はお前と共にいると思おう。俺とお前を繋ぐ扇子だ」

「駄目です、旦那様。これはとても大事なもの……るりが持つのはいけないことです」

「大事だからお前に渡すんだぜ？ それに何より大事なのはお前だ」「けれど、るりはきれいでないので……」

「何を言つている。お前より綺麗なものはねえ」

男は軽く笑つて、女の衣服に手をかけた。ぶちんと青いぼたんを外す。

「さあ可愛い瑠璃、俺に力を与えてくれ」

布団の中に引き入れて、華奢な体を下に轢いた。引きあうして、絹のよう滑らかな肩が顯れる。

「あ、旦那様、ダメです」

「結び合つ時ぐらには名を呼べと、思に出させてやらないといけねえな？」

肌に触れただけで、んと唇を結びぎゅと目を瞑りぴくんと体を震わせる。

「いい子だ」

「ほん

「若君、お戯れはそこまでに遊ばせ下せこまか」

男は形よい眉端を僅かに上げる。

「わきまえろ、川野」

「御精力が戻られたよつて何よりで『じぞ』いますが、若君のお考えになるより体力はまだ戻られておりません」

「だから瑠璃に貢うんだよ」

「瑠璃様は急いた長旅の為まだご休養も取られず体の埃も落ちていません。体をお清めする必要がおあります」

「あ、るりは大丈夫です。ありがとうございます」

「大丈夫ではありません、若君の御衛生の為です」

「おい」

男の声が低くなる。女は恥じ入つて申し訳なさげに顔を俯いていた。

「なんだその言い方は」

「私がお仕えしているのはあくまで若君で『じぞ』います。これまで瑠璃様に非礼申し上げた覚えはございませんし、あるつもりも『じぞ』いません。常に相応しい態度で接して参りました」

「もういい、トガれ」

不機嫌な声で言つと、執事は頭を下げ退室した。

一人、静かに部屋に残される。

「あの、ではるりはこれで。お休みなさいませ、旦那様」
その場を逃げるよにして女も立ち去つた。男もあえては止めず、ち、と舌打つただけだった。

「治せばいいんだろ」

不貞腐れたようにぼそんと布団に戻ったが、しかし枕元にきらりと輝く長い銀の糸を見つけて微笑み、目を瞑った。

「瑠璃様」

おずおず横を通り過ぎようとしたら声をかけられ、つんのめりそうになる。

「は、はい」

「少し宜しいでしょうか」

六十六・夢花

『瑠璃、可愛い俺の瑠璃、』

男は銀色の髪を撫でている。夜の砂漠に一人立ち、折れそうに華奢な体を抱きしめていた。しかしその体がどんどん細くなっている気がする。男は不安になつて訊いた。

『どうした』

女は顔を上げた。

『旦那様が摘み取つてしまわれたので、るりは枯れなければならぬのです』

『何を言つているんだ。水も光も十分に『えただろう』

『けれどもいつかは枯れてしまうのです』

女はいるのに、腕は感じない。いないのが怖くて抱きしめられなかつた。

『待て。何が足りない。何でも言え』

女は何も言わずに微笑む。

『ありがとうございました、千次様。るりはとても幸せでした』

腕の中で微笑んだ筈の女は、次の間には初めからそこにいたように、離れたところに立っていた。待て、と男が一步踏み込んだと同時に、女はおぼろげな光になつた。男ははつとしてそれ以上動けずに立ち止まる。

『千次様』

背後に別の声が聞こえぎくりとする。目の前の女は哀しそうに微笑み、それから破片のようにちりぢりになつていつて淡く消えていく。

『どうかお幸せに、御主人様』

『瑠璃　一』

光の破片を呆然と眺めていると、背後にやまつ名を呼ぶ声が聞こえる。

振り返れなこまま、しかし声は近づいてくる……

「千次様」

「…………」

「おはようござります、若君」

「想像以上に最悪だな、寝覚めに男を見るところのは」

「申し訳ございません」

執事はさりと受け応えると表情も変えないまま問う。
「少し魘うなされていましたが何か悪いお夢でも見られましたか」

「忘れた」

ふう、と男は起き上がった。

「瑠璃は？」

「いらっしゃいません」

「早く連れて來い」

「お出掛けになられてこます」

「何？」

男は顔を顰める。

「聞いてねえ」

「奥方であるなれば若君の許可が無くとも屋敷を自由に出入りられる筈ですが」

「そういう意味じゃねえよ」ち、と舌打つ。

「なんだよ、俺の目覚めを待つていればいいの。ちやんと付き添いの者は付けたんだろうな?」

「竜之介様と観劇にお出になられました」

「……」

無口になつてから布団にじりつと寝転んだ。

「可愛くねえな」

*

「若君」

「なんだ」

田覚めから数日、男は布団に寝転がりながら不機嫌な様子で答える。

「御仮病はお辞めください」

「仮病じゃねえよ。俺は瑠璃に看病されるまで治らねえ」

「御不貞寝はお辞めください」

片目で睨む。

「第一何でお前がいるんだよ。お前がいるから瑠璃が入つて来れねえんじやねえのか」「恐れながら逆でござります。瑠璃様がいらっしゃらないから私が若君を御看病申し上げてます」

「いや絶対お前のせいだ。あいつは極度の遠慮性なんだよ。問題ねえからお前は早く下がれ。一体何が哀しくて男に看病されなきやらねえんだ」

「問題がないなら起きてくださいませ。すぐに御執務をとは言いませんが、寝てばかりでは体が弱まりかえって毒でござります」

五月蠅そうに男は黙つて体を向こう側を向いてしまつた。執事は一つふうと息を吐く。

「瑠璃様はずつと竜之介様のお部屋にいらっしゃいます」

がぱりと布団が捲りあがつた。男は思い切り眉を寄せていた。

「何なんだよ。……あいつ、一体どういうつもりだ」

「直接御訊きになつてはいかがでしょうか」

ち、と舌打つと男は起き上がり部屋を出て行つた。執事もその後ろをすつと立つが、しかし主人を追つことはせずに廊下の奥に消える。外ではひひんと馬が啼いた。

+

ぐいと細い手首を掴んで立たせた。二つ並んで置かれた紅茶の力ツブ、ソファから立ち上がつた人物を真つ直ぐに見て言つ。

「瑠璃が長らく世話になつたな、竜」

「いえ、」

目に何か挑戦的な光を認めて男は僅かに目を眇め、だが何も言わずに女の手を引いた。

「行くぜ、瑠璃」

「旦那様、」

立ち留まる素振りを見せた女を訝しげに見る。

「るりはお頼みがあります」

「何でも聞いてやるから早く来い」

女は銀色の瞳で真つ直ぐに見つめた。

「るりは、旦那様とお別れしたいのです」

沈黙の後、男は静かに口を開いた。

「俺は疲れているみたいだな」

ふう、と息を吐くと構わず手を引いたまま行く。動かない女はとてんとよろけた。

「ごめんなさい、旦那様。けれどもつはりゅうと一緒にいたいのです」

「なんだ。何が起きている？俺が寝ている間に何があった？」

男はほとんど困惑した様子で誰にともなしに呟いた。

「るりはもうお役目を果たしたと想つのです。むつみつを自由にしてください、旦那様」

「……なんだよ、それ」

見下ろして、肩を掴む。

「俺がお前を拘束していたといつのか。だからお前は俺の傍にいたといつのか？」

「るりは旦那様がお怒りになるのが恐かつた。けれど本筋はずっとりゅうと一緒にいたかったです」

何も言わず、じっと見る。逸らすことのない銀色の瞳から、その視線をもう一人の男に向ける。厳しく睨む黒い眼だった。

「俺の瑠璃に何をした？」

「るりは誰のものでもありません。るり自身の意志です」

やはりどこか挑戦的な瞳で答える男の前に無言で立つ。

「今までご苦労だったな、竜之介。いつかのお前の望み通り、自害させでやろう」

「旦那様！」

女が庇つように両腕を広げてその前に立ちまだかる。

「竜は何も悪いことをしていません」

ぐつと唇を噛んで、目が潤う。

「 天の時も……旦那様は、天にあまりお優しくなかつた。天は哀しかつた……るりも」

「 天は関係ねえだろ。 そこをどけ、瑠璃。竜之介は俺が手ずから処断してやるう」

「 旦那様は乱暴なことがあります。るりは旦那様の乱暴がとても恐い……けれど、りゅうに悪いことをするの止めなければなりません」

「 瑠璃、お前は夫の俺よりもそいつを庇うのか」

「 るりは……旦那様のほんとうの奥様ではありません」

「 瑠璃！」

もう一度、ぐい、と肩を掴んで女を寄せた。そのまま強く胸に抱く。

「 何故そう悲しいことを言うんだ」

「 るりは、分かっていました。るりは旦那様のお人形……旦那様がお望みならばるりは何でもそのようにしなければなりません。けれど、旦那様が奥様の代わりと思つても、るりはほんとうには代わることができないのです」

「 お前を誰かの代わりだと思つたことはねえ」

「 るりは分かるのです、旦那様……」

女は哀しそうに微笑んで、男の胸を離れた。

「 さようなら、千次様。るりは戻りません。つゅうのところへ行きます」

「 馬鹿を言つた。悪かった、一年もの間寂しい思いをさせた。これからは毎晩一緒にいてやるから気迷うな」

「 そうではありません。るりはもう、嫌なのです。ただ一人でお部屋の中にいて旦那様をお待ちするのも、旦那様が他の女のところへ行つたと分かるのも……とても不安で寂しくて、嫌なのです」

「」

「 りゅうのところで、るりは好きにお外に出ることが出来て、ご使用の方も話しかけてくれて、るりは何でもすることができます。」

一人にはならなかつたのです。るりはとても楽しかつた。

「りが望むのはとても欲張りなことですけれど、」

女は申し訳なさげに眉を下げるが、僅かに微笑む。

「りゅうはるりはもつと好きにしてよいと言いました。りゅうはとても優しい……るりをとても大事にしてくれる。」

「りゅうはすつとるりだけと言いました。毎晩慰めてくれました。」

「りはもつとあこせれたい……」 黙りこくっている男に向かい、氣後れすることなくはつきりと告げた。

「るりはりゅうのところに行きたいです、旦那様」

銀の瞳は真直ぐだつた。

「……分かつた」

その刹那、女は睫毛を伏せる。背後に控える竜之介も了承に驚いた顔をしていた。

女は男に歩み寄り、藍色の扇子を両手に差し出した。男は黙つて受け取る。

「瑠璃……覚えているか」

「はい、旦那様」

滑らかな銀の髪をよけて、それから首に指が絡みつく。竜之介はただそこについて声を発しなかつた。

「瑠璃……」

哀しそうに呟くと、ぐ、と指に力が籠る。女は一瞬背を反らし、

それから唯唯その黒にさすとしがみついた。厳かな、それは何かの儀式のようでいて抱き合つた男女であり、しかしそれは確かに

男が女の首を絞めていた。

「旦那様！？」

俄かの信じられない光景に半ば放心していたが、竜介ははっと氣を戻すと慌てて駆け寄る。

女の手がだらりと下がった。

「ぬつ……ーー。」

首から手が離れ、そのまま細い体は折れるよつに崩れ落ちる。首には斑に藍の跡があつた。

「何故こんなことを……ーー？」

悲痛な叫びを上げて抱き起こした女の頬に涙が落ちる。

黒い背は、何も答える事なく立ち去つて行つた。

『単刀直入に申し上げますと、瑠璃様には身を引いて頂きたいのです』

『え、け、けれども旦那様のお役に立ちたくて、何か、』

『お倒れになつた時、若君はえりか様のお名前をお呼びになりました。若君は必ずや、心深くでは今もえりか様をお想いになられているはずです。若君を変えたのは、えりか様なのですから。……しかし若君の『同情を受ける瑠璃様の存在があつてはお一人の御復縁は難しい』

『るりのあることが……』

『同時に若君が心密かに罪悪感をお覚えなのを私は存じております。竜之介様への御厚遇、瑠璃様へ過保護、度を過ぎる程の若君らしからぬお振る舞いは、御自責の裏返しに他なりません。事実、瑠璃様と竜之介様の縁を引き裂きお一人を遠ざけてきたのは若君なのですから』

『あの、るりはりゅうのことば、』

『これは元々が揃れたこと 私めにお任せください』

『けれど、るりは旦那様の』

『もし若君を本當にお想いになられるのなら、何が若君のお為となるのかお考えくださいませ』

けほんと言つて女は息を吹き返した。

竜之介はほつと息をつくが、眉間に力を入れる。

『怒つてはいけません、りゅう……』

微かな声を出して、瞳は上を見上げた。

「旦那様は、お確かめになつただけです。そうでなければるりは生きていません……旦那様はるりのほんとうを知つて、るりを手離したのです」

「…………るり、やつを言つたこと　いや、何でもない」

「りゅうひ……るりが旦那様とお別れしたいのは、旦那様をあいしているからなのです」

「分かつてるよ、るり……だけどこれからは一緒に生きて行けるんだよね」

「はい、りゅう。旦那様がお壊しにならなかつたということは、るりはまだ役に立たなければならないのです。るりは今までの分りゆうにもたくさんのお返しをしたい」

「いいんだよ、そういうのは。るりは好きなことをしてくれればいい」

「るりはお役に立つことが嬉しいのです」

「僕はるりが笑顔でいてくれたら嬉しいんだよ」

懸命に言う女に竜之介は笑つて言つた。女は何かしゅんとする。
「『めんなさい、りゅうひ……るりは、旦那様に会うことのなれば良かつた……』

「だから、いいんだよ。るりは旦那様を想つていて。僕はそれでいいんだ」

女は、顔を上げて小指を差し出した。

「りゅうは、とても好きです」

「僕も、るりが好きだよ」

小指を絡めて、微笑んだ。ぽろんと零れた涙の粒に、二人とも気づかぬでいた。

「えりか様がお見えです、若君」

「そんな暇はねえ」

男は執務机に座つて書簡に目を通しては休めることなく羽根ペンを動かしていた。紙や本が山のように詰まれている。

「若君、まだ病み上がりなのですから少しお休みになつて下さい」

「俺がやらなきゃ誰がやる」

部屋は机上以外は相変わらず整然として、主人には一見して別段変化も見られない。予想に反した。

「先ほど、竜之介様と瑠璃様がお出になられました」

「そうか」 静かだった。「休憩してやるからコーヒーを持って来い」

「かしこまりました、若君」

退室しかけた時

「待て、川野」

黒の眼。直刃を宛てられたような緊張が走る。

「礼を言つ

男は何か清清しいとも言える表情で、ふ、と笑つた。

「これであいつを殺さずに済む」

「若君」

「川野、お前に見えるか」

主人が視線をやつた窓先を見るが、何か変わった様子はない。

「霧崎は死ぬ」

声も出せない様子を見ると男は面白そくへりと笑つた。

「いや、霧崎が朽ちて初めてこの国は生きる。俺には見える。この国が、この国の人間が力強く生きるのを。土を押し潰していた錘が

壊れ、初めて草木は生えるだろつ

「若君が天様をお出しになられたのは、お戻しになれないのは、草木であつて欲しいとお思いの為ですか」
それには答えず代わりに男は庭に目をやる。

「俺はこの国の土となろう」

「私は最後までお供します、若君」

□元はふ、と笑う。

「早くえりかを帰して来い」

「かしこまりました。それが若君の愛ならば

「

執事は退室した。

男は一人青い空を見上げて微笑する。

「あいつが花を愛しめるように

完

六十八・愛（後書き）

ありがとうございました。

『瑠璃色』の続編としてはここで終りです。

次作には（今度こそ）天を軸とした話を予定していますが、同時に
瑠璃千次えりかにも決着しシリーズを完結したいと考えています。
ここまで楽しんで頂いた方々、ありがとうございました。もしまた
見えることがあれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3157p/>

続瑠璃色紀

2011年7月20日03時12分発行